

# ドラゴンボールコネク ト！Re:Dive

ふぼっ！

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは力の大会で第7宇宙が負けてしまった物語

孫悟空は己の限界を越え遂に、『身勝手の極意』を極めた！そしてジレンを圧倒し勝利まであと一歩……！

しかし、ここで暗雲がかかってしまうのだった。

突如武舞台に倒れ伏す悟空、これを好機と思いき、ジレンの一手が悟空に襲いかかり、武舞台の外へと吹き飛ばされてしまう。

残っていた人造人間17号、宇宙の帝王フリーザが善戦するもジレンには届かなかった。

そして…

大神官「第7宇宙…消滅となります…！」

瞬間皆の身体に光が包まれ…

悟空「皆、ホントにすまねえ…！」 シュン

消滅した…

…のか…？

悟空「ここ…何処だ…？」

見知らぬ地、見知らぬ者達、見知らぬ敵…

これが、一人のサイヤ人と歩む新たなる物語である。

# 目次

第0話 二つの光 ————— 2

第1話～前編～ 転生？した地球育ちの

サイヤ人 ————— 7

第1話～後編～ 二人の大食らい

26

第2話～前編～ 黒猫との出会い

53

第2話～後編～ おにぎり ————— 68

第3話～前編～ みんなで食べましょう

！ ————— 90

第3話～後編～ 食べ物の恨みは恐ろし

い。 ————— 107

第4話～前編～ お掃除ですよ～！

127

第4話～後編～ リマリマ～ ————— 146

第5話～前編～ クスクスクス：

174

第5話～後編～ ユウキ奪還!! ————— 196

第6話～前編～ 星空に語られる人生

223

第6話～後編～ ぼっち卒業!……怪し

い陰 ————— 236

第7話～前編～ 異変 ————— 257



## 第0話 二つの光

ジレン「このような形でお前との決着をつけねばならんのは不本意だ…だが、お前の存在が消えても…お前は俺の記憶の中で永遠に生き続ける…さらばだ…」シユイン！

17号「もつと気を上げろおお!!」

フリーザ「俺にツ、命令、するなあああお!!」

二人の戦士が壮絶な光の中、命を削りながらも力を振り絞る…が、ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!

その爆発は二人の戦士を呑み込み、戦いに終焉を告げる。

悟空「ちきしょう…」

ベジータ「く…クソツタレ…!」

ピッコロ「…くっ…」

悟飯「…皆さん…お疲れ様でした…」

クリリン「…悟空、最後まで俺たちのために戦ってくれてありがとう…」

天津飯「冥土の土産に良い経験が出来たな…」

…  
武天老師「皆…よく頑張ったもんじゃ…悟空、クリリン、流石ワシの愛弟子たちじゃ…」

18号「こういう最後まで、悪くないかもね…」

17号「お前がそんな事を言うなんてな…すまなかつた…」

フリーザ「フン…まあ、あんな地獄に送られるよりはマシですかねえ…」

ビルス「…皆、良くやった…」

ウイス「…ビルス様…」

変えられぬ運命…これも定め…

大神官「これにて…第7宇宙…消滅となります…!!」

それぞれの体が光に包まれ二人の全王の掌が握られる…

悟空「皆、ホントにすまねえ…!!」シユン

こうして第7宇宙は消滅し、これで孫悟空の物語は…

終わらなかつた…

）  
 ???  
 ）

??? 「ごめん、起こしちゃった?…まだ寝てていいわよ。作業に集中したいし。…? あんた誰って顔してるわね。初対面みたいな反応されるとやっぱりちよつと…凹んじやうわ。」

景色一体が美しく、自然を感じられるような謎の空間、そしてそこにいた謎の少女、横たわる少年…

??? 「あたしは…まあ…アメスとでも名乗っておくわ。」

アメスと名乗る謎の少女、その少女は何やら何かを操っているようだった。背後には翼のような機会のようなものが出現していた。

アメス 「あたしは自己修復が終わるまで現実には関われない…だから、あたしの代理としてあなたにはガイド役を派遣しといたわ。…もつとお喋りがしたかったけど…」

そう言った少女アメスの表情は、とても哀愁漂う顔をしていた…すると横たわる少年に光が差し、辺り一帯が光に包まれる…

アメス 「いつまでも…夢は見えてられないから…」 シュン



そうすると少年は雲を突き抜け何処かへと落下していく…

アメス「…行つたわね……………ツ!？」

少年を見送ったあと僅かに身体が震える…

まるで、膨大な力を感じ取つたかのように。

アメス「今のは一体…」

その正体は…？

く  
???  
く

謎の光が降って行く。

それに一人の少女が気づく。

??? 「綺麗なお星様く。ハムツ…うん、うん。」

その少女は大きな大きなおむすびを頬張り、降り続く光に黄昏れていた。

??? 「流れ星？」

この少女は一体？

そして同時刻、同じ場所にもう一つ別の光が降っていく。その光は、少年の落ちるものよりも早く、彗星の如き速さで：蒼き光が落ちていく。そして：

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオン  
!!!!!!

汚れなき草原へと叩きつけられた。

??? 「今のは：一体：」

ここにも一人の少女が居た。その風貌は、耳が人よりも長くとても小柄で、まるで妖精の様な少女だった。

これが：新たな物語の始まりである。

# 第1話～前編～ 転生?した地球育ちのサイヤ人

??? 「コッコロよ…アメス様からの託宣、しかと成し遂げるのだぞ。」

ふと思いつく少女…『コッコロ』という名の少女。

彼女は妖精の様な見た目を持つエルフ族の人間。

彼女の父の言葉を思い出し、自分のすべき事に燃え、奮起していた。

コッコロ「お父様、コッコロはしっかりと主様に支えてみせます。」

そう言い彼女は地図を広げる。

とても古く、西洋にして太古の物の様な地図。現代では中々手に入る物では無いだろ

う。

コッコロ「この先にある丘がお告げにあった約束の地ですね…どんなお方なんでしょ

うか。」

若干不安を感じながらも再び顔を上げる。

コッコロ「うくん…この場所は、先程騒がしい音が轟いた場所…急ぎましょう！」

なるべく早く駆け足で向かう事にし、あの衝撃について興味があるようだった。

辺り一帯が緑に囲まれ、その中央には小さな穴が空いていた。きつと先程の衝撃で出

来たものだろう。

そして中を覗くと：

コツコロ「あの方が、私の…主様…ッ!?」

コツコロは驚愕していた。何故なら、少年の方の腕に野犬が噛み付いていたから…はあるかもしれないが、二人の男が倒れていたからだ。

野犬1「ガウツ！」ガブガブ

野犬2「ガブツ！」グイグイ

そして少年の方を見ると野犬に腕を引っ張られ、そのまま引きずられていたからだ。

コツコロ「あ、主様…!!」

一人の少年ともう一人は一体…？

コツコロ「えいっ！」ガシン

野犬共「アウン！アウン！ハッハッハッハッ！」

コツコロの攻撃により撃退は成功…それでも少年は目を覚まさない。

コツコロ「はじめチョロチョロ…中パツパ。赤子泣いても、蓋取るなく」

少年「ん…」

コッコロの歌声によって少年の視界に光が差す。

やがて重たい瞼を開き、視えたのはコッコロだった。

コッコロ「お目覚めになられましたか?痛いところはございませんか?」

いきなりの質問ラッシュに少年の脳は追いつけない。

少年「…」

何も喋る事はないまま、辺りを見渡してみる。

コッコロ「お怪我は無いようでございますね。とても、良かったです。…あの方は…」

次にコッコロはもう一人の男の方を視る。

上半身は裸で、全身ひどい傷を負っている。

コッコロはそれを見て命に関わるのではないか、と少し冷や汗をかく。

謎の男「…くっ…う…」

コッコロ「!」

少年「?」

差し込んでくる光が眩しいのか顔をしかめながら男は目覚める。やがて、視界は安定

し…

謎の男「…ここは…何処だ…?」

コツコロ「!…良かった、お目覚めになりましたね。」

男もまた現在、自分が置かれている状況に整理できていないのであった。辺りを見渡してみても知った様な風景では無い。

謎の男「オラは…ッ! ベジータ達は何処だ!?!」

彼の知り合いなのだろうか、男はコツコロ達に尋ねる。

謎の男「なあベジータ達を知らねえ…ッ! いっ…てててててッ!」

急にもがき苦しむ男の姿にまたもや驚くコツコロ。

コツコロ「大丈夫ですか!?! 傷が開くかもしれないのであまり動き回らないでください  
!」

謎の男「あっあああ! 悪い悪い…ん? オメエ達は…?」

コツコロ「!…つああ、私は偉大なるアメス様によって派遣されたガイド役、名前はコツコロと申します。主様をお守りし、おはようからおやすみ、揺り籠から棺桶まで、誠心誠意お世話するのが、私の役目でございます。」

そう二人の男に自己紹介を済ませるコツコロ。

コツコロ「よろしければお二方のお名前をお聞かせ願えますか?」

少年「…うん…ユウキ、僕の名は、ユウキ。」

少年の口からはユウキという言葉が出てきた。

幼さを感じるその発言にはとても優しさが込められていた。

コッコロ「!良かった。そして貴方は…」

コッコロが次に尋ねたのは謎の男の方…筋骨隆々と引き締まった体にコッコロは少し見惚れてしまう。

謎の男「ん?オラか?オラの名前は…孫悟空だ。」

コッコロ「ソン、ゴクウさん?…聞いた事の無いお名前ですね…貴方は一体何故ここに?」

悟空「何故かってえ…オラにもさっぱり分かんねえんだよなあ。」

それもそのはず本来悟空は、いや悟空率いる第7宇宙の皆は消滅させられたはずだ。それを知る由もない。

コッコロ「うくん、それは困りましたね。主様は間違っではないのですが…そういうえば主様はアメス様の託宣によるとほとんどの記憶を失っていて、訳が分からないような状況でしょうけれど私をご導きますのでどうかご安心を。」

そう言っ握ったおにぎりを少年、ユウキへと渡す。

コッコロ「よかつたら貴方にも…」

悟空「お!良いんか!ありがとな、丁度腹が減ってたんだあ!」ガツガツ

コッコロ「ギョ!」

ものすごい勢いで無くなり、あっという間に手におにぎりは無くなっていった。

コツコロ「どのような状況かはわかりませんが、これも何かの縁です。よろしければ貴方にもガイドをさせて貰えませんか？」

悟空「ああ！良いさ。寧ろオラの方から願ってえくれえだ。」

コツコロ「えへへ。」

ユウキ「？」

ユウキには何か分からずといった表情でおにぎりを食べている。一口食べてユウキもまた笑う。

三人が仲良く食事をしているとその背後に……

悟空「うん？」

コツコロ「どうかされまし……！」

先程コツコロが撃退した野犬が背後から迫っていた。

コツコロ「まだ諦めて無かったのですね……主様、今の私達に見合った丁度いい相手です。経験を積んでいけば主様本来の力を取り戻し向かうところ敵無しと言えましよう。」

そう言うときコツコロは武器を構え、体制を低く保つ。

コツコロ「私も主様に降りかかる負の粉を払ってまいります！」



ユウキ「…うん」

そう言うのとユウキも立ち上がり自身の手を抜く。

コッコロ「いざ…参ります!」

悟空「…」

悟空はユウキの戦いを邪魔すること無く真剣に見つめている。彼はまず力量を図ろうとしている。

気の大きさによるとそれほど高くは無いが、低いという訳でも無い。

ユウキ「はあああ!!」

そしてユウキが斬りかかる…様に思えたが、

全て攻撃を見切られ反撃を食らう…これの繰り返しだ。

そしてダウンス…そのまま引きずられていく。

コッコロ「主様く!!」

悟空「あちやく…」

追いかけるコッコロと頭を抱える悟空…どうやら二人の想像とは違ったようだ。

LOSE

コツコロ「主様、大丈夫ですか？」

ユウキ「う…う…」フラフラ

コツコロ「申し訳ありません…主様は目覚めたばかりでございましたから。」  
悟空「まあ仕方ねえさ。次頑張りやいいさ！」

コツコロ「あ…はい。」

ユウキ「ふん！」マツチヨ

そうするとユウキはポーズをとる。

だが…

ユウキ「…」ニツコリフラフラ

ドサツ

コツコロ「あ！主様…!!」

悟空「お！オメエ大丈夫か！」

どうやら楽な旅路では無いらしい。

…  
???

同時刻…森の中、一人の少女が川で水を浴びていた。

??? 「ふう〜。後1日程で”ランドソル”に着くでしょうか。」

オレンジ色の髪をした可憐な少女から発せられたランドソルという名の謎の単語。  
ランドソルとは…??

??? 「庭の魔物は硬くて食べられないのが残念です。

…うん、これで良しつと!」

そう言う少女はティアアラを見つめる。

??? 「お父様…お母様…」

オオーーーーーイ!! 誰か助けてくれ~~~~!!

少女の耳に轟いた男の助けを求める声、それに反応し…

少女「どうしましたー!」

少女が向かうとそこには…

アフロの男「いててててててて…」

弟? 「兄貴! しっかりしてくれよ兄貴イ!!」

二人の怪しい男がいた。

アフロの男「目が霞んできやがった…」

弟? 「バカ言ってるじゃねえよ兄貴イ! 目閉じちや駄目だあ。」

少女「魔物にでも襲われたんですか!？」

弟? 「おお! 姉ちゃん、良いところに! 兄貴の持病が悪化しちまってこんなことに:  
あそこの袋見えるか?」

少女「あ……」

男の指差す方には袋があつた。

少女「お薬ですね! 分かりました!」ダツ

弟? 「頼んだぜえ! カワイ娘ちゃあくん!!」

この男達……何とも胡散臭い……

少女「持つて来ましたよおく! っつて、あれ?」

少女は本来居た場所を見ると男達はおらず……

男達「グへへへ」

悪い笑みを浮かべながら少女が所持していた剣に触れていた。

弟? 「やったぜ兄貴イ!!」トコトコトコ

アフロの男「ごつつあんでえす!!」トコトコトコ

そのまま男達は遠くへと逃げていった。

少女「ええく!? 待つてくださくくくくい!!!」

それを少女も追いかける。  
果たして取り返せるのか。

場面は変わって：

コッコロ「着きましたね。」

ユウキ「…」

悟空「ひゃー…ん？あいつ尻尾が生えてっぞ。」

悟空が見た方向には女性が居たのだが、ただの人間では無さそうだ。

耳の位置が人間とは異なっていたり、尻尾が生えていたり。

コッコロ「あのお方はビースト族でございますね。この世界にはヒューマンやエルフ族、ビースト族や魔族など、様々な種族が暮らしております。」

悟空「へえ…ん？じゃ、オメエはどの種族なんだ？見たところ、普通の人間では無さそうだしよ。」

コッコロ「私はエルフ族です。」

そう言い、コッコロはエルフ族であるアピールとし、自身の耳を扱う。普通の人間よりも耳の長さが長いようだ。

コッコロ「ここ」ランドソル」は「アストライア大陸」の最大国家でこの街はその首都なのです。」

悟空「へえ〜：じゃあすげえとこなんだなあ。」

男「良い魚が入ったよ〜！見ていきな!!」

コッコロ「うわあ〜、！あ、すみません。つい物珍しくって〜て、あれ？主様？悟空様？」

（悟空の事は「悟空様」と呼ぶ事にしたコッコロ。）

ユウキ「スンスン〜」

悟空「なんか美味そうな匂いがすんなあ〜。」

二人はコッコロそっちのけで匂いのする方へと釣られていく。

???「はいはい、さあどうぞ〜。」

甲高い女性の声の方へと二人は釣られて歩いていく。

???「いらつしやい！おや、可愛らしい兄妹に〜貴方男前ね、凄い体よ。何にする？」

その声の正体はクレープ屋の主の者であった。

女性は眼鏡をかけており、赤く長い髪が特徴的だ。

コッコロ「わ、わ、私妹では〜」

???「あら？そうなの、じゃ恋人？」

コッコロ「へ?ち、ちちち、違います!!」

???「あははは!んで、どのクレープにする?」

三人はメニユーに釘付けになり、頭を悩ます。

コッコロ「うゝん…」

悟空「全部美味そうだな…」

ユウキ「ん、ん、ん、」

ユウキはメニユーの中から3つ指を指す。

???「毎度!チョコ2つとストロベリー1つね。」

ユウキと悟空がチョコで、コッコロがストロベリーのようだ。

コッコロ「では主様、悟空様、こちらを。」

ユウキ「ん?」

コッコロは懐からコインのようなものを出すと、二人に渡す。

ユウキ「…ハムツ」ガリツ

ユウキは渡されたコインを突然噛りだした。

コッコロ「!?!」

悟空「いい!?!」

ユウキ「ハム…ハム…」ガリガリ

どうやらユウキは使い方を分かってはいない様だ。

コッコロ「ああ！主様、口に啜えてはなりません！それは食べ物ではございません！ペツとしてください！ペツ！」

悟空「ははは！オメエおもしろえ奴だな！」

ユウキ「ペツ！」

コッコロ「ふう…主様は記憶を失つておいででしたね。これはお金です。これを引き換えとしてお店などで商品を得たりする事が出来ます。決して食べ物ではございません。お分かりいただけただけでしょうか？」

ユウキ「…」コッコロ

どうやら理解していただけようだ。

???「おまたせ〜！」

コッコロ「素晴らしいです！これでお買い物は完璧でございますね！」

悟空「次からは間違えんなよ〜！」

ユウキ「うん、お金大切！覚えた！」

???「うん？」

クレープ3つを両手に首を傾げるこの女性…

悟空（…なんか変だな…ユウキとコッコロの気は普通なんだけど…あいつの気は



ちよつと変だぞ…ま、いっか!

悪い奴では無きそうだしな!)

悟空には気というものを感じとる事が出来る。

気とは生き物には必ず流れている、エネルギーのようなもの。その気の大きさによって強さなどが変わってくる。

〜時刻は夕方〜

コッコロ「ハム…美味しい!私、このような食べ物初めて食しました!ハム…とても甘くて、それに、このイチゴのようなソ…あ…」

ユウキ「…」ニコツ

悟空「ん?何だあ?」

コッコロ「きよ、今日はお疲れ様でした。宿をとりますので、お体をお休め下さいませ。」

悟空「何から何までありがとな…オメエほつぺたにクリーム付いてっぞ…:…んん、やっぱ甘くてうめえなあ!」

コッコロ「あ、あわわわ、も、申し訳ありません!」

悟空には悪気があった訳では無い、天然だからこそ、バカだからこそとれる行動である。

悟空「ん？別に謝ることなんて無えぞ。あ、それともう一つ頼みてえんだけどさ、コッ  
コロは服なんて直す事出来るか？」

ここで言うのもなんだが、現在悟空は上のみが裸である。元居た西の都などでこのよ  
うな格好をしていれば通報ものだが、この世界では露出の多い服装も多いらしい。い  
や、普通に上裸は無いが：

コッコロ「あ、はい。元のデザインは覚えていらつしやいますか？」

悟空「ああ！ま、それよりも宿を優先した方が良いけどな。」

コッコロ「分かりました、でしたら向かいましょう。」

こうして3人は宿屋へと向かうのだが：

宿屋「ごめんなあくお嬢ちやくん。ウチも商売だからねえ。お金貯まったら、是非泊  
まりに来てよ！」ニカッ

そして扉は閉ざされた。

コッコロ「え？」

悟空「あちやく。」

コッコロ「すみません…宿代がこんなに高いとは…」

悟空「良いって良いって、気にすんな。」

コッコロ「かくなるうえは父から譲り受けたこの杖を…！」

パシッ

コッコロの両肩には温かいものに包まれていた。

ユウキ「…」ニコッ

悟空「無理すんなって…別にオラは良いからさ。」

王都ランドソルから少し離れた森の中…

3人は野宿をすることにした。

夜は冷え、魔物が多いため焚き火をしながらの休息となる。

コッコロ「…」

ユウキ「…」スヤア

悟空「かぁー…かぁー…」

今日一日だけでも様々な体験があつたためかユウキと悟空は早くも眠ってしまったようだ。

コッコロ(ガイド役として、不甲斐ない私を攻める事なく受け止めてくれるとは…:主様も悟空様もお優しい方…)

そして、コッコロも眠りにつこうとする。

コツコロ（明日こそは…お二方のために…）

ガサゴソ…ガサゴソ…

コツコロ「…？」

眠りにつこうとしていたコツコロが目を開くとそこには…

野犬共「ガール…ガール…グルル…」ズリズリ

奴等がユウキを引きずっていた。

コツコロ「!？」

悟空「ん？…なんだあ…？」

そして、野犬共と目が合う。

コツコロ「…」

野犬共「…」

悟空「…」

その瞬間…

野犬共「ガウ!!」トコトコトコ

コツコロ「!?主様…!!!」トコトコトコ

悟空「あいつらまだ懲りてなかったんか…」

新たな旅の始まり…順調…とはいかないものの果たして、この先どうなります事やら

…

## 第1話く後編く 二人の大食らい

悟空は寝ていた…が、寝ているというよりも瞑想に近い形で睡眠を取っていた。今日一日を振り返るために、これも修行の一貫であるというために。

悟空（どういう事だ？オラは…いや、オラ達第7宇宙の皆は消えちまった筈だ…死ぬっちゅうんなら分かるんだけどよ…消滅しちまったら魂も体も無くなっちまう筈だ。………うくん………やつば思い当たりがねえ、まあ、中々楽しめそうな奴等が居るから良いんだけどさ…

もしかしたら、ベジータ達もいんのか？…いや、それに似たような気は無かった…じゃあ、オラだけなんか？…

………なんか寂しいな…)

今日一日、悟空は常に明るく振る舞っていたが、胸中疑問が渦巻いていた。消滅した筈の自分がなぜ生きているのか…自分は先ず生きているのか？様々な疑問が駆け巡っていた。

悟空（まあ…そのうちなんとかなるか…)

こうして悟空はまた眠りにつく…

く翌朝く

コツコロ「も、ももも、申し訳ございません！野宿には最深の注意を払うべきでした！」

野宿、昨夜ユウキはまた野犬に狙われ拳げ句の果て巢に持ち帰られかけていた。コツコロ「このままだといつか主様が狼に食べられてしまうかもしれませぬ。」

ここで、新たなモンスターが判明した。

あの野犬は“狼”だそうだ。

一見、弱そうに見えるが本当に弱い。

コツコロ「なので私、働きに出ようかと存じます。」

コツコロ「主様はお心のままに、そのへんで遊ぶなり、美味しい物を食べるなりしてくださいまし。…これを。」

コツコロは懐から袋を出しユウキに渡す。

その中身はお金である。

コツコロ「悟空様にも、どうぞ。」

悟空「え？オラもか？」

コツコロ「はい、本日のお小遣いでございます。どうぞ。悟空様には申し訳ありませんが、そのお金で新しいお洋服を買っていただけませんか？勿論、元の服は直すつもりです。」

悟空「あ、ああ悪いな。」

ユウキ「……」

コツコロ「夕刻には戻りますのでここで待ちあわせいたしましょう。」

ユウキ「……」ダラダラ

ユウキは困ったような顔をし額に汗をかく。

コツコロ「おや？慣れない環境で、体調を崩されたのでしょうか。それとも、お小遣いが足りませんでしたか？

すみません……先程のお金が全てなのです。食品等売ってお金に換えてきま……！」ガ

バツ

そうすると二人に止められる。

悟空「だから無理すんなってえ〜！オラ達は良いからよ！」

ユウキ「お金大切……！お金大切！覚えた！」

そうすると3人は何処かへと向かう……

そこは大きな建物で、少し古臭い感じのする洋館だ。



ガシヤ

コツコロ「ここですかね…?でも、よろしいのですか?

働かれるという事で?」

ユウキ「うん。」

悟空「ああ!オラも流石に働かねえとな…怒られつから…」(流石に道着の方が動きやすいなあ…いや、悪くねえんだけんどき。)

悟空は今、代理として適当な服を着ている。

???「どうしました?」

すると3人は一斉に同じ方向へ顔を向ける。

???「私はギルド管理協会の職員『カリン』と申します!分からない事があつたら、遠慮なく聞いてくださいね!」

カリンと名乗るその女性…どこか苛立ちを覚え…いや、何でもない、運が悪いだけだろう。

コツコロ「こちらにお仕事募集の掲示板があると聞いたのですが…」

カリン「はい!ご案内しますね!」

そうして3人はカリンの元へとついていく。

カリン「え〜つと…討伐クエストに護衛クエスト…ダンジョン探索…どれも初心者の

方にはオススメし辛いですね。」

悟空「お！強え奴がいんのかあ！」

コッコロ一枚の紙をとる。

コッコロ「ランドソル周辺に”ドラゴン”の目撃情報有り：財宝等に誘われたドラゴンは人的被害を及ぼすため、討伐隊を求む。」

悟空「お！面白そうだなあ！」

流石戦闘狂、強い奴ほどワクワクするようだ。

コッコロ「私達の手にも負えるクエストではございませんねえ…」

悟空「ええ!?何でだよ面白そうじゃねえか。」

やはり戦闘狂、戦いの事に関しては狂っている。

確かにこの3人の中で悟空の戦闘力は桁が…いや次元が違う。確かに悟空ならば出来るであろうクエストだ。

だが今回は2人もいる。流石に悟空のような戦闘力は持ち合わせていないため、辞めた方が良さだろう。

カリン「あ！でしたらこのクエストなんてどうでしょうか！採取クエストなんです、ガド遺跡に群生するキノコを集めて欲しいそうです。危険も少なそうですし、おすすめですよ！」

コツコロ「……」パア

ユウキ「……」パア

悟空「採取……？採取って事は、集めるっちゅう事か。」

コツコロ「よろしくおねがいます！」

ユウキ「よろしくおねがいます！」

悟空「お、おお、よろしく！」

どうにかクエストを探し出すことが出来たようだ。

一方その頃……怪しき男二人組と少女の爆走劇が繰り広げられていた……

場面は再び戻り……

くガド遺跡く

三人はクエストに向かい、ガド遺跡へと到着したのであった。

コツコロ「こちらです主様、悟空様。」

そうするとコツコロ木の枝を使い、落ち葉を退かす。

そこには……

コツコロ「ご覧ください、このような場所に注意して探してくださいませ。」

そこから出てきたのは様々な種類のキノコであった。

ユウキ「うん。」

悟空「ああ、分かった。」

コッコロ「この森はキノコが豊富なのですね。きっと穴場なのでしょう。」

???「ぶぶぶ…ぶち…ぶち。」

そこにいたのはとても可愛らしい見た目をした茶色の小さいキノコであった。

コッコロ「変わったキノコですね。」

キノコ「ぶちぶち！ぶちっ。」

コッコロ「…ぶちぶちの『ぶち子』。」

コッコロはその小さなキノコに『ぶち子』と名付けた。

ぶち子「ぶちっ！」

コッコロ「報酬のためとは言え、このような小さな命をいただくのは…」

悟空「変わったキノコだなく…オメえ、優しいんだな。」

コッコロ「いえ、弱肉強食の世界とはいえ小さな命を刈り取るには少々ためらいが…」

カアーカアー…

すると森の中にはコッコロ…いや、ぶち子を狙うカラスが沢山いた。それにぶち子も

怯えているようだ。

コッコロ「ぶち子、ここに隠れて…」

そうするとぶち子はコッコロの所持していたポーチの中に隠れた。

少し時間が経ち…

悟空「いや〜…やっぱ暇だなく…何もすることが無え… ……ツ！誰か居る…誰の気だ。」

悟空が気の感知をし、その場に向かってしていると。そこにいたのは…

少女「…」グー

オレンジ色の髪をした少女が倒れ伏していた。

少女「お腹ペコペコ〜…」グー

悟空「こいつの気か。オメエ、大丈夫かあ？つて、あ…」グー

どうやら二人ともお腹ペコペコのようだ。

また時間が経ち…

少女「ハム、ハム、うむ」ガツガツ

悟空「あむ、うむうむ…」ガツガツ

あれから三人は取りすぎたキノコを昼時のためちようど食糧として使っていた。そして悟空が見つけた少女も、その昼食に誘うのであったが、コッコロとユウキは啞然とした顔で見えていた。

少女「うんまーい！」

悟空「うんめー！」

二人の大食らいがここにいたからだ。あつたキノコはほとんど無くなり、二人のモンスタ―が平らげてしまっている。それと同時にコッコロの作ったおにぎりは開始数秒で無くなっていた。

少女「いやゝ助かつちやいましたゝ。見ず知らずの私に美味しいご飯を恵んでくれるなんてゝ。一生恩にきます。」

コッコロ「あの、このような所でどうしたのです？」

少女「はい：実は色々あつて旅をしていたのですが：久しぶりに故郷のランドソルに帰ろうとしていたらお腹ペコペコになりすぎちゃつて：」

コッコロ「行き倒れてしまつたと：」

少女「はい、ヤバイですね！」

少女「ところで貴女達は：」

コッコロ「私達はキノコを取りに：」

少女「おおく！だからこんなにも沢山恵んでくれたのですね！」

コッコロ「良ければもつと：悟空様もどうぞ。」

少女「貴女方は神様ですね！」

悟空「お！まだ食っていいんか！サンキュー！」

一応悟空は神の力を宿した変身が出来る、まあ知る由もないが…二人の大食いはまだ続くそうだ。

そして、その背後に…何やら良からぬ者が…

???「…」

謎の少女が杖を取り出し先端の本のような物が光りだす。それも紫色に、怪しく。

瞬間…

ガサゴソ…ガサゴソ…

キノコとは思えぬ物が地面から生えてきた…

少女「へえ〜ユウキ君にコッコロちゃん、悟空さんつて言うんですかあ。」モグモグ

ガタンツ！

少女「ん？」

コッコロ「あ。」

ユウキ「あ。」

悟空「ん。」

四人の背後に居たのは…

巨大キノコ「ぎいやあああああ！」

数十を越える数の巨大キノコの魔物であった！

巨大キノコ「ぐへへ。」スッ

すると巨大キノコは少女へと殴りかかる。

ドゴオオオン！

少女はそれを軽い身のこなしで回避する。

だが、殴られたその地面には軽くクレーターが出来ていた。まともにくらえばひとたまりもないだろう。

少女「よつと…多分、私を狙ってきたんです。巻き込んだじゃいましたね、ごめんなさい。」

悟空「おもしれえ敵だな。」

ユウキ「…」シヤキン

すると二人は戦闘態勢をとる。

ユウキは剣を抜き、悟空は少し低く構える。

少女「えつと…ユウキ君に悟空さん？」

コッコロ「えつと、お腹ペコペコの『ペコリーヌ』様、と仮にお呼びしますね。」

少女「…！」

コッコロ「乗り掛かった船です。共に窮地を脱つしましょう。」



コッコロによつて名付けられた少女『ペコリーヌ』…  
果たして彼女の戦力は…？

ペコリーヌ「おや!? ペコリーヌつて私ですか! かわいいあだ名をつけられちゃいました! ヤバいですね!…でも、

貴女達の気持ち…嬉しいです!」

巨大キノコ「うらあああああ!!」ドドドドドド

巨大なキノコの軍団が一斉に走りだし、四人へと向かい攻撃を繰り広げようとしていた。

だが…

ペコリーヌ「…ふ!…は!」パシツ スツ

巨大キノコの一発、二発の突きを掌でいなし、背負投を行うなど、かなりの腕の使い方だ。

そしてキノコの軍勢を足場代わりにして前へ、前へと進んでいく。

悟空「中々やるなあ…」スツ

悟空もキノコ達の攻撃を360°、全方位から繰り出されるも

それをノールックで避けていく。

そして放たれた攻撃は同士討ち、仲間へと当たってしまう。

ペコリーヌ「…」

巨大キノコ「うおおおおお…」

巨大キノコ達は高く跳んだペコリーヌを見上げ、顔を絶望した青色に染め上げられている。

ペコリーヌ「…」キイーン

悟空「…！気が少し上がった。」

するとペコリーヌのティアラが輝き出し…気が上昇していく。

ペコリーヌ「はあああああ!!!」

すると落下の速度を利用し右の拳を叩き込む…

キララツツ…

ドゴオオオオオオオオオオオン!!!

叩きつけた拳の衝撃で、辺りに軽い爆発が起きキノコ達は宙へと浮かぶ。

悟空「ひゃあー！あいつまあまあやるじゃねえかあ！」

悟空程には及ばないが、素質でいえば良い線を行っているだろうと、悟空は思う。

悟空「よし！オラもやるかあ！」シユン

巨大キノコ「ぎえ？」キヨロキヨロ

巨大キノコ達は目の前にいた悟空がいなくなった事に気づき辺りを見渡す…だが、どこにもいない…すると…

巨大キノコ「ぐおおお!!」ドゴオン

巨大キノコの鳩尾には鋭い一撃が突き刺さっていた。

その正体は悟空のものである。

悟空「にひひ…パワーだけじゃあ、オラには勝てねえぞ。」

巨大キノコ「ぎやあああああ！」ドドドドドド

すると更に数十体が悟空に押し寄せてくる。

悟空「…ふん！」シユンツ

拳を突き出すとそのまま風のようなものが巨大キノコ達の体を突き抜けていく。そう…拳圧である。

悟空「よっしやあ！もつと来い！」

戦っているのは悟空達だけでなく…

コツコロ「光のご加護を…」シユイイイン

するとユウキの周りが輝きだし、ユウキを包んでいく。

コッコロ「主様の素早さを上げました。これならばきつと……！」  
ユウキ「うん……やー！」

どうやらユウキのスピードが少し上がったらしい。

これならば期待出来るだろう。

巨大キノコ「ふん。」ドン

チョップでユウキは倒された。

なんで負けたか明日までに考えといてください。

まあそれはさておき……

コッコロ「!?あ、ああ……」ガシッ

マイタケ「マイ……タケ……」

どうやらコッコロが敵に捕まったようだ。

マイタケらしい……どうでもいいが、少し危うい状況だ。

コッコロ「主様！」

ペコリーヌ「コッコロちゃん!?!」

悟空「……!」

コッコロは捕らえられ、仲間のマイタケが止めを刺そうとする。

ユウキ「ハ!……」

ユウキの中に記憶が駆け巡る…全てでは無いが…とても大切な…とても残酷な記憶が…

スツ

そしてマイタケがコツココロに斬りかかろうとする。

ガシんツ

すると間に割って入ったユウキはなんとかコツココロへの攻撃を防ぐことができた。

コツココロ「主様！」

ユウキ「ぐ…ぐ…ぐ…」

二人の鏖迫り合いが続き、力はマイタケのほうが一枚も二枚も上だ…このまま続けば

…

だが…

シユイイイイイン

ユウキ「はああああああああ!!!」

ユウキに隠された力があつたのか、その力が今開放された！眩しく輝き、瞳には勇気

が宿っていた！

そしてその光は…

ペコリーヌ「これは…！ふんっ！」ドンッ

ペコリーヌ達を包んでいく。するとパワーアップしたのか、一撃でキノコをふつとばす。

シユンッ

ペコリーヌ「ふんっ！」ドンッ

巨大キノコ「ひいひいひいっ！」

カランカラン

直様捕われたコッコロを救出し、マイタケに回し蹴りを浴びせる。すると天高く舞い、力尽きる。

ペコリーヌはマイタケの落とした武器を拾う。

コッコロ「アメス様のご信託どおり…なんと神々しい。これこそが主様だけの力…

『プリンセスナイトの証』！」

ペコリーヌ「力がどんどん漲ります！ユウキ君のおかげでしょうか？」

コッコロ「はい。いぎ、参りましょう。」

そしてコッコロは再び杖を持って立ち上がる。

コッコロ「風の精霊よ…力を…！」

するとコッコロの周りから妖精のようなもの敵の方へと進んでいく。

そして敵を包み、翻弄する。その隙にユウキは力を押し続け、ついに力勝ちをする。

シユイン…

ペコリーヌはマイタケの古びた剣を持ち輝かしく振るう。

ペコリーヌ「いっっちゃいますよお！」

高く跳び…

プリンセスストライク！

チユドオオオオオオオン!!!

斬りかかるととんでもない大爆発がおき、その形はペコリーヌが身になっているティアラのような形になった。

沢山のキノコ達が飛び散っていく……が…

ペコリーヌ「やりました！」

コッコロ「すごい…！」

ユウキ「…すごい。」

まだだ！まだ終わってねえ！

突如悟空の声が響きわたった。

ペコリーヌ「え？…あ！」

土埃の中からはまだ生き残りの巨大キノコがいた。

運良く避けたのか傷一つ見当たらない。

巨大キノコ「ふんっ…ぐああ!!」スンツ

そしてペコリーヌへと思いつきり右の拳を振りかぶる。

ペコリーヌ「あ！」

ペコリーヌは無意識的に目を瞑ってしまった。

そしてその一撃を迎えようとするが…

ドゴオオオン

殴打した音が鳴り響くが、それでもペコリーヌは吹き飛ばさない。なぜなら…目を開けるとそこにいたのは…

悟空「…」

巨大キノコ「ぐおお!?!」



悟空だったからだ。

ペコリーヌ「あ…悟空…さん？」

コッコロ「一瞬の間に…」

ユウキ「はい…」

悟空は一瞬の間に巨大キノコに蹴りを浴びせ吹っ飛ばす。だが、力尽きてはいないようだ。

悟空「大丈夫か？」

ペコリーヌ「あ！は、はい！助けていただきありがとうございます。」

悟空「良いってもんさ。ただ戦いの中で気を抜くつてのは良くねえ事だけんどな。」

ペコリーヌ「す、すみません。」

悟空「オメエ、さっきのが技か？」

ペコリーヌ「はい！プリンセスストライクです。」

悟空「そうか…皆力みせてくれたみてえだしよ。オラも少しみせてやるか。」

ペコリーヌ「悟空さんの…？」

コッコロ「…力？」

ユウキ「ゴクリ…」

悟空は自身の技の一つを披露する。

腰を低くし、両手を右の腰に持つてくる。

すると悟空の両手には一つの蒼い玉が出来ていた。

ペコリーヌ「す、すごい。」

コッコロ「きれい……」

これが……これこそが……亀仙流の、悟空の必殺技……！

かめはめ波ああああツツツ！！！！

放たれた蒼きエネルギーは一直線へと進んでいき、巨大キノコを丸呑みにした。

巨大キノコ「ぎ、ぎああああああああ！！！！」

呑み込まれた巨大キノコは消滅した。

ペコリーヌ「くっ、凄まじい力……！」

コッコロ「これじゃあ、こちらまで吹き飛ばされてしまいます……！」

ユウキ「うわーっ！」

とんでもない威力のかめはめ波に辺りは風が吹き散らかし、森全体が吹っ飛んでしま  
いそうであった。

やがて、威力は落ちていき……

悟空「ふう…」

ペコリーヌ「す、凄いです！」

コッコロ「あんなにも強い力をお持ちだったんですね。」

ユウキ「悟空！すごい！」

三人は悟空の強さに驚いていた。

悟空「へへ！皆も色々やってくれたかな。それでオラだけ何もしねえって訳にはいかねえし。…おっと、これで終わりか？」

コッコロ「はい！クエスト達成でございます！」

WIN

そして夕暮れ…

ペコリーヌ「大量大量く!!」

コッコロ「これ程の量のキノコが収穫出来るとは…一箇所に集めてカリン様に相談してみましよう。」

ユウキ「OK！」

悟空「おう！分かった！」

コッコロ達は巨大キノコ達を一箇所に集めようとするがその背後に…  
ぷち子（ちくしよー！あと少しであいつを養分にできたのにい〜！）  
どうやら黒幕が見つかったらしい。

ぷち子（こうなつたら、直接寄生してやる〜！）

するとぷち子はコッコロ目掛けて跳び出す。

ぷち子（い た だ き だ ぜ え〜）

コッコロに寄生しようとしたその瞬間…！

パシッ

ペコリーヌ「こんなところにキノコが〜！」

ぷち子よ…諦めろ。その女に掴まれば生きて帰る事は出来ないぞ。

コッコロ「あ、その子は！」

パクッ…

コッコロ「!?!」

ペコリーヌ「うんうんうんうん…」コリコリカリツコリツ

ゴクンツ…

さらばぷち子…また会う日まで…

ペコリーヌ「このキノコ生でもイケますよ！ヤバいですね！」  
すると…

ペコリーヌ「…！」ボフツ

ペコリーヌの顔が真っ赤になり爆発したかのように湯気が出ている。

ペコリーヌ「きゅく…」バタン

コツコロ「ペ、ペコリーヌ様…!!!」

ユウキ「？」

悟空「どうかしたんかあ？つてあれ、なんか今、気が一個減ったような気がすんぞ…  
まあいつか。」

夕焼けが眩しく草原はオレンジ色で満ちていた。

その中、四人は帰路へと戻ることにした。

ペコリーヌ「ぺっこぺこく…ぺっこぺこく…わたしはぺこり…ぺこりくぬう…」

悟空「なんだこいつ、夢でも見てんのか？」

悟空はペコリーヌをおんぶし疑問におもう。

コツコロ「ご機嫌でございますね。毒で無くて良かったえす。」

ユウキ「うん。」

ペコリーヌがおかしいのはあのキノコ、ぷち子のせいである。

コツコロ「あの子はペコリーヌ様の血となり肉となったのですね。」

コツコロは天を仰ぐ：

コツコロ「ぷちペコリーヌ様…」

とうとう始まったわね…あなたの物語が。

あなたの物語がBAD ENDになるかHAPPY ENDになるかは、

神のみぞ知る…

でも、これだけは忘れないで。

この世界の真実、この世界の虚像、それらを解き明かす為に

あなたは沢山の人々と出会うでしょう。

あなた一人の力なんてちっぽけなものだけど…その絆は、

きつと皆を救い出す力となる。

これは、あなたにしか出来ないことだから…

プリンセスナイトのあなたにしか…

ユウキ「コツコロ…悟空…」

コツコロ「は、はい。」

悟空「ん？」

ユウキ「これからもよろしく。」

コツコロ「…勿論です…主様。」

悟空「…よろしくな、ユウキ。」

ペコリーヌ「ご飯おかわり〜！」

物語の序章…各々を知ったのは一部だけ…

彼らに災難が降り注いだとしても、きっと立ち上がるだろう。諦めずに戦うだろう。明日も、良い旅を送るだろう…

沢山の人と出会う…か。

それにしても…孫悟空…貴方は何者なのかしら…  
少し気になるわ…



## 第2話～前編～ 黒猫との出会い

猫「にゃー」

??? 「あんたは行かないの? ……そうよね、仲間なんて。

一人の方が気楽よね。 ……行かなくちゃ。」

あたしのやるべき事を成すために…

—————

コッコロ「主様、悟空様、朝食のご用意を…つて一体どちらに…」

カンツ コンツ

コッコロ「！」

早い朝、まだ太陽も昇りきっていない時刻。

二人は寝床の中にはおらずコッコロは窓の外を見た。

コツコロ「あ…」

ユウキが木の棒を振るい、悟空と実戦形式で練習をしていた。ユウキは必死で振るい、悟空に当てようとするも中々当たらない。その隙をつかれて…

悟空「隙が多いぞお…！」ピンツ

ユウキ「んがつ！」パチンツ

デコピンが当たり、ユウキは悶絶する。

コツコロ「!?あ、主s

悟空「コツコロ止めなくていいぞ。こいつはまだやれる。」

ユウキは痛みのがあまりしやがみ込むが、直ぐに立ち上がり棒を手にとり悟空に向ける。

コツコロ「あ…ふふ。」

成長したユウキを見たことが嬉しいのかふと、笑みがこぼれた。

カチャ カチャ

宿の朝、三人は並べられた朝食をたべていた。

ユウキとコッコロの食べる量は常人のものだが、悟空は…

ユウキ「！」

コッコロ「悟空様、よ、よい食べっぷりですね。」

悟空「おお！うんめえなあ〜！」ガツガツ

コッコロやユウキの10倍以上の量を食していた。

昨日出会ったペコリーヌという少女もよく食べる方だが、

悟空はその少し上をいっていた。

コッコロ「キノコの報酬が多くて助かりました。」

ユウキ「キノコ、さいこう。」

コッコロ「ですが、ペコリーヌ様は大丈夫だったのでしうか。」

悟空「ペコリーヌって、昨日オラがおんぶしてた奴の事か？」

コッコロ「はい。ランドソルに帰るとおっしゃってましたのでまた会えますかね？」

悟空「ああ！」

ユウキ「うん。」

コッコロ「ともあれ、手持ちのお金が尽きる前に、身を寄せる場所を何とかせねば…」

男性「なんだい？お嬢ちゃん。金無いのか？」

すると見知らぬ中年の男性がコッコロ達に話しかけてきた。

悟空「ん？誰だオメエ？」

ユウキ「お金、大切！」

男性「お、おお、そうだな。」

男性「嬢ちゃん達見たところ、この街に慣れてないようだが…ギルドを組むと、管理協会から活動拠点になる家とか貸し出してもらえるんだぜ。」

コツコロ「なんと！そのような素敵なことが。」

男性「この街にいるなら…ギルドを組むのも視野に入れておくといい。」

宿屋の男性「おい！ウチのお客に余計なこと吹き込むなよ。」

男性「お！…悪い悪い。」

宿屋の男性「ふん。」

営業を妨害することに腹がたったのか宿屋の男性の機嫌は良くなかった。

少しして…

ユウキ「ふうく…」

悟空「はあく…食った食った。」

三人は食事を終え机の上には無数の皿が積み重なっていた。…悟空のところに。

コツコロ「あ、あの主様…」

ユウキ「んあ？」

コッコロ「一生懸命、剣の修行をする主様を見て私、応援したく…このような物を作ってみました。」

コッコロはカードとハンコを出してみせ、押してみる。

するとコッコロの顔の形がつき可愛らしいデザインとなっている。

コッコロ「何があるという訳では無いのですが。」

ユウキ「ありがとう。」

コッコロ「…」

ユウキ「頑張る！」

コッコロ「…は、はい！」

悟空「にひひひ！じゃあもつと頑張らねえとな！」

ユウキ「うん！」

今は一撃も悟空に当てることは出来ないが、いつか…いつの日かは当てる事が出来るはずだ。

場所は変わり…

一人の少女が馬小屋で寝ていた。…いや、馬の寝る場所を奪っていた。寝ていた少女の名はペコリーヌ。

ペコリーヌ「ふあゝ。…おはようございます…」

馬に起こされるペコリーヌ：気性難では無くて良かったな。

その後ペコリーヌは川の水で顔を洗い自身の持っていた剣を探すのであった…が…

ペコリーヌ「お腹ぺこぺこ…」

それよりもご飯が先だ。

そして街の何処かではペコリーヌの剣を奪った二人組が、その剣を売ろうとしていた。

—————

コツコロ「何か、良い仕事が見つかれば良いのですが…」

悟空「うくん…なんか良い匂いがしねえか？」

コツコロ「?…たしかに、あちらから。」

ユウキ「…」スンスン

三人は掲示板で仕事を探していたが良い仕事が見つから無いようだ。すると…

おー！すげえ！

民衆の大きな声が聞こえ、三人もそちらへと向かった。

そこに居たのは…

ペコリーヌ「つはあく！美味しい！おかわりくださいーい！」

ペコリーヌが大量の食べ物を買っていた。

コツコロ「ペコリーヌ様！」

悟空「お！ペコリーヌじゃねえか！」

ペコリーヌ「お！コツコロちゃんにユウキ君、それに悟空さん！オイっス！」

悟空「オツス！」

ユウキ「オイっス。」

コツコロ「！」

席を離れコツコロ達の元へ来る。それもすごい速さで。

ペコリーヌ「昨日は街まで送ってくれてありがとうございます。おかげで起きたらスツキリ！ご飯も最高！ヤバいですね！」

悟空「おう、そうか！」

コツコロ「ご無事で何よりです。ところで…」

ペコリーヌ「ああ…これは大食い大会という名の朝ごはんを頂いてました！」

悟空「ひやあく！美味そうだな！」

コツコロ「流石は…お腹ペコペコのペコリーヌ様。」

???「ん？何だ何だ…あ…」

民衆から男二人組が出てきた。

ペコリーヌと目が合うと…

ペコリーヌ「あっ！昨日の

「逃げろー！逃げろー！！」

すごい足で逃げていった。

ペコリーヌ「あ！お薬ありますよ〜！」ダダダ

するとペコリーヌも後を追いかけて走って行ってしまった。

コツコロ達も後を追いかける。

???「…」

路地裏に謎の少女が：

—————

ペコリーヌ「また見失ってしまいました。」

コツコロ「あのお二人はお知り合いなのですか？」

ペコリーヌ「はい！あの人は「脚気」という病気で、私はそのお薬を預かっているんです。」

コツコロ「脚気…？ですが、あの方病人には…悟空さん？」

悟空「なんか来る…！」

悟空がそう言った瞬間、民衆が再び騒ぎ始めた。

先程とは違うようだ。



うわああああー！！！！

キヤアアアアー！！！！

四人「！！！！」

すると目の前には豚のような見た目の魔物がいた。

魔物「プギイイイイイ！！」

コツコロ「こんな人里近くに…どうして！」

ペコリーヌ「街の皆に被害がでちやいますね。ここは私に…」

悟空「てえりやあああー！」シユツ

ペコリーヌが前に出たがそれよりも先に悟空が突っ込んでいった。

ペコリーヌ「ご、悟空さん！」

コツコロ「!?」

魔物「ぐぎやあ！」ドンツ

ズドオオオンツ

悟空にむけて自身の持っていた武器、丸太で出来ていた鈍器を振り下ろす。地面が窪んでしまったがそこに悟空はいなかった。

悟空「こつちだ！」 シュンツ スツ

魔物「ぎや！…ぐおおおおお!!」ズドンツ

悟空は高速で動き魔物の背後をとった、そして顔面に向かって回し蹴り。

魔物「ぐ…ぐぎぎぎ…」

悟空「やる気はまだあるみてえだな。」

魔物「ぐああああ！」ズンツ

そしてまた悟空へと向けて武器を振り回す。

悟空「…」

ペコリーヌ「…って悟空さん!?まだ攻撃してきていますよ!?!」

悟空は構えるのを止めその場に立ち尽くし、目を閉じていた。

悟空（こんくらいなら見なくても大丈夫だ…考えんじやねえ…動くんのだ…）

魔物「ぐぎや！」 シュ シュ ズンツ スルツ

悟空「…」 スツ スツ スツ スツ

ペコリーヌ「え〜!?避けてる!?!」

コッコロ「視認せずに避けるなんて…第三の目でもあるのでしょうか。」

ユウキ「がんばれー！悟空！」

連続で攻撃を繰り広げるも悟空には当たらない。

目を閉じ、考えるのを止め、体だけを動かす。

今の悟空には…良いリハビリだろう…

離れた木陰に怪しい少女が一人

??? 「だらしのないわね…あたしが力を貸してあげる。」ギイイイン…

また、あのときのような紫色の怪しい光を発生させた！

すると…

魔物 「…ッ!?」ギイイイン

悟空 「…ん！」

悟空は目を閉じたままだが感じる事が出来た。

僅かに気の量が増えたことを。

先日巨大キノコと戦った時と似ているような気…

そして邪悪な気…

魔物 「プギヤアアアアアアアアアアアア!!!」シュツ

大きく振りかぶって悟空に叩き落とす…

ドンツ

だが、悟空はこれを片手で受け止めていた。

悟空 「まだまだだなあ…スピードが足りてねえな。」ドンツ

魔物「ぐああ!」ドンッ

右のボデイブローが鳩尾に的中し、魔物はその場にしゃがみ込む、そして…

魔物「ぐああ!」シユンッ

突如頭を抱えられ…

悟空「でえりやああ!!」シユッ

弧を描くようにそのまま投げ飛ばされてしまう。

ドオオオオオオオオオオオンッツツツ!!!

魔物は遠くへと吹き飛ばされ戦力は無くなったようだ。

悟空「ふう。リハビリには丁度いいかな。」

ペコリーヌ「悟空さんすごいですね!力持ちです!」

コッコロ「一体どうやってあの猛攻を回避したのですか?」

ユウキ「悟空、強い!」

三人は悟空の元へとかけよる。

悟空「いやあ…仕組みつてのは無えんだけどよ…ん。」

喋っていたがもう一度魔物の方を見る。

ペコリーヌ「どうかしたんですか?」

悟空「…誰がいる。」シユッ

悟空は駆け寄り、三人もついていく。

そこにいたのは…

悟空「！」

三人「「?……!」」

先程の怪しい少女が魔物と一緒に倒れていた。

コツコロ「これは…」

—————

コツコロ「始めチヨロチヨロ、中ばつぱ。赤子泣いても…

ペコリーヌ「あ！目を覚ましましたよ！」

???「……！」

ペコリーヌ「何処か痛くないですか？気持ち悪いとかないですか？」

コツコロ「良かった。そのご様子だとお怪我は無いようでございますね。」

ユウキ「うん。」

悟空「いやー悪い悪い。」

???「何よあんた…」

コツコロ「私はコツコロと申します。こちらは主のユウキ様、そして悟空様。その方

はペコリーヌ様です。」

ペコリーヌ「えへ。」

???「ペコリーヌ”?”」

コツコロ「魔物が暴れておりまして近くに貴女様が倒れてらしたので。」

悟空「腹減つてんじやねえか?なあペコリーヌ。」

ペコリーヌ「はい!炊きたてですよ!美味しいですよ!」

ジユウウウ…

???「うアツツウ!!!ちよつと!突然人の口に熱々のご飯押し込むなんてどういふ事よ!?!」

ペコリーヌ「あ、ああごめんなさい!ふうー、ふうー…はいっ!」

ジユウウウ…

???「うアツツウ!!!いらんわ!!!」

???「あたしは猫舌なの!余計なことしないで!…あ…ああ…」

悟空「大丈夫か?」ペシッ

???「大丈夫よ、一人で歩けるわ。…礼なんか言わないわよ…あんた達が勝手にやったことなんだから。」

四人「!…!」

ペコリーヌ「あむ。」モグモグ

悟空「うんめえく。」モグモグ

???「何よ何よ何よ！大失敗だわ!?まさか狙っていたやつに介抱されるとか…大体何?”  
ペコリーヌ” ってどういう事よ!!ふざけてんの!!…あいつの名は…!…はあ…  
……………この事があの方に知れたら……………

次こそは必ず仕留めるわ…あの方のために…

この少女は一体何者なのか?敵か、味方か、果たして…?

## 第2話く後編く おにぎり

??? 「ペコリーヌ…だっけ…? やっぱりあいつ、剣を失ってるわね。あいつにとって特別な剣のはずなのに……」

昨日遺跡で襲った時も持つて無かったし、さっきの戦いで確信したわ。今こそやるチャンスよ……!」

なぜ彼女はペコリーヌの剣について知っているのだろうか。そして襲ったというのは…

「ちきしよー!」

??? 「…?」

彼女は木の真下をみるとそこに、例の二人組の男を見つけた。

アフロの男「まさかあの姉ちゃんもランドソルに居たとは。」

弟? 「はあく…パリーナくイ! できると思ったのに…」

??? 「あれは…」

彼女が見た物は男の肩に担がれたペコリーヌの剣と思われる物。

アフロの男「見つかる前にずらかるぞ!」



弟? 「あいよ、兄貴。」

そういうと二人の上空には遠くて見えないが怪しい影が…

アフロの男 「なあ、『チャーリー』よ。」

チャーリーと呼ばれたのが小さいヒョロガリの男のようだ。

チャーリー 「ういつす、チャーリーつす。」

アフロの男 「この前変な街に行つただけだよ…いきなりおばさんに洗剤売りつけられてなあ…つて何だあ?…急に雨でも降んのか? あ…」

小さな影は段々と大きくなっていき、二人の影をも呑み込んだ。二人は見上げると…

「うわあああああ!!!」

ドラゴンが居た。

二人は逃げ出した。

??? 「ドラゴン!? こんな王都の近くで!」

「いやあああああああ!!!」

そのままドラゴンに掴まってしまい。

空の彼方へと消えていつてしまった。

??? 「こいつは使えるかもしれないわね。」

—————

ペコリーヌ「居ないですね、何処行っちゃったんでしょう。」

コッコロ「何か手がかりがあると良いのですが…」

悟空「ん…あいつは…」

三人「「ん?…あ…」」

悟空はいち早く気配に気づき三人も遅れて気づく。

そこに…

???「なんか探し物々?」

あの少女がいた。

コッコロ「貴女は…」

ペコリーヌ「あ!猫舌の人!」

???「うっさいわ!あたしには『キヤル』っていう名前があんの!変な呼び方しないで  
!」

ペコリーヌ「キヤル…キヤルちゃん!!かわいい名前です!ヤバいですね!!」

キヤル「ヤバくないわ!」

悟空「へ…それがオメエの名前か。まあ良いんじゃないか?」

キヤル「あんたは何を評価してんのよ!?!というかあたしの名前をヤバいとか言うな」

」!!」

キヤル「むう……ところであんた達、なんか困ってるみたいだけど、さつきは一応親切にしてもらったし、あたしに出来る事あれば手伝ってあげてもいいわよ。」

ペコリーヌ「ほんとですか？ 実はこのお薬を脚気の人に渡したいんですけど……」

コッコロ「何処におられるのか……」

悟空「オラも一瞬すぎて誰か分からなかったんだ……せめて気が分かればなあ……」

悟空は氣を探知し探し出すことが出来るのだが、面識があまり無かったためどのような人物かは分からなかった。

キヤル「ふくん……なんかさ、特徴とかないの？ 見た目とか持ち物とかさ。」

ペコリーヌ「アフロのおじさんと、細いお兄さんなんですけど。あと、大きな劍を持っていると思うんです。」

キヤル「大きな劍？ あたし、そいつら知ってるかも。」

ペコリーヌ「本当ですか!? 一体何処で……」

キヤル「あつちで」ドラゴンに劍ごと連れ去られてたわよ。」

二人「ドラゴン!?!」

悟空「ドラゴン……じゃあ、あれもあんのかな。」ボソッ

ドラゴンという単語に引っかけた悟空。

生前……？ 悟空達の世界では『ドラゴンボール』という7つ集めると願いを叶えるとい

う願い玉というものが存在していた。この世界にはそれがあのかどうか…

コツコロ「そういうえばギルド管理協会の掲示板に…何でも、”財宝を集める習性”があり最近ランドソル近辺にあらわれていたとか。」

キヤル「なるほどね。つまりあいつらの持ってた剣に興味があつた訳だ。」

ペコリーヌ「大変です!!私の剣を預かってもらつてたばっかりに!!」

悟空「あれオメエの剣だつたんか。」

ペコリーヌ「お父様から授かつた剣なんです!」

コツコロ「……何か、違うような…」

キヤル「あんた達運が良かったわね。あたし、あいつらの居場所分かるわよ。」

ペコリーヌ「本当ですかキヤルちゃん!大好きです!ありがとうございます!!」ダキツ

キヤル「うわつ、ちよ…引つ付くなー!!」

なんかんやあつたが五人でドラゴンの麓に行く事にした。

—————

キヤル「ここよ…」ピョコツ

悟空「デケエなあ…」

キヤル「ちよつと!声が大きいわよ!バレるじゃない!」

悟空「あ、ああ悪い悪い。」

キヤル「あたしはここまでよ。流星にあんなの、相手にしてらんないわ。」

ペコリーヌ「!うんうん。キヤルちゃん、ここまで案内してくれてありがとうごさいます!」

キヤル「!……べ、別に……いいわよ。」

悟空「剣奪い返すつちゆつてもよお……思いつきり啜えてんぞ。んで、寝てるし……んあ?……あ!あいつらあつこにいんのか!」

コッコロ「悟空様お静かに!」シーツ

悟空「!あ、ああ悪い悪い。」

悟空達はドラゴンを突き止める事が出来たが、当のドラゴンはぐつすりと寝ている。

寝ているドラゴンの下には様々な財宝で埋め尽くされていた。そしてペコリーヌの剣はドラゴンが啜えている。

そして、あの男二人組は尻尾に巻き付けられたままの状態だ。救出するにも救出出来る状況で無ければ、奪い返そうにも奪い返せない状況だ。

その状況にコッコロ達は頭を悩ませる。

カチツ           カチツ           カチツ

ユウキ「あ!」ポーンツ

ここでユウキが作戦を思いついた……

その作戦とは…？

アフロの男「ママー!!」シクシク

チャーリー「パッ!!」シクシク

ドラゴン「グルルツ…」

二人の声が大きすぎたせいかドラゴンは目を覚ましてしまう。ドラゴンが顔を上げて瞳に映った者は男二人組では無くなんと…

ユウキ「ふん…ふん…」バサバサ

マントを振り回すユウキであった。

ユウキが編み出した作戦は、自分自身が囷になり注意を引く。その隙に救出、奪還をする事。

とても危険な作戦だが強気に出たため、却下は出来なかった。…だがドラゴンに対して闘牛戦法は通じるのだろうか？

アフロの男「なんだあいつ…？」

チャーリー「おおう…」

シーツ

二人「!?!」

二人は心配に気づく。

ペコリーヌ「もう少し辛抱して下さいね。」

アフロの男「た、助けてくれるのか!？」

ペコリーヌ「えへ♪」

ペコリーヌはドラゴンに気づかれていない。

救出及び奪還は順調に進んでいきそうだ。

ドラゴン「……」ボオオオオオ……

ユウキ「……」

ユウキとドラゴンは真剣に睨み合う。

先手はどう出るか……二人の空間には圧があつた……

バクッ

二人組「ほわあああああああ」

ユウキは食べられた。

!?!?!?!?

そのせいで二人には驚き、絶望が襲つた。

が……

コッコロ「神のご加護を……なんと無茶な。ですが、主様が私を信じて建ててくれた作戦……!力の限り主様をサポート致します……!」キイイイン

コッコロが魔法をかけるとユウキの体は輝きだし……表情が苦痛そうには見えなくなつた。

ペコリーヌ「えい!」トツ

ペコリーヌは暴れるドラゴンの背に乗り頭部の方へと駆けていく。

ペコリーヌ「ありがとうユウキ君。今助けます!」

ペコリーヌは角へと跨り、剣とユウキとの距離が縮まっていく。あと少し……!

キヤル「掛かつたわねペコリーヌ。あたしのプリンセスナイトの力であんたを潰す

!」ギイイイン

悟空「!この気……まさか!」

キヤルの開いた魔導書が紫色に輝きだす。

その光はあの魔物、キノコと対峙した時と同じ色だ。

キヤル「魔物を支配する力でね!さあやっちゃいなさい!」

ドラゴン「グアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」ギイイイン

ドラゴンは正気を失い更に暴れ出す。

ペコリーヌ「うわわわわわわわわ、わあ!」ガアン



ドラゴンは頭を振り回しペコリーヌ達もろとも岩にぶつけてしまう。

コッコロ「!?ペコリーヌ様ー!!!」

悟空「似たような気と思ったら、あいつだったんか…!」

悟空は既に確信していた。

暴走した理由もモンスター達の異変も。

キヤル「良いわよその調子!ガンガンいっちゃいなさい!」

ドラゴン「グアア!」バサバサ

ドラゴンは翼を広げ上空へと昇っていき、そのまま飛び去っていく。

コッコロ「主様!ペコリーヌ様く!!」

悟空「コッコロ!オラの背中に掴まれ!」

コッコロ「え?でも…」

悟空「話は後だ!あのまま行っちゃってもいいのか!」

コッコロ「!は、はい!」

言われたままコッコロは悟空の背中へと掴まる。

コッコロは何がなんだかわからない状況だが最驚くことになるだろう。

悟空「しつかり掴まってるよ…ふんっ!」ボオオオ

コッコロ「!?これは…!」



コッコロ「ペコリーヌ様が！」

悟空「あいつ！ツ…」ドシユーン

悟空はもう少しスピードを上げペコリーヌの元へと行く。

悟空「掴まれ！」

ペコリーヌ「！は、はい！」パシッ

ペコリーヌは悟空の手を取り落下は防がれる。

悟空「ふう〜あつぶねえ〜。ちゃんと前は見なきやだめだぞ〜。」

ペコリーヌ「うう…すみません。」

悟空「ま、反省はあとだ。…三人をどうにかしねえとなあ。そのまんま殴っちゃまえばいけるけどもしもの事があつたらなあ…」

もちろん悟空はあのドラゴンを倒す事が出来る。

その差は天と地程の差で出来ていて負ける事は決して無い。とはいえ、救出。しかも三人、位置すら安定せず万が一があれば大惨事だ。

キヤル「しぶといわね…これならどう!!」キイイン…

ドラゴン「ツ…！」バサッ

ドラゴンは更に上空へと昇り、不規則な動きをしている。

悟空「操られてんのか…つかまつてる！」ドシユーン

コッコロ「もつと速度を上げるのですか!？」

ペコリーヌ「目が開けませーん！」

キヤル「それ！」キイイン：

ドラゴン「ツ！」シユツ

今度は急上昇からの急降下。

このまま振り落とされれば、ひとたまりもない。

悟空「チツ：ちよこまかしやがるな。」

コッコロ「今度は下ですか。」

ペコリーヌ「ユウキくーん！待っててくださいーい！」

そこからも空中戦が続いていた。

キヤル「これで終わりよ！」キイイン：

今度は振り落とすためでは無く悟空達にむけて突進してきた。

ドラゴン「グオオオオ！」

コッコロ「来てますよ！」

ペコリーヌ「躲さないと！」

悟空「まだだ！」

バサツ…！

ユウキ「悟空ー!!」

なんとなんとここに来てユウキの作戦成功か…

唾えられていたユウキは自身のマントをドラゴンの目に被せ視界を遮った。

悟空「よし、…ふんっ!!」ドガンッ

ドラゴン「グアア!!」

宙返りをした勢いで右の踵落としを額に叩き込む、すると

さつきよりも勢いよく降下していく。

二人組「「やったー!!」ってうわああああ!!」

ドラゴンはヨロヨロと飛行し、次々と小山を破壊していく。それはやがてキャルの元へと帰ってくる。

キャル「!?」って…うわ、うわああああ!!」

ドシイイイイン

キャル「ツ…いつて…!!」しまった!」

ドラゴンはどうか意識を保っており、その瞳には魔法陣のようなものは映っていない。すなわち、洗脳は解けた…

ドラゴン「グアアアア!!」

キャル「ツ…!!」

ドラゴンはキヤルへ襲いかかり、鋭利な爪で引き裂こうとしていた。

しかし…

シユインツ！

ドゴオオオオン!!

キヤルに攻撃が当たった事は無かった。

なぜなら…

コツコロ「あれ？いつの間に…って、ドラゴン!？」

ペコリーヌ「あ、あれ？私達飛んでたのでは？」

悟空達が目の前に現れたからだ…

悟空「……………悪戯はほどほどにしとくんだぞ。」

キヤル「へ…あ…」

キヤルも何が起きていたのか理解しきれなかった。

目の前に突然現れ、素手でドラゴンを押し飛ばす。

キヤパオーバーを起こすのも無理はなさそうだ。

悟空「ほら、これ大事な物なんだろ？」

ペコリーヌ「！私の剣!!どうしたんですか!？」

悟空「どうしたも何も殴った時に口が開いたから奪っただけさ。それにユウキもあの二人も開放されたみてえだな。」

ペコリーヌ「悟空さん流石です!ヤバいですね!」

悟空「おう!あとはオメエが決めな。」

ペコリーヌ「え?私ですか?」

悟空「ああ。あん時よりも力出せるだろ?見せてくれよ。」

ペコリーヌ「はい!任せてください。」

ドラゴンはまだ目を開き、今度こそは仕留めようとブレスを吐く準備をする。それに對してペコリーヌは剣を構え、力を込める。

キヤル「あんた、それ。」

ペコリーヌ「キヤルちゃん無事ですか?これはどうにか悟空さんが取り返してくれました。」

ドラゴン「グアア!」ボオオオオオオ

灼熱のブレスを吐きペコリーヌ達を一蹴しようとするが…

ドンッ

ペコリーヌはブレスを一刀両断に斬り裂く。

ペコリーヌ「やっぱり使い慣れた剣は良いものです。」

キイイイイイイン

ペコリーヌの全身が輝きだし刀身がオレンジ色に帯びる…

悟空「こいつはたしかにすげえな…」

ペコリーヌ「全力、全開!!」

プリンセス・ストライク!!

キラツ…

ドオオオオオオオオオオオンツ!!



辺り一帯が爆発に見舞われた。

これが本来の力、本来のペコリーヌの全力。

ドラゴンを完全に制圧し、照らされた光は勝者を映す。

キヤル「…！」

—————

アフロの男「ありがてえ、ありがてえ。」

チャーリー「ほんともう、マジ感謝!!」

ペコリーヌ「さあ！これどうぞ！」

三人の救出にも成功しドラゴンを倒す事もできた。

各々は労り、感謝し涙を流す者も。

コツコロ「主様、あまり無茶をしないでくださいませ。」

ユウキ「うん。」

ペコリーヌ「ユウキ君や悟空さんのおかげで助かっちゃいました！キヤルちゃん！

キヤルちゃんもありがとう！」

キヤル「あ、あたしは別に…」

ペコリーヌ「キヤルちゃんが案内してくれたからおじさん達も助けられたし、大事な

剣も戻ってきたんです。」

キヤル「バカじゃないの…」

キヤルは感情を表に出すのが苦手なのかきつい当たりをしている。だが、助けられた事は感謝しているだろう。

悟空（…：…：なんか、ベジータみてえな奴だな…根つからの悪つ中訳じゃなさそうだし…様子見てみつか…）

—————

その後、男二人組と別れ夕刻、各々が帰路に戻るところだが…

ペコリーヌ「キヤルちゃん！一緒にご飯食べましょう！」

キヤル「は？」

ペコリーヌ「もう熱くないですよ！昼間のご飯をコツコロちゃんがおにぎりにしてくれましたから！」

悟空「まだ残ってたんか…」

キヤル「い、いらぬいし！」グッ

お腹が鳴り顔を赤く染めるキヤル…

やはり少しベジータに似ているかもしれない。

ペコリーヌ「はあああー！ やつぱりご飯は命のエネルギー！」

ユウキ「うんうん」モグモグ

悟空「冷えてもいけない！」ガツガツ

ペコリーヌ「ご飯はいつでも美味しいですが、やつぱり皆で食べると格別です！……ずっと一人で旅してましたから、なんだか嬉しくなっちゃいます。ヤバイですね！」

悟空「……そうだな。確かにその通りだ。飯ってよ、一人で食ってももちろんうめえんだけどよ、皆で食った時が一番うめえんだ。」

コッコロ「確かに残ったご飯を握っただけですが……はむっ……うん……うん……美味しいです！」

悟空「……だな。」

ペコリーヌ「そうだ！ 私達で美食“ギルド”を結成しませんか？」

コッコロ「ギルドを？」

ペコリーヌ「はい。みんなで美味しいものを求め、活動するギルドです！」

悟空「そいつあ楽しそうだ……よっしゃ、オラは乗ったぞ。」

コッコロ「願ってもない申し出です。私達もギルドを結成したかったので。」

ユウキ「うん！」

ペコリーヌ「キャルちゃん！ キャルちゃんも入りましょう！」

キヤル「はあ!?! 入るわけ無いでしょう!?! いつあたしがあんだ達の仲間になったのよ! 勝手に盛り上がりたくないですよ。」

ギルドの入会を拒否し、行く宛も無いまま歩きはじめ。

悟空「…」

ペコリーヌ「…」

コッコロ「…」

ユウキ「…」

去っていくその姿はとても小さく縮こまり、先程のような威勢はなくなっていた。どこか寂しさを感じさせていた。

キヤル「ばか、ばか、ばか、バカ! 何をやってんのよあたしは! こんなんじやあたしはあの御方に…」

キヤルは戯れるのが嫌いなのか、それは分からないが誰かから認められたいから…それが行動源になっているのだろうか。自分の在り方に少し戸惑いつつも、欲のまま動きたいような…路頭に迷う仔猫のように弱々しく、今の姿は惨めであった。

キヤル「……仲間なんて……はむ……」

キヤルはコッコロから貰ったおにぎりを一口頬張る。

おいしい…

もう熱くは無いようだ。

## 第3話く前編く みんなで食べましよう！

朝方、キヤルは考えていた。ペコリーヌという少女についてもだが、もう一人…孫悟空”という男について。

キヤル「んくくくッ！なんなのよ！あいつの強さチートすぎだわ！魔法は使うし、空は飛ぶ！おまけに対人戦も強いじゃないのよ!!」

キヤル「それに…ペコリーヌだつて…剣を使った時は…でもでもでも！あいつらにだつて弱点はある筈！」

首を洗つて待つてなさい…ペコリーヌ…孫悟空…！

黒猫の眼は怪しく光る。

く同時刻く

ペコリーヌ「むにやむにやむにや…お腹ペッコペコく」

孫悟空「かくつ…かくつ…」

この先本当に大丈夫なのだろうか…？

その日キヤルは奮闘していた。現状のキヤルという少女の力では孫悟空もペコリーヌをも凌ぐ力は持ち合わせていなかった。鍛錬を積めば追いつけるかもしれないが何年かかるかも分からない。そこで思いついたのは「尾行」ストーリーだ：まず比較的危険度の低いペコリーヌの跡をつける。

キヤル（悟空……もしかするとあいつはあたしの正体について不信を持つてるかもしれない……だけど！ペコリーヌなら問題無い！私を疑ったような動作も無いし……これは行ける！）

キヤル「ゆつくり観察してあんたの弱点を暴いてやるわ！」

キヤルの作戦は上手くいった……はずだったが……

ペコリーヌ「たのもーう！」

これで何軒目だろうか……飲食店にしか赴いていないのは……

先程からペコリーヌの跡をつけてきたがどれもこれも……行き先は飲食店。食べることにしか考えていないのだ……

キヤル「はあ………！出てきた！」スツ

飲食店から出てきたペコリーヌを見つけてすぐさま建物の影へと隠れる。

「ペ」「姐さんー」

ペコリーヌ「あつ！脚気の人！オイッス！」

二人「オイッス！」

そこ居たのは先日剣を盗まれ、ドラゴンから救出した男二人組。チャーリーと『イカツチ』だ。

細い男がチャーリーで元アフロの男がイカツチだ。

イカツチ「探しましたよペコ姐さん！」

チャーリー「助けてくれたお礼させてもらってませんよ！」

イカツチ「行きつけのうまい店があるんで！」

ペコリーヌ「ご飯ですか！ヤバイですね！」

二人組「ヤバイヤバイ！！！」

そのまま三人はステップをしながら行ってしまった。

それを陰から見ていたが：

キヤル「はあ…」

呆れ顔のようだ。

—————

場所が変わって：

カリン「ギルド申請？」



コツコロ「はい。一緒にギルドを組みたい方達が出来まして。」

カリン「まあ!それは良かったですね!では早速登録を!」

コツコロ「いえ...!今すぐという訳では...」

コツコロ「一応...申請書を頂いておこうかと...」

カリン「!...その方達と出来るといいですね。」

カリンから申請書を貰いそれを見つめると笑みが溢れる。

コツコロ「はい。」

く 広場 く

ユウキはコツコロから貰ったハンコとその用紙を眺めていた。隣りにいる悟空は目を瞑って瞑想をしていた...が...

悟空「!...あいつの気...」

ユウキ「ん?あ...」

悟空が目を開くとユウキも反応する。

そこになんとも弱々しい女性が今にも倒れそうでした。

??? 「はあ...はあ...!」 バタンッ

言ったそばから倒れてしまった。

気はほとんど無くあまり生気を感じられない。

悟空「オメエ大丈夫か！」

悟空たちは駆け寄る。

???「あなた達は…？」

悟空「オラか？オラは孫悟空だ！つじやねえ！オメエ今にも死にそうだぞ。怪我は無

さそうだけんど…あ！あつたあつた、ほらこれやるよ。」

悟空は葉で結んでいたおにぎりを一つ渡す。

本来ならば”仙豆”という不思議な豆を与えてやりたいところだが生憎持ち合わせ

ていない状況だ。

悟空「今これしか持ってねえんだけど…いいか？」

ユウキ「僕のもあげる！」

ユウキも自身のおにぎりを渡す。

悟空「じゃあな！なんか分かんねえけど無理すんなよ！」

そのまま悟空とユウキを去っていき二人を見つめる…

その瞳は…

???「ふふ…ふふふ…」ギラッ

獲物を見つけたかのような瞳だった。

悟空「!…なんか今寒気がしたぞお。」

ユウキ「大丈夫? 悟空?」

悟空「あ…ああ。多分な。」

すると丁度コッコロが出てくる。

コッコロ「主様〜! 悟空様〜!」

丁度コッコロが出てくる。

悟空「お! ちょうど終わったか〜。」

コッコロ「おまたせいたしました。申請書頂いてきましたよ。」

悟空「ああ!」

ユウキ「うん!」

コッコロ「では参りましょうか。」

こうして三人は残りの誘いたい仲間を探すべく街をぶらぶらと回る。

悟空「居ねえなあ…。」 氣「使えば楽だけどまあいつか。」

コッコロ「……………悟空さん。以前から思ってたのですが悟空さんは魔法を使えるので

すか? 空を飛び、手から波動の様なものまで出せますし…。」

悟空「ん? あゝ魔法とはちよつと違うんだ。オラが使ってるのは、氣、ちゆうやつ

だ。」

コツコロ「気……ですか……？」

悟空「ああ。生き物ならみんな流れてんだ。それが大きいか小さいかで強さも変わってくるんだ。でも、扱いに慣れたらわざと小さく出来たりするんだ。」

コツコロ「なるほど。私達でも頑張つて会得できるといふ事ですね。……では先程『気を使えば楽』というのは？」

悟空「居場所も分かるようになってんだ。みんなそれぞれ気は違うからな。兄弟でも少し似てるけど別モンなんだ。」

コツコロ「すごいですね。……うん？なにやら騒がしい様子ですが……」

コツコロ達は騒がしい方へ行くと着いたのは食堂。

コツコロ「あそこですね。おや？あれは……」

その食堂の窓から覗くようにして佇んでいたのは……

キヤル「……！いつまで食べてんのよあいつ！こつちは朝から何も食べずに頑張つてるのに！いい加減尻尾出しなさいよね！そしたらあたしがギツタンギツタンにしてやるんだから！」フリフリ

尻尾を揺らしながら独り言……端から見ればただのやばい奴である。

悟空「オメエこんなとこで何やってんだ？」

キヤル「んにやあああああああ!?!?」

キヤル「急に後ろから喋りかけんな!ぶつ殺すぞ!」

悟空「なんだよ声かけてやったのによお…とところで何してんだ?」

キヤル「べつべべべ、別に、ちよつとお腹空いてたからどんな料理を出してるのか気になつて見てただけよ。」

コッコロ「それは丁度良いとおもいました。」

店の中から…

ペコリーヌ「マスター!おかわりお願いしますーす!」

コッコロ「ペコリーヌ様もいらつしやるようですし、ご一緒にいかがですか?」

キヤル「なんであたしがあんたらと一緒に…」グウ

よつぽどお腹が減っていたのかキヤルのお腹が鳴る。

悟空「なあんだ!やつぱり腹減つてんじやねえか!」

キヤル「うるつさいわねえ!…:…:…:」

恥ずかしく思い、顔を真っ赤に染めほつぺを膨らせている。

く店内く

ペコリーヌ「?あ!みんな!オイッス!」

コツコロ「おいつす。

ユウキ「おいつすー。」

悟空「オツス！」

キヤル「…」

ペコリーヌ「ちようどイカツチさんとチャーリーさんが食べ終わったところなんです

！一緒にご飯食べましょ！」

イカツチ「うぷ…あんちゃん達も食ってくれ…うつ…」

そして皆で料理を堪能する。

コツコロ「こちらのお店、本当に美味しゅうございますね。」

ユウキ「最高！」

悟空「うめえ！これも食えつぞ！」ガツガツガツ

ペコリーヌ「ですよね！悟空さんも私と同じくらい食べますね！ヤバイですね！…？  
おや？キヤルちゃんなんか元気ないですね？どうしたんですか？貧血とかですか？ご  
飯食べれば解決ですよ！どうぞどうぞ！」ググググ

キヤル「ちよ！料理押し付けんな！」

ペコリーヌ「ありや。」

悟空「早く食わねえと冷めちゃうぞ?…!あ、これもーらい!」ガツガツガツ

キヤル(なんでこいつグイグイ来んのよ!人の気も知らないで!)

ペコリーヌ「あれ?この料理苦手ですか?じゃあじやあここにメニューありますから好きなどうぞ!」

ペコリーヌから渡されたメニューを見ると呆れたように

キヤル「フィッシュ&チップスで…」

頼んだのだが…

マスター「ふう…:はあ…:無いよ、もう食材が無い。」

らしい…

ぐう…:

キヤル「あんた達が馬鹿みたいに食ってるから!この口!この口が悪いのね!」グググ  
グツ

ペコリーヌ「いひやい、いひやいでふ〜」グググ

悟空「ハツハツハ〜!ペコリーヌ食い過ぎだぞ!」

キヤル「あんたもよ!あんたのこの口も一緒に〜!」グググ

悟空「いででで!はにやひへふへよ〜!」グググ

二人はキヤルに思いっきり口を引っ張られる。

コッコロ「仕方ありません。他のお店に…」

ペコリーヌ「あわてないでコッコロちゃん！実はこのお店には裏メニユーがあるらしいんです！」

キヤル「裏？」

悟空「メニユー？」

するとマスターは渋い顔をする、

マスター「お客さん…その話一体どこで…」

ペコリーヌ「ふっふっふん…イカツチさんから聞いていたんです……………マス  
ター！裏メニユーを！」

注文をすると次第に料理が並んでくるのだが…

キヤル「……」

どれも虫を使ったゲテモノ料理だった。

悟空「へえ〜！うまそうだなあ〜！」

ペコリーヌ「ではでは！本日のお楽しみ！虫料理パーティーを開催します！」

キヤル「ちよつと待った！今虫!?虫って言ったあ!？」

ペコリーヌ「虫料理というのは虫を使った料理のことですよ。」

キヤル「意味分かんない！バカなんじゃないの〜！」



コッコロ「私、興味津々でございます。」

悟空「どれから食おうかな。ユウキはどれがいいんだ？」

ユウキ「これ！」

悟空「お！これか、ほらよ！」

ユウキ「サンキュー！」

キヤル「あんた達！一旦落ち着いて！普通料理に虫入ってたら皿ごと捨てるわよ！」

ペコリーヌ「もうキヤルちゃんつたら！」

キヤル「！」

わがまま ♪

キヤルの口へと虫料理が運ばれていく。

キヤル「やめて〜!!優しい笑顔で原型をとどめた虫を近づけないで!ちよつと!あんなたちこいつを止め:!!」

キヤルは絶句する…

悟空「これうめえぞお〜!」バリボリバリ

ユウキ「うん!おいしい!」バリボリ

コッコロ「なるほど!これはなかなか美味でございますね!」バリボリ

キヤル「あ…ああ…」

キヤル以外は虫など気にせず食べている…

キヤル「ちよつとチビ！そいつの皿に虫を入れるなあ！てか食わせるなあ！大事なご主人様なんですよ！」

コツコロ「大事だからこそ豊かな食生活を送ってほしいのです。」

いつだって…食べることは、生きること…

ペコリーヌ「そのとおり！ご褒美にフランベした虫料理をどうぞ！」

悟空「お！オラにも分けてくれ！」

ペコリーヌ「良いですよ〜！」

コツコロ「はむ…ん…んむ…！これも美味でございますね！」

悟空「なかなかいけるなあ！」

キヤルは絶望している…

この状況に…この料理に…このメンバーに…この店に…

キヤル「もうあんたたちとは付き合ってらんない…ツ!？」

悟空「そう固えこと言うなつて〜。ほら！」

悟空はそう言うときキヤルの口に虫料理をねじこむ。

だんだんとキヤルの顔は真っ青になっていき、声にならない嗚咽を上げる…そして倒

れ伏す。

…が。

キヤル「……うそ…美味しい。」

ペコリーヌ「でしよう! いやあ良かった良かった! …でもみんなで食卓を囲めるのが嬉しくてつい、はしゃいしゃいました。反省しますね。ごめんなさい。」

悟空「オラも悪かったな。まあでも美味かったならそれで良かったけどな!」

キヤル「……ふん! 今日はお腹が空いてるし特別に食べてあげる。いい? 特別だからね!」

ペコリーヌ「はい! じゃあじゃあまずはこのイモムシの」

キヤル「そんな肉厚なやつじゃなくてライトなやつにして!!」

虫料理は美味しかったが、まだまだ…軽い物からだ。

ペコリーヌ「ふあゝ! 美味しかったゝ! 幸せです!」

悟空「いやあゝ! 食った食ったゝ!」

キヤル「見た目どうにかなんなかったの、ハードル高すぎでしょ。」

ペコリーヌ「まあまあ、これでキヤルちゃんも新しい扉も開いちゃいましたね!」

悟空「これからは食えるようになったな！」

キヤル「無理やりこじ開けたんでしようが！あんたらが！」

本当にもう…ヤバイわよ…」

ペコリーヌ「？」

悟空「？」

キヤル「なんで分かんないのよー！」

コツコロ「あの！キヤル様、ペコリーヌ様。」

ペコリーヌ「？」

キヤル「？」

コツコロ「征悦ながら私、ギルド申請書を頂いてまいりまして…改めて皆様とギルドを結成したく。」

ペコリーヌ「ありがとうコツコロちゃん！なんて出来た娘なんでしょう！」

ペコリーヌに抱きつかれもみくちやにされるコツコロ。

ペコリーヌは賛成のようだが…キヤルは…

バンツ

机を叩きキヤルは少し真剣な表情になる。

キヤル「ちよつと待った…あたしは入らないって言ったわよ。悪いけどギルドなんか

に興味無いから…じゃあね…ごちそうさま…」

そう言うときャルは店を出て行ってしまった。

キヤル「全く何を言っているんだか! だいたいあたしの使命はペコリーヌを始末することなんだから! 一緒にご飯食べてる場合じゃないってのー!!…う…まだ口の中に虫の風味が…」

キヤルは近くにあつた果実を手に取り一口かじる。

キヤル「はむ…!! スツキリ!! さっきの料理にこれ合うんじゃない?」

しばらく一人で果実を堪能していたとき…

??? 「なんだ? ご機嫌ではないか。」

おぼさ…高れ…いや、立派な女性がいた。

服はかなり露出が多く、そこらにいる者達とは何かが違う。

キヤル「べ、別に。」

??? 「ふん…こう平和だとつまらんな。つい、何か起こらぬかといらぬ事を考えてしま

うよ。…お前もそうでは無いか?」

キヤル「あ、あたしは…あんたと一緒にしないで。」

された質問に対して良く思わなかったのか背を向け歩き出す。  
が…立ち止まり…

キヤル「……………でも、あんたの満足いくような奴が”二人”いるわ…その内一人は規格外…あんたでも無理かもね。」

そう言うとまた歩きだす。

???「ほう…満足いく…か。ふん…それは楽しみだな…かわいい仔猫。」  
不敵な笑みを浮かべ、その顔は美しさと狂気を孕んでいた。

### 第3話～後編～ 食べ物の恨みは恐ろしい。

コツコロ「バイト？」

ペコリーヌ「はい。実はお金が尽きてしまつて…」

マスター「ふうく…はあく…うちの裏メニューの良さが分かるなんて見どころあるぜ。」

ペコリーヌ「と言つて。私をバイトとして雇つてくれるようになったんですよ！」

悟空「そりや良かったな！」

ペコリーヌ「はい！あの店の味と素材の設定には、思わず唸っちゃう凄さがあるので光栄です！」

コツコロ「…」

コツコロはギルドを結成するための紙を握りしめていた。

ペコリーヌにこの事を打ち明けようとしていたが、うまく話を切り出すことが出来なかつた。

ペコリーヌ「いらつしやいませー！」

男性「お！新しいバイトの娘かい？元気良いねえ！」

ペコリーヌ「えへへ！そうですか？褒められちゃった！」

男性「褒めちゃった！」

ペコリーヌの活躍は早速評判が良く、どんなお客であろうとすぐに打ち解けることが  
出き人氣も高かった。

ペコリーヌの明るい性格と可愛く、愛くるしい表情によつて男性陣のほとんどは虜に  
なっていた。

コツコロ「はあ…ギルド結成への道は遠いですね…」

悟空「そうだな。まあでもそんな暗い顔すんなつて。ほら、これやるから元気だせ！  
な！」

フオークに刺さつた魚料理をコツコロに向ける。

コツコロ「…はむ…うん…うん…魚料理も美味しゆうございます。」

ペコリーヌ「マスター！オーダー入りまーす！」

チャーリー「ウエイトレス姿も似合つてますねえ〜！」

ペコリーヌ「本当ですか!?ヤバイですね！」



二人組 「「ヤバイヤバイ!!」」

イカツチとチャリーもペコリーヌの働く姿に釘付けにされていたらしい。そんな中、木製の扉がぎこちなく開く。

??? 「ちよ、ちよつと『ミソギ』ちゃん押さないで!」

ミソギ 「うわゝ! こういうお店初めて入っちゃった!」

??? 「静かに! 他のお客さんに迷惑だよ!」

小さな少女三人組が入ってきた。

ペコリーヌ 「おや! かわいいお客さんですね! いらっしやいませ!」

三人組 「「ここここ、こ、こんにちわ!!!」」

ペコリーヌ 「はい! こんにちは! 空いてる席にどうぞどうぞ!」

三人組 「「こは、はい!!!」」

コポコポコポ

2つのクリームソーダから泡が立つ。

皆もした事は無いだろうか、そしてよく親に注意される。

??? 「こら！二人共！」

二人 「ええ、おもしろいのにく。」

??? 『『キョウカ』ちゃんもやってみなよ。』

キョウカ 「むう。『ミミ』のお母さんに言っちゃうよ。」

ペコリーヌ 「かわいいおひげですね！」

二人 「…／／／／／／／／」

ペコリーヌ 「この店初めてなんですか？」

ミソギ 「こ、子供扱いしないで！あたし達『リトルリリカル』っていうギルド組んでるんだから！」

コツコロ 「なんと…」

ミソギ 「…ま、まだ年齢制限で正式に登録してもらえないけど…」

ペコリーヌ 「…素敵な仲間ですね。」

ミソギ 「あ、ありがとう／／／／」

とても慈愛に満ちたその顔はどこか悲しげで、それでも強くいようと作る作り出したような表情だった。

悟空 「…」

グウ

ミソギ「あ！」

ペコリーヌ「お、お腹空いちやいましたね？メニユーは決まりましたか？」

キヨウカ「ま、まだ。種類が多くて。」

ミミ「お姉ちゃん！なにかオススメはありますか？」

ペコリーヌ「ありますよ！もちろん！」

お姉さんにも見えて母親のようにも見える…美しい…

それはさておき、レストランの外には何やら見慣れた人影が、行ったり来たりと…

キヤル「…」

キヤル「え？監視ですか？」

???「そう。暗殺は見送りよ。少し、事情が変わったの…あたしが貴女に授けたプリンセスナイトの力…まだ完全には馴染んでないようね。」

キヤル「も、申し訳ありません。」

???「キヤル。…愚図な娘…貴女の進むべき道は、あたしが示してあげるわ。」

キヤル「…はい。」

キヤル「そうよ…あたしの道はあの御方が示してくれる。あの御方のためにも…あたしはッ！」

ガチャ

キヤルは驚愕した。

扉を開いた絵図に、幼女三人にペコリーヌがあの日のお夢、虫料理を与える…という地獄絵図に。

キヤル「え〜い!!」パシッ

キヤルはペコリーヌが持っていた虫料理を奪う。

ペコリーヌ「あれ？キヤルちゃん？」

キヤル「ガキンチョになんて物を食わせようとしてんのよ！てかなにその格好は！」

ペコリーヌ「似合います〜？ウエイトレスですよ！」

キヤル「ウ、ウエイトレス…？」

コツコロはギルド申請書を向けソワソワしていた。

コツコロ「…」ソワソワ…

キヤル「つてか！そこ！申請書向けてソワソワすんなあ！」

キヤル（おつと…そうよあたし、ギルドの話を死に來たんだったわ…）

キヤル「あ、あのね！実はちよつと話とか…その…気が変わったとか…」

ガシヤンツ!!

大きな音が鳴り響き、入口をみると大男が扉を壊し店内に入ってきた。

大男「ここかあ？不味い虫料理を出してるってのはあ…」

身を出した巨体は褐色で鼻は大きく、額から左の頬にかけて大きな傷が特徴的だ。

イカツチ「てめえ！マスターの料理にケチつけるってのかあ!?!」

イカツチは今にも殴るぞという雰囲気を出し、肩を鳴らしているが…

大男「ウリヤア!!」ドスンツ

イカツチ「ぐおおおおお!!」ドカーン

ラリアットが炸裂しイカツチは大きく吹っ飛ばされてしまう。

チャーリー「兄貴ー!!」

ヒラヒラ…グシヤ…!

キヤル「…ツ!」

ズカズカと店内に入ってくるとお構いなしに、コツコロの落とした申請書を踏む。それに対してキヤルの瞳は…

大男「オオイ！客に水も出さねえのか！この店は！」

テーブルに足を上げとても行儀が悪い……あのさあ……ガキじゃねえんだからそんなことすんなつて……

周囲の客は怯え、三人の幼女達は今にも涙を流しそうであった。

悟空「……」

悟空は気を感じ取って大した奴ではないことに気づく。

悟空自身もあまり目立ちたくないため大きくは出ない。

そのため手を加えないという考えにした。

大男「にひひひ……」

マスター「うちの店がなんだって……？」

大男「ああん？」

おお……やるのか……

周りの客は期待の眼差しをマスターに向ける。

マスターはフライパンを片手にタバコを吸っている……が、いつもとは雰囲気の違い、

とても強そう……（小並感）

マスター「ふうくはあく……不味いかどうかはその舌がアツ!?」グギリツ

突き出したフライパンには反応せず手首を握りしめられ嫌な音がした。

大男「おおっと！悪い手が滑った！」

マスターは痛みのみあまり地に這いつくばってしまった。

周りは希望から絶望へ：マスター自身も絶望へ：そこに、

ペコリーヌ「お腹が空いててイライラしてるんですか？」

大男「なあんだ姉ちゃん、そこに転がってるジジイの代わりに飯作ってくれんのか？  
不味かつたらこの店から飛んでもらうぜ！ギャハハハ!!」

ペコリーヌ「どんな人でも：等しく美味しく美味しくご飯を食べることが出来る国、それがこのランドソルです。」

落ちたフライパンを拾い上げ、その瞳には闘気が宿る。

ペコリーヌ「オーダー入りますっ！」

## COOKING      START

そこからは凄まじかった：ペコリーヌは手品捌きのごとく次々と食材を調理していく：ちなみに作っているのはあの虫料理だ：だが、これには虫関係なく誰もが食べたく

なるような調理法である。

ペコリーヌ「旅の間、獣から虫、果ては魔物まで。いろんな物を食材にしてきましたから。」

チャーリー「はえ、すつごい……」

一同は釘付けになるほどペコリーヌに見惚れていた。

キヤル「この店の味付け、分かってんの？」

ペコリーヌ「マスターの美味しい虫料理の味は私の胃袋、脳内レシピに刻まれています。」

ペコリーヌ「大丈夫!!」

ジュツ…ボウツ…!!

料理酒を入れ更に火力が上がる。

ペコリーヌ「完成です！」

—————

調理は終わりテーブルには虫料理とは思えないほどの料理が並んでいる。

大男「へっ、待たせやがって…こう見えて俺は美食家だからな!半端なモンじゃ納得しねえぜ!」

大男（ふん…難癖つけてこの店潰せばライバル店から謝礼金たんまり頂きだぜえ〜）



この男、実に悪である…

大男「さあくどれから戴くとしようか…」

キヤル「…」

くしやくしやになった申請書を見る。

そこには五つの記入欄があり一つだけが空欄だ。

キヤル「…」

次にキヤルが見たものは…黄色い果実だ。

大男「不味そうな虫だぜえ〜!」

キヤル「待って。」

大男「んあ?」

ペコリーヌ「?」

悟空「…」

コツコツコツ…

キヤル「まだこの料理は完成してないわ…この果実から落とされる恵みの一滴で…」

あなたは天使の歌声を聴く事になるのよ…」

ポツツ…

大男「な、何を言っている?…ツ!こ、こいつは!!」

その料理は輝きだす。

これには皆も目を奪われた。

大男「ま、不味そうな料理だぜえ〜…」

そして一口……

う、うがあああああ……!!

男は絶句した……こんな料理があつていいのかと……

こんな美味しい料理が存在しているのかと……

大男「馬鹿なアアア!!!!う、嘘だろ!?!虫だぞこれ、なんだこの次から次へと口の中に広がる濃厚な旨味と爽やかな風味とハーモニーはツ!?!」ムシャムシャガブガブ……

周囲の皆は絶句していた……大口を叩いていた男が次から次へと虫料理に手を出していた姿に恐怖すら抱いた。

大男「き、き、聴こえるう!! 歌声が聴こえてきやがるう!!」

そこから男は奮闘していた…自我を保つために必死に言い聞かせる…美味くない美味くない、と…30年後の自分は何歳かな、と…

しかしそれでも天使達の歌声を掻き消す事は出来なかった。これは料理であつて料理では無い。一種の中毒でありそう…脳内麻薬だ。

死闘…?の末…

大男は昇天した…

大男「うんまああああああああいつ!!!」

これには周りの客も勝ちを確信した。

そして抱き合つた…あの甲子園の様に…

絶望ムードから一気に希望へと変わった…!

ペコリーヌ「やりましたね! キャルちゃん!」

キャル「ふん!」

悟空「あいつらやるじゃねえか。」

これには遠くで見ていた悟空も称賛を送る…

が。

大男「ふざけんなつ！こんな虫料理が美味いわけねえだろうが！」パリンツ  
大男は持つていた皿ごと地面へと叩きつけた…あのさあ…  
ペコリーヌ「……………」

大男「不味い飯出す店なんかぶつ潰してやる…オラあ！」

客「……………うわあっ?!……………」

大男はテーブルを投げ飛ばし、店の中を滅茶苦茶にしていく。窓も、厨房も、貼ってあった壁紙もズタズタに引き裂いていく…客は被害が出ないように逃げ回り抵抗をする術も無かった。

ミミ「ミソギちゃん！キョウカちゃん！逃げよう！」

ミソギ「うんツ！」

キョウカ「うん!…ツうわっ!？」

キョウカは凸凹となつてしまつた地面に躓いてしまい逃げ遅れてしまう。

ミミ・ミソギ「キョウカちゃん!!」

心配する二人は次の瞬間、顔を青くした。

キョウカの真上には大男の巨体、足があつた。

もし、そのまま踏み潰されれば…

キョウカ「!…あ、ああ…」

だが手遅れ…キョウカは打ち震え体が動く事を拒んでいた。  
そして大男に踏み潰され…

る事は無かった。

キョウカ「…!…あ、あれ…?」

キョウカ、ミソギ、ミミは目を瞑っていたが開くとそこにいたのは…

悟空「おいおい、そいつはちよつと違えだろ?」

悟空が大男の足を片手で持ち上げていた。

キョウカ「!あ、あなたは…?」

悟空「おつと…悪いな、ちよつと退いててくんねえか?」

キョウカ「あ、はい!」

キョウカは二人の元へと戻り、そこにユウキとコツコロがこれ以上被害を出さないように三人の前へと立った。

大男「！な!?なんだてめえ!?俺の足を…ッ!離せ!離せえ!!」  
足を動かそうとするが一切動かない。

その表情には段々と焦りが見えてくる。

悟空「食い物粗末にすんのは良いことじゃねえ…ちよつと痛い目にあつてもらうぞ。」  
大男「ッ!」

悟空の顔は笑つてはいるものの眉は上がつて、若干不敵な笑みのように見えた。だがこの空気に耐えられず男は顔が真っ青になつてしまふ。

ドゴーンッ

大男は勢い良く店から出ていく。

地に足がつかないまま吹っ飛んでいく。

悟空「食い物の恨みは恐ろしいからな。覚悟しとくんだぞ!」  
少しの間静寂に包まれるが…

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

店内に歓声が響いた。

勝利を確信し、もう絶望ムードでは無くなった。

コツコロ「やりましたね！」

ユウキ「うん！悟空すごい！」

マスター「ふっ…」

ミミ・ミソギ・キョウカ「「お兄ちゃんすごい!!!」」

※サイヤ人は見た目が若いからです。

キヤル「ふふん。」

ペコリーヌ「悟空さん…!…?悟空さん？」

すると悟空はペコリーヌの元へとやってきて落ちていた虫料理を眺める、

ペコリーヌ「悟空さん？」

悟空「ん…」カブツ

悟空は一口頬張るとその虫料理を堪能する。

ペコリーヌ「!?悟空さんそれ落ちてたやつですよ!なにか菌が着いているかもしれま

せんよ!?!汚れているかもしれませんよ!?!吐き出した方が良いでしょう!?!」

ゴクリツ

悟空「うんめえ!!こりや何個でもいけるぞ!!」

ペコリーヌ「悟空さん…?」

落ちていた物にも関わらず悟空は虫料理を頬張っていく。

そして全部食べ終えた悟空はペコリーヌに向かってニカツと微笑む。

悟空「本当に美味かったぞ!天使の歌声が聴こえるくらいにな!」

ペコリーヌ「!…ありがとうございます!」パア

悟空「おう!キヤル!おめえもありがとな!美味かったぞ!」

キヤル「!…べ、別にあたしは…一口加えただけだし…」

悟空「それでもだ。ありがとな!」

キヤル「!…全く…調子狂うわね…」

その跡、皆で壊れた店を修理していた。

そこでコツコロはある物を探していた。

コツコロ「……………!ありました!…あ」

コツコロはくしゃくしゃになった申請書を拾おうとしていたが先に拾い上げられ顔を上げると…

キヤル「しょうがないわね…あんた達だけじゃ頼りないから、あたしも入ってあげる



…  
」

感・謝、しなさいよね♪

その顔に曇りは無く、一人の少女が微笑んでいた。

こうして四人という予定だったものは五人に増え、更に活気あふれるギルドに、なつたとか…

さあ！いよいよ始動ですよ！

私達の目的はこの世界のありとあらゆる料理や食材を追求、探求し…みんなで楽しく食事をするギルド！

その名も…

美食殿！

ペコリーヌ「さあ！始めましょう！ここから！」

## 第4話く前編く お掃除ですよく!

前回…ペコリーヌにコツコロ、ユウキ、孫悟空…そしてキヤルの5人はようやくギルドを結成することに成功した。

ここまで色々とあつたがそれもまた、スタート地点…  
ここからやつと走り出すのだ。

5人はギルド管理協会のカリンの元に行き、ギルド結成を行い☑拠点☑を設けることに成功した。

ペコリーヌ「さあ!始めましょう、ここから!」

ガチャ……………バタンツ……………

まあ…綺麗なものとは言っていないが…

ペコリーヌ「…」

キヤル「…」

悟空「…」

ユウキ「…」



キヤル「ただ…?」

カリン「幽霊とかの類が出るかもしれない…」

キヤル「ちよっと!? 今幽霊とか言った!」

ペコリーヌ「大丈夫ですよキヤルちゃん。幽霊さんと一緒にご飯食べられますよ。ヤバイですね!」

悟空「おう! 幽霊つっても本当に悪いやつは居ねえからな! 安心しろ!」

キヤル「あんたご飯食べられたら相手は誰でもいいの!? それにあんたもなんでそんな事分かんのか!? 視えてるのそれ!? 居るんでしよう!」

コッコロ「とはいえ、雨風が防げるだけでもありがたいです。カリン様、住みやすいように手を加えてもよろしいでしょうか?」

カリン「もちろんです♪」

それから5人はギルドを改装すべく、気合を入れ掃除用具などを用意する。

これにはキヤルが一番張り切っており指揮を取るようになっていた。

キヤル「あんた達準備はいいかしら? 塵一つ残さず、やるからには徹底的によ!」  
ペコリーヌ「おー!」

コッコロ「おー!」

ユウキ「おー！」

悟空「おう！任せとけ！」

そして5人は掃除に取り組んだ。

なるべく力のある者達の中にあつた古い家具を外に持ち出し、力に自信の無い者達は埃を払うべく、雑巾かけ等。

悟空は言わずもがな椅子等を一齐に持ちだす。

悟空「よっと。」

ペコリーヌ「うわあ！悟空さんそんなに持てるんですか？」

コッコロ「流石は悟空様。力では右に出る者が一切居ませんね。」

ユウキ「悟空すごい！」

キヤル（なんて馬鹿力なのよ…普通一人1個持つもんでしようが!?なに一気に10個も持ち出してんのよ!?そりや早く片付くからいいけどあんなの脳筋すぎるじゃない!?それ考えたら、あんなの敵に回しちゃいけないわね…唯一救いなのが知性はあまり感じられないところね…）…つてかそこ！サボらない！」

ユウキ「はーい。」

キヤル「はあ…まさか最初にやる事が掃除とはね。あ、『コロ助』そこに外したカーテンあるから洗つといて。」

コツコロ「こ、コロ!?…わ、分かりました。」

まさか初めて名前を呼んでくれたのがあだ名な事にびっくりするコツコロ。

コツコロ「よいっしょ。」

キヤル「確か物置にたらいがあつたからそれ使つて。」

コツコロ「かしこまりました。」

キヤル、コツコロ以外の者達は未だに家具を外へと出していた。

ペコリーヌとユウキは少々汗をかいていたが悟空は一切見られない。

悟空「ここら辺に置いといてくれ。」

ユウキ「わかつた!」

ペコリーヌ「はい!」

悟空「にしても中はだいぶ良くなったか?まあ最初は虫ばつかいてあいつを落ち着か

せんにも苦労したけど。」

ペコリーヌ「うーくん…虫料理は食べる事出来たんですけどね。今度は生で食べると良

くなるでしょうか?」

悟空「確かにそうすりゃ虫も怖くなくなるかもな。あはは!」

一体二人はどういった思考回路で出来ていればそんな理論に行き着くのが謎だ。

ユウキはよく分からないと言う顔をしている。





のよ?。」

ペコリーヌ「無いんです…重要な物が。」

それでも四人は分からない…と言った顔だが。

ペコリーヌ「私達をご飯を食べる食卓が!」

キヤルは期待していた自分が馬鹿だった…といった表情になったが三人は確かに! といった表情になった。

キヤル「何かと思えば…無いんだったら街にでも行って買ってくればいいじゃない。」

コツコツコツコツ

ペコリーヌは真剣な顔になってキヤルの元へと歩み寄る。

ペコリーヌ「キヤルちゃん。私達、美食殿の活動目的はなんですか?」

これにはキヤルも圧で負けてしまう。

キヤル「え?…ええつと…食べる事?」

ペコリーヌ「違います! みんなで楽しく食事をする事です!」

キヤル「あ、はあ。」

ペコリーヌ「大事なテーブルをそんな適当に決める訳にはいきません!」

私を作ります! みんなで楽しく食事が出来るテーブルを!

ペコリーヌ「ふんっつぬ！」ガシッ

自身の手でテールブルを作るといつたペコリーヌは準備しておいた斧を使って木を斬っているがなかなか斬ることは出来ない。

ペコリーヌは力自慢にはある方でそこらの者達とは比べるまでもない。だが、木を斬る習慣など無いため上手く切ることは出来ない。

悟空「うゝん…ちよつと貸してくれ。」

ペコリーヌ「へ？あ、はい。」

ペコリーヌは悟空に斧を渡すと少し腰を落とす。

悟空「木を斬るにはこうやってやるんだ。見てろよ？」

スパアアアアンツ!!!

悟空は斧を持った右手を横一直線に振るうと、硬かった木はまるで紙のように軽く斬れてしまった。

コッコロやユウキ、ペコリーヌは羨望を向けるが、キヤルに至っては目を見開き、絶対に敵には回さないと決意をした。

ペコリーヌ「うわあ!!悟空さん一気に斬っちゃいましたね!ヤバイですね!!」

ユウキ「ヤバイー!」



コツコロは一人で買い出しに行くことにし河原の近くを歩いている。何を買うか、どんな物があるのか胸中高鳴らせている。今ではメンバーのお世話役となつて年が年齢としてはまだまだ幼く、子供の一面を見せても可笑しいことではない。

コツコロ「ドラゴンの報奨金が残つていて助かりました。とはいえ節約に越したことはありません。：財布の紐を緩めずに参りましょう！」

しかし、しつかり者のコツコロは我儘を出さず我にかえる。

—————

キヤル「虫ツ無しツ！蛇ツ無しツ！幽霊は：」ゴクリ

キヤルはペコリーヌやユウキと離れたところ一人で掃除を行うべく、自身の苦手な虫や蛇、幽霊の確認をしていた。

だがどこにもいなかったため掃除に取り組む。

キヤル「これで集中して掃除が出来るわ。」

コツコツコツ：

誰か歩いてくる…キヤルは幽霊…？と思つたがその疑惑はすぐに晴れる。

悟空「よう。」

キヤル「！…あんだ！驚かせないでよね！」

悟空「ははっ悪い悪い。」

キヤル「…んで?あたしになんの用?つまらない事じゃ無いでしょうね?あたしをびつくりさせたんだもの…罰は大きいわよ。」

悟空「ああ…そうつまらねえ事じゃねえよ。」

柔らかな笑みを浮かべていた悟空の顔からスツと真剣な顔に変わりキヤルは冷や汗をかきはじめる。

まだ何も発していないがこのプレッシャー。

キヤルは内心、気づかれたような気がした。

悟空「この前のやつ…おめえがやったんだろ?」

キヤル「ツ!?!」

すでに痛いところをつかれていた。

キヤルの中ではもしや…という程度に考えていたが、もうこの時点では行ってきたことがバレていたことに驚くしかない。

キヤル「な、なんのことかしら…?」

悟空「とぼけたって無駄さ。おらは気で分かったんだ。あの時のキノコに…豚みてえな奴…ドラゴン。」

キヤル「何かの勘違いじゃないの?それに気…?ってやつで何が分かるわけよ。」

悟空「…気づちゆうんは生き物みんなが持つてるエネルギーって事さ。気が大きかつ

たり小さかったりするだけで強さが変わってくるんだ。…たしかにあいつら自身の気もあつたけどよ、なにか一つ別の気が混じつてたんだ。それにあん時のやつら全員に、同じもんがな。」

キヤル「ツ!!？」

キヤルは更に焦る。まさかこんな奴にそんな能力があるなんて知る由もなかった。自分が思っていたよりも甘くはなく、甘かったのは自分であつたと今気づく。

キヤル「だつたら何…？他に証拠でもあんの…？」

悟空「…その気はおめえの気、そのもんだ。」

キヤル「ツ！」ガシツ

キヤルは焦りのあまり悟空へと右拳を放つたが当たるはずもなく止められてしまう。

悟空「本当みてえだな…」

キヤル「くつ…ほんとにバケモンじゃない…で、それを聞き出して何がしたいのよ…ギルドから脱会させる？無理でしょうね今のあいつらはあたしの事に気づいていないし、あいつらは考えが甘い！あたしよりもね!!」

悟空「脱会させようなんて事は考えてねえさ…ただおめえの目的が何なのかが知ってえだけだ。あん時おら達に攻撃したのも狙って攻撃したんだろ？ただ目的が何なのか知ってえんだ。」

キヤル「言うわけないじゃない! はい、そうですね。って普通言うと思う!?! これ以上絡むならあんたをここで消すわよ…!」キィイイン…

杖を取り出し怪しく光ると悟空へと向け、激しく威嚇する。だが、悟空は顔を一切崩すことは無い。

悟空「…」

キヤル「…ツ」

魔力を溜め、最大級の魔法を悟空にぶつけようとする。

確かに、キヤル自身では悟空に勝つことは天地がひっくり返ってもあり得ない。単なる威嚇行動だが悟空の気迫に押され放とうとする…が…

ユウキ「悟空ー、窓、拭いたー。」

キヤル「…ツ!」

ユウキの声が聞こえ、ふと我にかえるキヤル。

今ここで魔法を放てばハウス全体どこか辺り一帯が塵と化してしまう…それに何より命令を破ってしまいかねない状況にもなる。

悟空「…おう終わったか! じゃあ次は生える草でも刈るから今行く!」

悟空の一手に救われ、キヤルは胸を撫で下ろす。

いくらユウキに知力が無いとはいえ、攻撃行動をとってしまえば一気に敵扱いされる

ことは間違いない。

悟空「：別におらは、おめえをどうこうしてえって訳じゃねえさ。ただ、気になつてただけだ。」

そう言うとうと悟空は部屋の外へ出ていきユウキと共に草刈りを行う為にもどつていく。

キヤル「はあ……はあ……はあ……」

張り詰めた空気が開放されたキヤルの心臓は有酸素運動を行ったかのように激しく動いていた。

キヤル（最悪最悪最悪最悪最悪ツ!!! 寄りにもよつてあいつに気づかれた!? 早すぎるじゃない!? ……何も答えなかつたけどあたしを只者扱いしてるわけじゃないわ! ああ顔、あたしが怪しいつてことに気づいてた!!）

不甲斐なく思い反省をしているところ悟空のことについても確信していた。自分は怪しい者認定されていることは間違いないことにも気づき、唇を噛みしめる。

キヤル（あいつ……あいつは何者なのよ……!）

コツコロ「：かわいい。」

街で食器を見ていたコツコロ。お気に入りの皿を見つけ財布を見るが、とても安いとは言えないため落胆する。



??? 「あら?」

落ち込むコッコロを見かけるその少女は小麦色の髪色にロング、青い瞳の綺麗な少女だった。

??? 「その食器気に入ってくれたの?」

コッコロ 「あ、はい。でも少し予算が。」

??? 「ここはバザーよ。値段交渉も楽しまなくっちゃ! 負けてあげるわ!」

コッコロ 「!…ありがとうございます。あの、私はコッコロともうします。」

??? 「あたしは『サレン』。」

サレンと名乗る少女は人間にしては耳が特徴的で、どこか種族が違うことに気づいたコッコロ。

サレン 「この街で『サレンディア救護院』を運営しているの。」

コッコロ 「なんと立派な。」

サレン 「…うんうん。あたしの方が子どもたちに力を貰ってるくらいよ。他になにか必要な物あるかしら? サービスしちゃうわよ?」

と、と、と、止まってええええええええええ!!

二人はその声の方に向くとなにかに引つ張られながら荷台に少女がいた事に気がついた。

コツコロ「い、今のは？」

サレン「もうっ！あの娘つたら!!」

—————

???「申し訳ありません！お嬢様！」

サレン「びつくりしたわよ。まさかと思えば通り過ぎていつちやうんだもの。」

???「も、も、も、申し訳ありません!!」

あの声正体は少女のものであり、見た目からするとメイドの様な格好をしていた。

サレン「でも良かったわ。怪我も無いようだし。」

???「はい！バザーに出す品も無事でした。…ところでこちらの方は？」

コツコロ「はじめまして、コツコロと申します。」

???「これはご丁寧に。私はサレン様にお使いしているメイドで『スズメ』と申します。」

サレン「丁度よかったわ。お店の方はあたしが見とくからスズメはコツコロさんの荷

物を選んであげて。」

コツコロ「そ、そのような。」

サレン「あなた一人でその量を運ぶのは大変よ？困った時はお互い様！」

スズメ「そうですそうです! さあさあ荷物を荷台に積んじやいましょう!」

コッコロ「!…ありがとうございます!」

—————

キヤル「完ツ璧! さすがあたしよね。」

キヤルは浴槽を磨きあげ自分に浸っていた…が、何処か胸に突っかかりを覚える。

キヤル(孫…悟空…)

自分の正体の一歩手前まで見抜かれ、訳も分からない超人的身体能力を誇る人間。

キヤル「あの御方に報告しなくちゃ…」

—————

スズメ「コッコロさんにもお使いしている方がいるんですね。」

コッコロ「はい。」

スズメ「こんなかわいい娘にお世話されるなんて、幸せなお方ですね?」

コッコロ「いえ…私の方が主様に使える事ができて幸せなのです。スズメ様はサレン

様にお使いして長いのですか?」

スズメ「はい! お嬢様は元々、『王宮騎士団』の副団長を務めてらしたのですが、身寄りのない子や事情があつて親元を離れなければならない子達のために地位を捨て、サレンディア救護院を造られたのです。そんなお嬢様のお仕事を少しでも手伝えたらと思

いまして。」

コツコロ「素敵ですね。サレン様も、スズメ様も。」

スズメ「！ぎよえっ!? わ、わ、わ、わ、わ、私はそんな、いつもドジばかりで！」

コツコロ「私も……」

スズメ「へ？」

コツコロ「私もいつかお二人の様な関係を……主様と築けるようになりたいです。」

スズメ「……成れますよ。コツコロさんなら。」

コツコロ「！……頑張ります！」

会ってまだ間もないが直ぐに人とも打ち解けるコツコロ。

それは彼女の優しさであり、探究心、好奇心がそうさせているのだろうか。

どんなことにも興味を示し、どんな人にも優しく笑いかける少女だからだろうか。

そして二人はギルドハウスへと……

コツコロ「ギョ!?!」

戻る事は無かった。

森の中を彷徨っていた…

コツコロ「ここは…」

スズメ「どこでしょう…?」

ピンチ…? な状況をくぐり抜けられるか…!

## 第4話 後編 〱 リマリマ 〱

森の中に迷い込んでしまったスズメとコッコロ：暗い森中には怪しく光る魔物達の眼が：

スズメ「あ、あ、安心してくださいい：ちよ、ちよつと道に迷っただけですからあゝ  
：」ガクブル

コッコロ「は、はあ：」

安心しろと言われてもまずはスズメが安心してほしい。

言ってる者がガクガクブルブルと怖がられていては安心のしようが無い。

コッコロ「しかし、昼間だというのに随分暗いというか：魔物とか：」

スズメ「ま、ま、ま、ま、ま、魔物!?魔物何処!?何処!？」

バサバサ

スズメ「で、出たああああああ!!」

コウモリが通り過ぎただけでこんなさまである。

彼女は泣き叫びコッコロを置いて何処かに逃げて行ってしまった。ついでに口バもスズメについて行ってしまったためこの場に一人取り残されてしまったのはコッコロ



二人は木に隠れ遠くから音の正体を伺っている。

丁度シルエットになって分かりにくいのが動物の頭のようなものが見えてきた。

コッコロ「あれは…」

スズメ「ロバ？…馬？」

コッコロ「…荷台にあったロープをお借りしますね。あの動物を捕まえて荷馬車を引いてもらいましょう。」

スズメ「ナイスです！コッコロちゃん！」

コッコロは荷台に積んであったロープをクルクルと回しだし動物捕獲作戦を実行することにした。

コッコロ「…」

スズメ「…」ゴクリ…

二人は集中し、特にコッコロは動物が逃げないように一切の音を出さないように。瞳は動物だけを映し出していた。

スズメも声押し殺しコッコロの邪魔にならないようにして、隠れていた。

コッコロ「ふっ！」シュン

そしてコッコロの投げたロープは上手く動物の頭に巻き付いた。毛がフワフワモコモコしていて、羊のような感触だった。



…が、

「リマリママー…ツッ?!?!?」

コツコロ「え?」

スズメ「え?」

二人は鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした。

なんと、動物だと思っていた音の正体は人型であった。

体こそ羊などの類に近い、顔もそれだ。

だが、動物にしては甲高すぎる声、それこそ人間の女性らしい声でちゃんと服も着ていた。

「苦しい…:食べないでリママー…ツッ!!」

二人「喋った…ツッ!!!」

某ハンバーガーショップのCMのような二人の反応。

そう、この生物、喋ったのだ。

「びっくりしたリマ…:かわいくセットしてきた髪大丈夫かな?どう?変じゃないかしら?」

コツコロ「ちよ、ちよつといいですか?貴女は口…:いえマモ…:えつと…:」

ロバだったり魔物だったり言いかけていたがなんとも言えないその容姿。コツコロ

は何と呼べば良いのか分からなかった。

「ちよつと！私はロバでも魔物でも無いわよ！こんなかわいいモンスターが居るわけ無いでしょう？確かに見た目はちよつとモフモフだけれども!!」

コッコロ「確かに…」

スズメ「…喋りますもんね。」

怒ったり、お茶目になったり、また怒ったりと色々と感情の高低差が激しいこの生き物：コッコロ達は未だにどう接していいのかわからなかった。

「流行りのコーデでキメてきたし、動物に間違えられる事は無いと思ってただけだなあ…：うくん、ざくんねくん。」

言葉とは真逆に自身のコーデが入っているのか自身満々の笑みを魅せる。ルンと自身の世界に入り込んでいるようだ。

コッコロ「そ、そのリボンが良くお似合いで…」

「本当!?やつぱ似合ってる?褒めてもらえると嬉しいな。ヴェツ!!」

二人「!?!」

「あはは！いつけな〜い！つい癖でごめんね〜私興奮するとつば吐いちやうの〜!」

そんな癖があつてたまるか、とついつい心の中でツツコミを入れたくなるのだが、世の中にそういう特性を持つ生物も少なくないだろう。

コッコロ「い、いえ…先程は失礼を。私、コッコロと申します。」

スズメ「私はスズメです！はじめまして！」

「私は『リマ』。この森を抜けた先にある”エリザベスパーク”という牧場で働いてるの。貴女達はこんな森の奥にどうして？」

コッコロ「実は荷馬車を引いてきたのですが、ロバが逃げてしまい…」

リマ「それは大変！よかつたら私荷馬車引こうか？」

スズメ「本当ですか！」

リマ「私、こう見えて力持ちだから！」

それは見れば分かります、と二人は心の中でツツコンだ。

どうやら話を聞く限り悪い者では無いようだ。

見た目からして分かる通りロバのような馬のような羊のような見た目をしている女性だ。

とても明るく活発的で前向きな性格、人助けまでしてくれる優しさが伝わってくる。

リマ「よいしょっと！」

コッコロ「重くないですか？リマ様。」

リマ「平気、平気！これくらいお茶の子さいさいだし！」

—————

場面は変わって再びギルドハウスへ。

まだまだ内装の掃除は終わっていない。キヤルは天井付近の窓を拭くべく椅子を4段重ねにして登っている。

キヤル「よ、あと少し……！」

キヤル（日頃から動いていない証拠ね……こんな高さでも息切れするなんて……：戦闘にも遠距離型だし仕方無いか……）

悟空『おめえがやったんだろ？』

キヤル「……」

あれから悟空に言われていた事が常に頭の中を駆け巡っていた。それは焦燥か……迷いか……あるいは……

キヤル（……別に……関係無いじゃない……あんたには……ッ！）

ガタッ！

キヤルは考え事に集中して登る事に意識していなかった。

そのため足を滑らせ椅子から落ちしまう。

キヤル「ッ！……あ、あれ？」

木の板にキヤルが打ち付けられる……そう思ったが打ち付けられたというよりも抱きかかえられていた。

それは少しゴツゴツしており、温かい感触だった。

悟空「おいおい……ちゃんと前見ねえと怪我しちまうぞ？」

悟空だった。

悟空は力仕事から窓を拭いたり床を拭いたり木を切ったりなどありとあらゆる事全ての掃除を任されていた。

キヤル「あ、え……ちよ、もう降ろしなさいよ！」

悟空「お、悪い悪い。」

キヤル「……あそこの窓、拭きたいんだけど。」

悟空「ん？……あゝあそこかあ。高いなあ、おらが拭くぞ。」

キヤル「いや、あれはあたしの仕事なの！だからあたしが拭く！良いわね！」

悟空「お、おお。分かった。」

キヤル「……まあ、手伝わせてあげるけど。」

悟空「？」

それからキヤルは窓を拭くべく悟空に手助けしてもらう。

階段がある場所はなるべくキヤルが拭き、悟空は階段の届かないところ、つまり浮遊したまま窓を拭いている。

キヤル「ふう。これでこそよ。生活の乱れは心の乱れって言うてね。生活の基盤にな

る家なんだから……ピツカピカにするわよ！」

悟空「へえ、そんな言葉があんのか。おめえは頭良いのか？」

キヤル「良いに決まってるじゃない！馬鹿にしてんの？あんたの歳が幾つか知んないけど、これくらい常識よ！常識！」

悟空「へいへい分かってつき。」

キヤルに非常識だ！と指されるが悟空は気にしていない。

悟空自身別に勉強が出来ない事に関して何を言われようとも何も思わない。事実、本人もそれは認めている。

……また、悟空はこの状況を懐かしんでいた。

悟空（前にベジータみてえって思ったけど、チチにも似てんなあ……懐かしいなあ……今頃皆どうしてつかなく……本当に消滅しちまったんかな……）

ところどころ悲しい気持ちにもなりながら、今は窓にこびりついてある汚れを拭き取る。

中々上手く落ちない……しぶといという意味では今の悟空のようだ。過去の出来事、あの世界での出来事は忘れられないのは未練がまだあるからだろうか。

キヤル「ちょーい！やる気無いでしょー！」

スルスルスル……

キヤルの足、正確に言うとはももにカデが一匹スカートの中に這っていった。

キヤル「にやあああああああ?!?!?」

悟空「お、おいおい! 暴れたら落ちるぞ!」

キヤルは変な感触に気が動転して椅子から落ちてしまう。

ガタンッ!

キヤル「わ! ねえちよ! 起きなさいよ!」

悟空は咄嗟にキヤルを抱え込み、崩れてくる椅子からキヤルを守るようにしてその場に蹲る。

キヤルが声を掛けるが反応は無かった。

悟空は言ってしまうえば超人、サイヤ人だ。普通ならばこんな事で蹲まったりなんかしない。

悟空の身に何があったのだろうか…?

アメス「お、起きた起きた。」

悟空「…ん? ここは…おめえは?」

悟空は突如意識を取り戻す。

辺りを見渡してみると色鮮やかな空間に包まれていた。

そこだけまるで、街とは関係無さそうな神聖な場所に招かれていた。

悟空「あ！ユウキ！おめえも居たんか！」

ユウキ「よー！悟空ー！」

何故かユウキもこの場所に招かれていた。

悟空はユウキを見つけると声を掛け、それに反応したユウキは右手を挙げる。ユウキも多少驚いているのか、一瞬動きが止まっていた。

アメス「色々あったみたいだけど、無事にギルドも結成出来たみたいね。」

悟空「あ、おうーギルドなら組んだぞ。なんて言ったかな…えーと…び、…び、…まあいいさ！うめえ飯をいっぺえ食うギルドだ。」

アメス「…そんな理由で結成しちやったのね…本当に…」

悟空「ああ。…ん？おめえなんでおら達がギルド組んだの知ってたんだ？」

アメス「それは私があんた達の事を見てたからよ。」

悟空「見てた？…ああ神様ならそんな事も出来るんだったな。」

アメス「！……え、ええ…そうね。」

アメス（…私の正体に一瞬で気がついた？…なんでかしら…この男は…いわば『別の



世界』から来た男……元の世界ではこれが当たり前なのかしら……？」

アメス「と、ところで私が神様だつて良く気づいたわね？なんでわかったのかしら？」  
 悟空「神様つちゆうんは気を感じないんだ。普通の人間ならそれが当たり前なんだけんどおめえからは一切気を感じねえ。」

アメス「へえ……そう。」

アメス（『気』？を感じ取れるのね……それがどんな代物かは詳しく分からないけど今までの行動を見るに、あの時の魔法のようなもの、空を飛んだり、一瞬で移動した事と関係があるのね……）

悟空「あ、そういうやおらはギルドの掃除をしてたんだけんど……いつの間にかこんなところに来ちまった。」

アメス「それなら安心して。普通の人なら……彼「ユウキ」なら気を失うような衝撃でこつちに普通に來れたけど……あなたはそうはいかないからね。だから何か”機会”が欲しかったのよ。だから、あんな風に……ごめんさいね。」

悟空「なんだ、そういう事だったんか！おらびつくりしたぞ。」

アメス「ええ。紹介が遅れたわね。私はアメス。あなたは孫悟空で合ってるかしら？」

悟空「ああ。流石は神様だな。で？ここに呼び出したには何か話があるんだろ？」

アメス「ええ。ほら、あんたもこっちに来なさい。」  
ユウキ「？」

ユウキは首を傾げながらも悟空とアメスの元に寄ってくる。ユウキとアメスは面識はあるが、悟空とアメスは無い。神にまつわる存在なので驚きはするかと思われたが、悟空にはそんな事は日常茶飯事の用なものだった。

神と接触し、神の力を手にし、神とも闘った。

今更驚くなんて方が、無理があるだろう。

アメス「まあ、ここまで良くやったわね。まさかギルドのメンバーが意外なメンツと  
いうか……この世界の謎に関わる娘達とギルドを組む事になったわね。」

悟空「謎？」

ユウキ「謎？」

アメス「そう。あの世界に住む人たちは当たり前だと思ってる真実は……真実では無いの……ペコリーヌちゃんにキヤルちゃん、そしてコッコロと……彼女達にはそれぞれ問題や使命がある。……特に、キヤルちゃんは難しい立場に居るわ。」

悟空「………そっか。」

ある程度キヤルが何をしているのか、に勘付く悟空。

最も、キヤルの真相に一番近い人物である。

あの日、モンスター達の暴走するというのは全て原因は彼女にある。…だが、だからといって悟空はキヤルの事が気に入らない訳では無い。

ただ、キヤルの目的が何なのかを知りたかっただけだ。

まあ、かくいうユウキはアメスの言う事に追いついて来れていないが…

アメス「今あんた達に、私が知りゆる全てを伝えたとしても解決にはならない。…気をつけて、敵もあんた達の存在に気づいているわ。」

悟空「！」ポオオオオオオ…

ユウキ「…キイイイイン…

キイイイイン…と当たりが虹色の光に包まれ、そのあと悟空とユウキは金色の光に包まれる、ユウキは鮮やかに、静かに輝く金色だったが、悟空は爆発しそうなくらいに荒々しい金色に包まれていた。

アメス「これから彼女達と紡いでいく絆が…きつとあんたを成長させる。その時が来たら、私も昔のようにあんたの力になるから…」

ユウキ「…！」

アメス「…頑張つて。」

その瞬間、ユウキは消えた…

この空間から消えただけであつて、別に身になにか起きたわけではない。

次に、アメスは悟空を見る。

ユウキとは違う黄金のオーラ、それは時より穏やかに…時に激しく…炎の如く揺らめいていた。

アメス「あんたは凄い力を持つてるのね。」

悟空「…まあ、そうだな。おらはちよつと特別な力を持つてるのかも知んねえ。」

アメス「…そう。…あなたは確かに強いわ。あの街の人達が束になつてかかつても勝てそうにないもの……。」

でも、でもね？その力はいつか強大ななにかを生むかもしれないの。」

悟空「強大な…何か…？」

アメス「ええ。…私はあなたの事を詳しく知らない。…でも、いつか強い力に惹かれて災いをもたらすかも知れないの…それだけは覚悟しておいて。」

悟空「ああ、分かった。」

悟空はこれについて馴染みがあった。

悟空の強さについて憧れ、敬う者はあの世界には居た。

…だが、それとは裏腹にその力を妬む者もいた。

過去の因縁であつたり、存在が許せない者であつたり、力くらべとして悟空へと牙を剥ける事は多かつた。

最後の事に関しては、悟空達にも言えた事だ。

何時からだろうか、悟空は次第に地球を護るべくして自分を犠牲にする事もあった。その結果、地球へと、悟空へと攻撃する事は少なくなっていた。

悟空は気づいていたのだ、『自分が居るから地球が攻撃される』という事に。

きつとその頃の事から、こういう事に関しては馴染み深い物を感じるようになっていたのだろう。

アメス「あなたも頑張りなさい、選択は間違わないようにね…」

悟空「…ああ。ありがとな。」

悟空もユウキと同じく、意識を手放した。

場面は元に戻り、再びギルドハウスへ。

キヤルは心配なのか悟空の傍から一切離れる気配は無い。

悟空「…ん…あ。」

悟空は目を覚まし、ようやく戻ってきたのか、と心の中で呟いた。

目が覚めるとキヤルと目が合う、そのとき悟空は少なからずこいつは悪い奴じゃねえと確信した。

キヤル「あ、良かった…引越し早々事故物件になるところだったじゃない…」

悟空「あ、ああ…悪い悪い…」

アメス『特に、キヤルちゃんは難しい立場に居るわ…』

悟空はアメスの言っていた言葉を思い出す。

自身はキヤルという少女が、何者なのかは知らない。

それはこのギルド全員にも言える事だ。だが、決して知られてはならない悩みや秘密の一つだつてある…悟空は今、人として成長しているのかもしれない。

悟空「へへっ！心配すんな、おら多分貧血かなんかだと思うからさ。」

キヤル「…そう、それなら良かったけど。」

遠くからペコリーヌの声が聞こえた、どうやらテーブルの出来上がりらしい。外に出ると、ユウキとペコリーヌが居た。

悟空とユウキは目を合わせ、互いに「あの事」はナイショだと促した。それを見たキヤルとペコリーヌは首を傾げるが、気にしなくて良いと言う。

ま、それはさておき出来上がったテーブルは傷一つ無く削れていた。ペコリーヌは大変器用であり、どんな仕事も熟すらしい。今朝、悟空が木の斬り方を教えていた際も直ぐに覚えてくれたので助かった。

悟空「良く出来たな〜！」

キヤル「あんた本当に料理と言いい器用ね。」

ペコリーヌ「いや〜！修行の旅のおかげですかね？」

キヤル「でも、これなら5人で食事とれそう！」

ユウキ「良いね！」

ペコリーヌ「ありがとうございます！さあ！テーブルを中に運びましょう！」

そして4人でテーブルをハウスの中に運ぶのだが：

どう考えても入らなかった。

どの角度からも、どの向きも、ありとあらゆる事は試してみたが全く入る気配は無かった。

ペコリーヌ「……………」

ペコリーヌからは気力が失われていた。

あれだけ、長時間掛けて作ったテーブルが、まさかのサイズを間違っていたなどとは

：

今までやってきた事が全部水の泡に：

ポンツ

だが、落胆したペコリーヌに悟空が肩に手を置く。

悟空「まあまあ、こんな事もあるさ。失敗してなんぼさ。」

改めて悟空達とペコリーヌはテーブルを作り直す事にした。

一方その頃、コッコロ達はとうと：

盗賊に襲われそうになっていた。

数は3人、顔ほ見れば分かる、怖いやつだが弱い奴だ。

盗賊1「おい！ここを通りたきやそのロバを……え？ロバ？…馬…？」

リマ「ひどい!?せつかくおしやれしてるのにい!!」

盗賊2「ロバじゃないのか!」

盗賊1「構わねえ!とっ捕まえて見世物小屋だー!!」

すると3人の盗賊は一齐にリマへと群がっていくが、リマ自身体格が大きいため、別に力負けする事は無かった。

リマ「やめてえ!!こういう事はお互いを良く知ってから!」

コッコロ「リ、リマ様!」

コッコロは心配で声を掛けるが、どうして良いか分からなかった。相手は弱いだろう、しかし武器は持っていた。

それに、コッコロは接近戦など筋力には自身が無かったため食い止める事が出来なかった。それはスズメも同じ理由だ。



盗賊3 「うわっ！すげえ力だ!!」

盗賊1 「モフモフして良く掴めねえ!!」

盗賊2 「ちきしょー！暴れんなこのロバ!!」

この一言がリマを激昂させた。

ロバ、ロバ、と何度言われただろうか。

彼女の怒りは頂点へと達していた。

リマ「カツチーン」

すると彼女は荷台に積んであった剣を手取る。

金色で剣というには刃先が小さく可愛らしい物であった。

リマ「だから…ロバじゃないって言ってるのに…!」

剣を引き抜くと一つ振るい、それだけで3人の盗賊は数mほど吹き飛ばされる。

リマ「こんなおしやれしたロバが居るわけ無いでしょ…」

盗賊 「ヒッ…!」

リマ「必殺ツツッ!

もふもふストライク!!



光が止み、中から現れたのは…

一人の美少女であった…

コツコロ「…」

スズメ「…」

2人の空いた口が塞がらない。まだ衝撃が体に走る。

りんごの謎、もそうだが、ロバ…のような見た目からなんと、絶世の美女に大変身!!

彼女は仰○チエンジに成功した!!

リマ「メタモルアップルを食べると皆と同じ、人間の姿で居られるの！すごいでしょ

！」

コツコロ「は、はあ…」

スズメ「ええ…」

もう一生それでいいよ。

—————

ペコリーヌ「ふう〜。」

再び戻ってギルドハウス。

もうほとんど完成に近かった。

片付いたということに関しては完璧だ。

悟空「これでコッコロもびっくりすんじやねえのか？」

ユウキ「もちろん！」

キヤル「ところで、コロ助遅いわね？」

ペコリーヌ「そうですね。：ちよつと見に行つてきましようか。」

悟空「いや、それならもう必要ねえ：な、」

悟空とユウキが振り返ると、2人も反応して見る。

そこに、もうコッコロは居た。

大きな袋を両手に持ち、一人では運ぶのにとても時間が掛かりそうだ。

コッコロ「ただいま戻りました。」

ペコリーヌ「どうでしたか？良い買い物出来ましたか？」

コッコロ「はい、主様にはこれを。」

そう言つてユウキに渡した物は風呂場などによく置いてあるアレだ。アヒルの玩具だ。

コッコロ「それと悟空様、例の物は今晚に完成しそうです。」

悟空「お！そつかあ！ありがとな、にひひ！」

悟空は我が娘のようにコッコロの頭を撫でる。

それは一見して見ると親子のような歳の差だ。

実際親子に見えるのは間違い無い。

キヤル「そんな事よりコロ助、中を見てご覧なさい！」

扉を開けると、お化け屋敷と呼ばれていたあのハウスはもう無かった。

新築か、と思うくらいに綺麗に整理され、汚れなど一切無いくらいに、ピカピカに仕上げられていた。

コツコロ「す、すごい……」

キヤル「そうでしよう！　そうでしよう！　あたしの掃除スキルを褒め称えなさい！」

ペコリーヌ「コツコロちゃんコツコロちゃん！」

コツコロが視線を移すと無かったはずのテーブル。

ペコリーヌ達が1から作ったテーブルだ。

コツコロ「これは……なんとも素敵な！」

椅子に腰掛けるコツコロは幸せがこみ上げてくる。

たかが椅子、されど……作った椅子だ。

必死に作った物はどんなに高価な物よりも美しい。

コツコロは幸せに包まれていた。

ペコリーヌ「どうですか？ヤバイですよね！」  
コツコロ「はい………とつてもヤバイです！」

その頃、スズメはサレンの元へと戻る事が出来た。  
もちろんその時、リマも一緒だ。元の姿に戻っている。

まあ街中にモンスタアが現れた！と、思うのも無理は無い。サレンは最初こそ驚いた。…が、直ぐに慣れていった。

そして美食殿ではペコリーヌが料理をしていた。

そしてキヤルはソファで寝転がり、コツコロは内職…

ユウキは外で薪を割っていた。

悟空「…出来たな。」

ユウキ「…うん！」

お互いにサムズアップをして歯を見せながら笑う。

男の友情ともいえるような、師弟のような、兄弟のような…なんとも仲睦まじい関係をこの世界で築けた…

そして夕飯の時間へ…

悟空「うおお、美味そうだなあ!!」

キヤル「ほんつと、料理ってなったら凄いわね。」

コツコロ「さすがです!ペコリーヌ様!」

ユウキ「ペコリーヌ、すごい!」

ペコリーヌ「ありがとうございます!今日は引つ越し祝いのお肉で作ったビーフシチューですよ!じゃんじゃんおかわりしてください!マスター良い人ですよね!」

キヤル「良かったわ!初日早々虫料理じゃなくて。」

悟空「お!キヤルもどうどう自分から食いたくなつたのか!」

キヤル「違うわよ!」

コツコロ「ペコリーヌ様、キヤル様。」

2人「改めて、よろしくお願ひいたします。」

ペコリーヌ「そんな固い事言いつこ無しですよ。さあさあ!料理が冷めちゃう前に!」

ユウキ「うん!」

ユウキ、コツコロ、ペコリーヌ、悟空と4人は両手を合わせる。そしてキヤルも…渋々ながらも手を合わせる。

いただきますーす  
!!!!!!

早朝、ペコリーヌ、コツコロ、キヤル、ユウキは外に出ていた。悟空は…

悟空「この服に体通すのも大分久しぶりだなあ…」

紺色のインナーを着込み山吹色の道着をその上から着る。

そして最後に紺色の帯を締める。

悟空はとうとうあの服に着替えたのだ。

幾多もの戦いと冒険をしたあの道着に、それは色褪せない思い出と、経験が宿っている。

そしてまた、新たな思い出を…!

キヤル「あいつ遅いわねえ…」

ペコリーヌ「どうかされたんでしようか?」

ユウキ「悟空、気になる。」



3人は心配したような顔になるがコッコロは知っている。

コッコロ「心配いりませんよ。悟空さんは悟空さんですから。」

コッコロの発言に首を傾けるが扉の音がした。

ガチャンツ

ペコリーヌ「うわあ!!」

キヤル「!!」

ユウキ「かつこいい!!」

コッコロ「!!悟空様、お似合いです!!」

4人は初めて見る悟空の姿に釘付けになる。

これが当たり前だった悟空はまんざらでも無さそうだが。

悟空は称賛される事は嬉しいのは嬉しい。にひひ!と笑い、そのあとに左手を挙げる。

オツス! いっちょよいつてみつか!

美食殿『孫悟空』としての冒険が始まるッ!

## 第5話く前編く　クスクスクス：

ユウキ「ハックション!!」

夜分、ユウキのくしゃみやみがギルド内に、そして外からでも聞こえるほどに響き渡る。

ユウキ「ズズズ：」

コッコロ「主様、お勞し。」

悟空「なんだあ、風邪でも引いたんかあ？」

ユウキの顔は普段よりも紅く染まり、体温も一段高かった。それに絶えず出てくる鼻水。

コッコロがユウキの額に冷やしたタオルを置いていた。

悟空「これからつちゆうんに困ったなあ：」

キヤル「いつまでも濡れた髪で居るからよ、子供か。」

ペコリーヌ「アツアツのお粥が出来ましたよ」

ペコリーヌがキツチンの方からお粥をお盆に載せ出てくる。梅が乗せられており、とても美味しそうなお粥だ。

ペコリーヌ「これを食べ、体を温めたら元気百倍です！」

悟空「お、美味そうだなあ！」

キヤル「ちよっと！あんたはさつき食べたでしょうが！」

コツコロ「あれだけの食物を食らいながらも…恐ろしや…」

ペコリーヌ「さあどうぞ！」

ユウキ「あーん…」

ジュツ…

ユウキ「~~~~~」

お粥が思っていたよりも熱かったのか、ユウキは激しくのたうち回る。病人か？と思

わせるほど手足が機敏に動いていた。

ペコリーヌ「うわあ!?!熱かったですか!?!」

悟空「でも食わねえと元気になんねえぞ?ほら。」

悟空もスプーンを取り出し、ユウキの方に向ける。

ジュツ…

ユウキ「~~~~~」

悟空「あちやー駄目か。」

やはり熱いのかまたもやのたうち回る。

コツコロとキヤルは悟空と、ペコリーヌの姿が悪魔の様に見えたという。

キヤル「はあ…三人とも甘やかしすぎ、男の子でしょ？一晩寝てれば治るわよ。」  
悟空「お、おおそつかあ。寝てりや治るか！」

ペコリーヌ「確かに！あ、でもたくさん食べることも大事ですよ！」

悟空「まあそれもそうだな！よし、ユウキ？食えるか？」

キヤル（話聞きなさいよ!!）

その晩、幾度かユウキの悲鳴が広く轟いたと言う。

—————

翌日：

ユウキ「ハアハア…ハアハア…」

悟空「あれでも駄目だったんか…！」

あれからすぐに寝ることが出来たとはいえ、ユウキの熱が冷めることはなかった。冷めるどころか、悪化していた。

ユウキの額に手を当てたキヤルは火傷したかのように自分の手を冷ましていた。

キヤル「ねえちよつとマズインじゃない!？」

コッコロ「今、里でよく飲んでいたお薬を作ってますの…」ポイツ

キヤル「ちよつと待った!!あんた、なにしれつと変な虫入れてんのよ!？」

コッコロ「ですが私の里では…」

キヤル「そんな田舎の民間療法止めなさい!!」

悟空「でも可能性はゼロじゃ無えんだろ？」

キヤル「治る可能性もゼロじゃないわよっ!!」

ハツと、キヤルの五感には刺激が走った。

するとキツチンの方にあわてて行くとペコリーヌの手に虫が握られていたのを目撃する。

キヤル「こらそこ！何お粥二入れようとしてんのよ！」

ペコリーヌ「え？でも栄養満点…」

キヤル「なんでも虫で解決出来ると思わないでー!!!」

悟空「おいおい…ユウキが寝てんに大声出すと悪いぞお。」

キヤル「あんたらが出させてんのよー!!もうしようがないわね！ちゃんとした病院に連れていくわよ!!」

悟空「あ、最初からその手があったか！」

—————

悟空「そーういや、病院つてどこにあんだ？」

悟空はユウキを背中二おんぶし、なるべく急がないといけないため、空を飛ばうとする。

しかし、悟空はここに来てまだまだ浅い。

時間はあまり経っていないため街について詳しくない。

キヤル「ちよつとまって、私も普段病院なんて行かないから……えーつと……!……  
こつちかしら? 行つてみましょう。」

キヤルはそれらしき看板を見つける。

マスクをつけて手袋をして、白衣帽を被っている。

実に病院っぽい。

悟空「なんだ、近くにあんじやねえか。飛ばなくても良さそうだな。」

ペコリーヌ「ここで飛ぶと辺りが吹き飛んじやいますし、目立ちますからね!」

五人は足早で病院へと向かった。

……が……

いかにも怪しそうな病院である。

ペコリーヌ「すみませ〜ん! 急患で〜す!」

??? 「はい、どうされました？」

中に入ると受付の者が居た。

変なとんがり帽子に大きなメガネ、それに露出の多い服を着ている。

全く病院らしくはない。

キヤル 「……あの……ここ、病院で合ってます？」

??? 「合ってます合ってます!!」

病院らしいがキヤルは全く納得のいつていない表情だ。

悟空も…

悟空 「なんか怪しいぞお…変な寒気もするしよ…」

コッコロ 「昨日の夜から熱を出してしままして…」

??? 「ほほう…これは……診察室へどうぞー!!」

このテンション、医者の方とは思えない。

悟空もキヤルもコッコロも多少、怪しいと思いつながら診察室へと足を運ぶ。

悟空（前の世界の病院はこんなじゃなかった気がすんだけどなく…いやそれにしてても病院なんて懐かしいなく…おら、注射だけは嫌なんだよなく。ま、おらはなんとも無えから良いんだけどよ。）

—————

診察室に入ると室内にもうひとり女性が居た。

その女性も医者とは思えないような服を着ており、さっきの受付がかわいい系ならこっちはセクシー系になるかもしれない。声色もどちらかというところと大人っぽいし、ただ、一致するのは怪しいということ。

??? 「大きく口を開けて〜。」

ユウキは言われるがままに口を開け喉を診てもらっている。

悟空「変な格好ばつかなあ…：本当に病院なんかあ？」ボソツ

キヤル「一応、ちゃんと診てもらえそうだし…」ボソツ

ペコリーヌ「悟空さん、キヤルちゃん、人を見掛けで判断しては駄目ですよ！」

キヤル「…それ、無理あるから。あの格好見て不安にならない方がおかしいから。」

三人は二人に聞こえないように小声で話している。

人は見かけで判断してはいけないというのは確かだが、度を過ぎると、無理がある。

??? 「じゃ、服脱いでお腹見せて？」

コツココロ「三人方、お静かに…」

コツココロから指摘を受けてしまう…

ユウキは服を脱ぎ体を診てもらっているのだが…

??? 「あれ？これは…」





キヤル「なんか大事になつてない!？」

悟空「い、いやあ怪しい奴だけんど別に悪そうな奴じゃ無かつたしなあ…」

キヤル「無理あるわよ!？」

そして悟空とキヤル、ペコリーヌの横ではコッコロが何やら怪しい儀式のようなものをやってた。

怪しい念仏を唱え、怪しい薬のようなものを使い、怪しい煙がモクモクと上がっている。

悟空「しつかりしろ、コッコロ!」

キヤル「ここ病院の中よ!？」

ペコリーヌ「コッコロちゃん落ち着いて!」ブンブン

コッコロ「…は!」

ペコリーヌはコッコロの両肩を揺さぶっていると、次第に自我を取り戻したコッコロ。

キヤル「はあく…あいつのこととなると見境無くなるわね、気をつけなさい!」

ペコリーヌ「ランドソルにある診療所ですから安心してください!」

コッコロ「…はい。」

ぎやああああああああああああああああああああああああああああああ!!!

急に響いてくる叫び声：ユウキのものである。

この鋼鉄の扉の向こうでは何が起こっているのか…

悟空「……こりやちよつとやべえかもしんねえな。」

ペコリーヌ、コツコロ、キヤルは顔を真つ青にし、悟空は少しずつ危機感を覚え始める。

するとまたコツコロは怪しい儀式を行おうとする。

しかし、四人にそれは制される。

悟空「コツコロ落ち着けえ！」

ガッツ

「いででででででで!!」

悟空「ん？」

悟空の体に少しだけ衝撃が走るとなにかが倒れているのに気がついた。どこかで見たことがあるような無いような…

なにか惜しい感じがする。

「廊下で屯ってんじやねえぞお前!!…ってああ!!お前ら!!」

悟空「この声どこかで…それに気も……っ!!あーっ!!おめえあん時の!!」

キヤル「コカトリス亭にいちやもんつけてきた奴じやない!」

そう、あの時の大男だ。コカトリス亭にいちやもんをつけに来てペコリーヌの虫料理に舌を喰らせ、それでも暴れまわり悟空にお仕置きを喰らったあの時の男だ。ちなみに名前は『ブライ』という。

ペコリーヌ「随分細くなっちゃいましたね、ご飯食べてますか？」

悟空「本当に見違えたなあ!あれ以来悪さしてねえだろうな？」

ブライ「ふざけんな!!お前達のせいでこんな所に居て…」

ギユイイイイイン

ブライは鋼鉄の扉…ユウキの居る方へと顔を向けると察したのか顔を少しひくつかせる。

ブライ「今、手術中なんだろ…?」

ペコリーヌ「はい。」

ブライ「今しかねえんだよ…今このチャンスを逃したら地獄から抜け出すことができなくなるんだよお…」

悟空「地獄？どういう意味だ？」

ブライ「だからここは”Hospital”じゃねえ!! Prisonなんだよお!!」

ペコ、キヤル、コツコロ「「ええ!!」」

悟空「ほすびたる」とか”ぶりずん”?とか、訳分かんねえなあ…分かりやすく言うてくんねえか？」

ブライはここから逃げ出そうとしていたのだ。ブライ曰くここは病院では無いらしい…それに医者達の事も悪魔と称していた。

ブライ「悪いが、あの悪魔達が居ない内に俺はここを抜けさせてもらうぜー…!!!」タツタツタツ

それだけを言うと足早に逃げていった。

キヤル「どういう事よ!!どういう事よ!!」

悟空「なんかすげえ慌ててたな…」

コツコロ「い、今からでも別の病院に…」

悟空「…ツ!!」スツ

いでえ！ぐわあっ!!

悟空は気で察知した。先程のブライの慌て様、そして気の昂り方は恐怖の色であった。そして今もその恐怖の気が感じ取れているのだが一気にシンツ…となった。

ペコリーヌ達は声がしてから気がついたものの、そのときはすでに遅かった。

悟空「…おらなんか寒気がするぞ。」

悟空達四人はブライの逃げた廊下の角だけをジツ…と見ていた。今から何かが出てくるぞ、と言わんばかりに場の空気は静かになり、ペコリーヌ達も思わず息を呑む。

コツコツコツ…

悟空「…来る。」

次の瞬間ペコリーヌ、キヤル、コツコ口は顔面を真っ青に染める。悟空はまたしてもどこかで見覚えのある顔と気だ、と考えていた。

それはさておき、現在。なんと逃げていたブライは何者かに捕まり、引きずられている状況だった。

引きずっているのはなんと女性、左手でブライの足を掴み、右手に大きくてとても邪悪な斤を持っていた。

全身は赤い服に身を包んでいるがかなり露出の高い服であった。それに頭からは二つの角…悟空は一度出会ったことがある…

??? 「クスクスクス…お行儀の悪い患者さんです。ベッドに戻りましょうね？私、忙しいんですよ……………」

運命の人を探さないといけないんですから…」

そう言うのと彼女は四人の後を通り過ぎていった…かのように思えたが……………」

??? 「…あら？」

四人の元へ振り返る。

ペコリーヌ、キヤル、コツコロは恐る恐る彼女の方を見る。彼女と目が合う……………」  
瞬だけ…

??? 「…」ジーツ

悟空「…おめえ確かあん時の…」

彼女はペコリーヌ達だけは一瞬で目を離れたが、何故か悟空を執心に見つめる。ペコリーヌ「え？悟空さん面識があるんですか？」

悟空「…あ、ああ一度だけな…」

悟空は一度面識がある。以前、悟空はコッコロがギルド申請書の紙を貰う際に外で待機していた時に彼女と出会った。彼女は腹を空かせていて、その場にぐったりと倒れてしまった。しかし、悟空とユウキがおにぎりを分け与え、彼女は難を逃れた。

その時の…だ。

悟空「よ、よう。元気か？」

悟空も若干引き気味になりながら左手を挙げる。

??? 「………ました…」

悟空「え…?」

見つけましたわああああああああああああああああああああああああああ!!



悟空「いいいいい!?!?」

ペコリーヌ「ええ!?!」

キヤル「な、な、な何よ!?!」

コッコロ「!?!」

その女性は悟空を見つめると急に寄声をあげ、目の色が”それ”じゃなくなる。彼女の視野には悟空しか入らず、悟空だけを求めているような…悟空達は思わずそれに驚いてしまう。悟空だけでなくペコリーヌもキヤルもコッコロも一瞬、何が起きたのか分からない状況だった。

???「やつと探しましたよ! 私だけの”旦那様”?」

悟空「え、え? だ、だんなあ? おらがか?」

ペコリーヌ「ど、ど、どどどどという事ですか!?! 悟空さん!?!」

キヤル「あんたいつの間に女作ってたのよ!?!」

コッコロ「やはり悟空様は何もかもが桁外れな様です…」

悟空の事を”旦那様”つまり自分の夫と言いつつ出したその女性。悟空にはそれが全く分からなかった。いや、分かるはずもないだろう。彼女と会ったのはあの一瞬だけ。それに親睦すらも深めていない。ペコリーヌやキヤル、コッコロと居た時間よりも短い。…そんな女性にまさかの夫扱いされても…いくらなんでも無理がある展開だ。

悟空「だ、旦那って、おらおめえとケツコンしてねえぞ！」

それにあん時しか会ってねえしよ！」

???「いえ、あなたは旦那様ですよ…あの出会いは運命だったんです…手を差し伸ばしてくれるあなた様と横に居たのは愛らしい”ペット”…」

悟空「…ペットって…ユウキの事言ってるのか？」

悟空の脳内は訳が分からない、という文字でたくさんだった。自分を夫認定したと思いきや、ユウキをペットと言いだした。

ペコリーヌ「あ、貴女一体何なんですか？」

???「…何、とは？…そこに居る者の妻ですが？」

キヤル「重っ！あんた、すごい妄想女ね！そんなんじや嫌われるわよ！」

コッコロ「私達の方が悟空様や主様と過ごした時間が長いはずです。それはいくらなんでも出鱈目が過ぎます。」

反論をくらうその女性。悟空は感謝する。

???「クスクスクス…あなた方が何を言おうが関係ありません…さあ、私と共に参りましょう!!」ダツ

ブライの足を持っていたがブライを投げ捨て、悟空の元へダツシユでやってくる。さすがに悟空は視認出来るためすぐに対策を練ることが出来た。

悟空「悪いペコリーヌ、おらちよつと離れとく！」 シュンツ

ペコリーヌ「あ、ちよ！悟空さん！」

キヤル「あいつ！あたし等を置いて逃げたの!？」

コッコロ「なるほど…気を使ったのですね。」

悟空は瞬間移動を使い、この場から一時撤退をする。

ペコリーヌやキヤル、コッコロもこの場は一度引いて、またここに来よう、と指示を促す。

???'「………あら、また居なくなりました………」

無駄です…あなた様を見つければ、たとえ天国だろうと地獄だろうと追いかけますわ…

ペコリーヌ「はっ…はっ…はっ…」

一度病院…?を離れ、ペコリーヌたちは街の広場の方まで来ていた。そこに悟空の姿は無いが無事であることはたしかだろう。それに、自分達よりも強く、簡単に負けるはずが無いであろう。

キヤル「ここまで来ればもう無事ね：はあ：はあ：」

コツコロ「悟空様にあのようなお知り合いがいたとは：」

キヤル「知り合いな訳無いでしょうがー!!それにあいつが話してる時の表情見た!?!あんなの単なるストーカーか何かでしょうがー!!」

ペコリーヌ「確かに悟空さん人柄も良いですし、体つきや、顔も良いですからね。それに、何よりも強いですし。」

キヤル「つてか、あいつがいつ会ったのか、よ。」

コツコロ「それは悟空様に直接聞いてみないと分かりませんね。」

ペコリーヌ「はい。つて、ユウキ君はどうしましょうか。」

コツコロ「今すぐにも強行突破：と行きたいのですが、悟空様が居ないのなら難しいですね。」

キヤル「仮にあいつが居たとしても、あの女が居るじゃない。これって詰んでない?」

ペコリーヌ「うゝん、困りましたね。」

グウ…

ペコリーヌ「あ、急に走っちゃったからお腹すいちゃいました！ヤバイですね！」

キヤル「あんた本っ当にヤバイわよ!!」

コツコロ「うゝん…まずは悟空様と合流しないといけませんし…でしたら、目印となる食事処に行くとしましようか。ペコリーヌ様のお腹も満たされて一石二鳥ですし。」

ペコリーヌ「あ！それ賛成です！」

キヤル「あんたつてば…：…：つたく。」

こうして一同は一旦、態勢を立て直すのであった。

一方その頃…

悟空「ふう〜！危なかったなあ…」

悟空はあの女性から瞬間移動で逃げ、人の居ないような路地裏まで来ていた。もちろん、なるべく気の多いところに瞬間移動したのだが、彼女に見つかりたくないのです。人の無いようなところに隠れているのだ。

悟空「あの女、やべえやつだな…：話が通じそうにねえぞ。」

普通の男なら喜ぶかもしれないが、悟空は女性に対してそんな興味が無い。確かに彼

女は可愛かったが、重い女である事、まあそれを抜きにしても悟空はそんな気は一切無い。

悟空「あんなどころ”チチ”に見られてたら怒られてただらうなく」

『チチ』…悟空が生前…？というのは怪しいかもしれないが、悟空の妻であった女性だ。

悟空「……………」

悟空はチチの事を思い出す。

口うるさく、真面目で、働け働け、とうるさかったであろう。まあチチが正しいのだが。

悟空はそんなチチを愛していた。誰よりも好きだった。

こんな言葉は普段悟空からは出てこないだろう。

それに、もう言うことも無いだろう。

悟空は只々自分が悔しくてしようがなかった。

もし、あの時ジレンを落としていたら宇宙が消滅することは無かったかもしれない。

……だが、それと同時にこの世界を知る事も無かったかもしれない。

それでも悟空は後悔していた。

皆に会いたいのはもちろんの事、自分の責任であることを謝罪したい事。

悟空「…もしおらが倒せてたら……くっ……」

普段見せる表情ではない。

悟空が気持ちの切り替えが出来るのはもう少し先かもしれない。

## 第5話く後編く ユウキ奪還!!

悟空「まさかこんな事になっちまうなんてなく。おーい！ペコリーヌ！こつちにステーキ2つ持つてきてくれ！」

ペコリーヌ「はいはい！」

キヤル「はあ…あんた等つてば、いきなり現れたと思つたらよく食うわ、あいつはあいつでバイトしながらなんか食つてるわ…ギルド結成早々問題だらけね。ん？」

あのあと悟空はペコリーヌ達の元へ瞬間移動で合流した。

そして作戦を練ることになったのだが、どうせならペコリーヌが『コカトリス亭』ならどうか？と聞かれたので、現在コカトリス亭で作戦を練つてるところだ。

キヤルは横目でコッコロを見るとものすごく落ち込んでいるような表情で下を向いている。

キヤル「ちよつとココロ助、あんたまで倒れられちやお手上げよ。」

悟空「そうだぞ。こんな時こそ飯を腹一杯食つて元気出さねえと体が持たねえぞ。」

キヤル「それはあんたとあいつだけでしょうが。」

コッコロ「…はい。」



慰めの言葉をかけるもまだまだ落ち込んでいるコッコロ。

この様子だとしても引つ張ってしまおうだろう。

少しでも気を楽にするため食事を促す。

悟空「よし！んじや」裏メニユー”つちゆうやつを頼むとすつか！」

キヤル「待って。普通のご飯にして。」

悟空「なんだよ、元気出るのによ。おめえはわがままだなあゝハハッ！」

キヤル「ぐぐ…！うっさいわよ!!」

場所は変わって…というよりは元に戻って、あの”病院”。

一人の女性が扉から出る。赤く、露出の多い服を着、大きな斧を持って怪しいオーラを放つ女性…名を『エリコ』。

悟空の事を自身の”夫”と称し、ユウキの事を”ペット”扱い。見た目だけでなく身まで異常を喫しているこの女性は今、街の方まで出向いている。

エリコ「ああ…運命命の人は今頃何処に…また、逢えますよね…：

運命ですから…♡

双目を赤く光らせながら不気味に笑う姿はこの世の何よりもおぞましいものかもしれない。

??? 「その方…」

エリコ「…」

突如声をかけられ、エリコは振り向く。

そこに居たのは…とても怪しい占い師だった。

??? 「占いなどができますか？お代は要りません。父が占いたい、と言っているのです。」

エリコ「…」

エリコは悪態をつきながらも中へ足を運ぶ。

外見からして怪しかったが、内装も暗く、いかにも占いと言っているほどだ。

??? 「ようこそ。」

中にいたのは女性で、エリコと同じく両角を持っている。

紫がかった髪とエリコ程では無いが肌の露出が多い服。

??? 「…では。」

その女性が目の前に置いてある髑髏に手をかざすと、髑髏が水色に光りだす。



突き刺さった斧に更に力を加えるエリコ。

鬮髑 「ま、待ってくれ！ 占いはちゃんとやった！ あんた運命の人探してんだろ!?」

エリコ 「！」

鬮髑 「もうすぐだ！ もうすぐ会える！ 運命の相手は、激しい戦、と共にお嬢ちゃんの前に現れるだろう！」

エリコ 「:!!」

ここは：街でも少し外れたところ。

治安の悪い街だ。

そこにエリコは：居た。

エリコ 「もうすぐ、あの人に会える。」

そして治安の悪さも相まってか、頭のネジが外れた男達が次々とエリコにおしかかってくる。

しかし、エリコはそれを一蹴した、斧で。

エリコ 「あなた達なわけ無いでしょ：私の運命の人はあの方なのだから：」  
夕日を背に：エリコは帰っていく。

男達が手にしていた宝の入った袋を手にながら。

キヤル「あんた、目付けられたわね…」

コツコロ「悟空様が居ても完全に詰み、ですな。」

ペコリーヌ「あの女性は悟空さんの事を夫と称していたわけはそういう事なんですね。」

悟空「こりや明日しか無えかもな…」

四人はギルドハウスに戻り作戦を練っていた、そして悟空に対し質問等を行っていた。

キヤル「あんたがあのととき、ワープみたいなの使ってたじゃない。あれでいけるんじゃないの?」

悟空「確かに”瞬間移動”を使えば5秒もかからず行ける、けどよおあいつに見つかったら終わりだ。それに不自然だろ?朝起きたらユウキが急に居なくなるっちゆう訳だし。」

それにこの街もあんま広いって訳じゃ無さそうだしな。次に見つかつたときはなんて言い訳すりやいいのか分かんねえ。」

キヤル「へ、へえ…そうね。」(何、以外にこいつの頭って働くじゃない…)

コツコロ「た、たしかにそうでございますね。」(珍しく悟空様の頭が働いております)

…)

ペコリーヌ「そうなれば…どうすればいいんでしょう…」

悟空「うくん…力押しで行けると思うんだけどなく。なんか嫌な予感するしなく。」  
ペコリーヌ「うくん…」

このあと夜更け過ぎまで作戦を練りに練りまくったそうだ。一方その頃、ユウキはエリコに入院していることがバレてペットとしての調教を受けていたとか…

そして朝、ギルドはにぎやかというわけでは無いが、ある程度は良くなってきたかもしれない。

まあ、仮にもあそこは病院だ、と無理に信じ込んだ結果つぼくなるが。

悟空「朝飯食ったら様子見に行ったほうが良いかもしれないねえな。」

ペコリーヌ「……………はい。」

どうも歯切れの悪いペコリーヌ。

悟空やキヤル、ペコリーヌ達が顔を見合わせ、？、となる。

ペコリーヌ「うくん…なんか引つかかるような…うくん…」

エリコ「さあ、召し上がれ。」

ユウキ「え……………無理。」

ゴキリツ：

現在ユウキはエリコに首輪をつけられてベッドの上にいた。まあ、どういう状況かという朝ごはんは。

普通男子はあく、をしてもらうと嬉しいものだろう。

だが、相手は何処の馬の骨かも分からない野蛮な女性だ。

嬉しいはずがない。あ、それとさっきのゴキリツ…という音はユウキの首の骨の音だ。

エリコ「クスクスクス…」

ユウキ「ハッ……………」

ペコリーヌ「急いで急いで！」

悟空「いきなりどうしたんだ？」

現在、悟空御一行は病院にむけて走り出している最中だ。

ギルドハウスを慌てて飛び出るとペコリーヌは全力を走り出す。それに驚くと悟空達も跡を追い、一緒に病院に向かっていている途中だ。

ペコリーヌ「思い出したんです！この街で噂のギルドを！」

コツコロ「ど、どのような…」

ペコリーヌ「そ、それは…」

悟空「ついた…ん？なんだあいつら…」

悟空達は病院につくと人だかりが出来ていることに気がつく。入口には男質がうじゃうじゃとおり、ユウキを診てくれていた医師になにかを言っていた。

正確にはこの女性は『ミツキ』というのだが…

ミツキ「こんな大勢で押しかけてなんの用かしら？」

「ふざけんな…この街から盗んだお宝横取りしやがって！」

「盗賊の俺たちから盗むなんていい度胸してんじゃねえか！」

ミツキ「ナナカちゃん、なにか知ってる？」

ナナカ「私つてばああいう界限の人たちには興味が無いので、さっぱり！」

「とぼけやがって！ここに」あいつ」が居るのは分かってんだぞ！」

次々と盗賊の男たちは大声を上げ、ミツキたちに抗議をする。そして「あいつ」というのは大体察しがつくだろう。

ヒュッ

悟空「お…あの斧。」

ガンッ！



窓からいきなり斧が投げられ地面に突き刺さる。

男たちは一瞬で戦慄する。

エリコ「朝から騒々しいですね。私の大切なペットが怖がつてしまおうのですが……ただでさえ旦那様が見つからず機嫌が悪いというのに……この………この………」

ゴミ虫が……

「居るじゃねえか……!!」

ザツ……

エリコは窓から抜け出し、男たちの元へ降りてくる。

ミツキ「エリコちゃんお知り合いなの？」

エリコ「喧嘩なんかよしましょう……お友達じゃないですか。」

「ふざけんな!頭のネジ吹っ飛んでんじゃねえのか!」

「話にならねえ!やっちまえ……!!」

男たちは士気を上げ一斉にエリコに取っ組みかかろうとする。

エリコ「そう……覚悟はいいですわね?」バチバチバチ……

エリコは持っていた斧に力を込めると周りには赤い稲妻のようなものが走る。それ

だけではなく妖しく光る炎は今にも焼き尽くさんばかりに燃えたぎっていた。  
デッドリー・パニツシュ！

バキバキバキ！！

悟空「やべー！」

悟空は危機を察知したのか高速で移動をする。

その動きにペコリーヌ達は気がつけなかった。

「お、おお……お……」

デッドリー・パニツシュによつて地を砕かれると、地面にはどンドン亀裂が入っていた。その隙間から見える妖しい光が男たちの元へと迫っていた。

そして…

ドオオオオオオオン！！

大爆発を起こした。

キヤル達は唾然とした顔で現在の状況を見ていた。

凄まじい爆発は男たちを呑み込んだ……かのように思えたが…

「ひいひいひい！！………つてあれ、生きてる？」

大事には至らなかった。

なぜなら…

悟空「ふうくあつぶねえ!」

悟空が居たからだ。

「あ、あんた…助けてくれたのか?」

悟空「おう。しつかしまあおらもやべえ奴に目つけられたもんだ。」

「お、思い出したあのあの技…あいつ…壊し屋だ!」

悟空「ですとろいヤー?ふうん、そんな名前なんか。」

<sup>DESTROYヤー</sup>  
壊し屋と称されたエリコ。

とても医者とは思えない理由がそれだ。

エリコ「やつと!やつと会えました!!貴方様を探していたのですよ!!」ゾクゾクゾク

∴

悟空「おらやつば苦手だな…:…:…つ!」

悟空はすぐに気づいた。攻撃が一手で終わらないのだと。

次見たときにはナナカが魔法を溜めていた。

ナナカ・インフィニットブラスト!!

悟空「ふん!」シュバツ

悟空はナナカの放たれた魔法を手だけで空へ弾き飛ばした。

ナナカ「ええくくく!?弾き飛ばされたくく!?」

「まさか、蒐集家!?」

ナナカにも異名があり、蒐集家と男たちが叫んだ。

悟空「おめえ危ねえぞ! あんな爆発食らったらこいつら死んじまうぞ!」

ミツキ「そうよ二人とも、ご近所迷惑でしょ…」

「ま、まさかあいつ…」

悟空「っ! ……あいつもか…」

カースブルーム

投げられた花卉が悟空たちに迫っていく。

一見地味な技だが悟空は察知してすぐに対処する。

悟空「はっ!!」

ドオン!!

悟空は気合だけで技を相殺させた。

「やっぱりあいつ!! 隻眼の悪魔だ!!」

そしてミツキに対しても隻眼の悪魔という異名が。

悟空「おめえら早く逃げる。痛え目に会いたくなかつたらな。」

「あ、ああ…恩に着るよ兄ちゃん!!」 ドドドドドド…

男たちはそう言われると一目散に退散した。

悟空「さて、と。おめえたちだろ？ペコリーヌから聞いたぞなんか色々やべえギルドがあるって聞いてよ。」

『トワイライトキアラバン』って言うんだろ？」

ミツキ「あら？知ってくれていたのね。」

悟空「ああ。色々聞いたからよ。それにしてもおめえら一般人相手にそりや無えだろ。あんな技まともに食らつちまつたら怪我で済まされねえぞ。」

ミツキ「怪我なら治療をすれば良い話じゃない？」

悟空「自分で怪我させといてそりやどうかと思うけどな…

………おめえずつと見てくるな。」

エリコ「ハア…ハア…旦那様…今迎えに来られたのですね！私はお待ちしておりますよ！！」

悟空「………だいぶやべえな…ま、いっか。そうやって悪さする連中はおら好きじゃねえんだ。今ここで食い止めさせてもらうぞ。」

ミツキ「まさか自分から入院することを願うだなんて…嫌いじゃないわ♡」

エリコ「ああ、親しき中にも礼儀あり。夫婦の中にも戦あり!!こういう事だったのですね!!」

ナナカ「私の全力の一撃を物ともしないとは実に興味深いです!!」

三人はすでに戦闘態勢に入っていた。

悟空はそれを確認すると：

悟空『ペコリーヌ、聞こえるか?』

ペコリーヌ「へ、へ? 悟空さん!？」

岩場の陰に隠れていたペコリーヌの脳内に悟空の声が聞こえてくる。

キヤル「ちよ、ちよつとあんたどうしたのよ!？」

コツコロ「悟空様がどうかされたのですか!？」

当然二人にもわかるはずがなく、悟空は悪い悪い、と二人の脳内にも声をかけた。

キヤル『あんた本当になんでもありね。』

悟空『ははっ! 悪い悪い。つてそこじゃねえ。おらがこいつらを足止めしとくからお

めえたちはコウキを救ってこい。』

ペコリーヌ『ええー!?! それは無茶なので……つてそうでもありませんね。』

コツコロ『悟空様の力量ならば切り抜けられそうですね。』

キヤル『脳筋思考ではあるけど、それしか方法が無いわね。分かったわ。』

悟空『おう! じゃあ頼んだぞ!』

悟空はテレパシーを止め、三人と対峙する。

ペコリーヌ「悟空さんのためにも行きましょう！」

コツコロ「はい！」

キヤル「もちろんよ！」

三人はユウキ奪還作戦を実行する。

エリコ「アハハッ！貴方様の血を見せてくださいませ!!」シュツシュツ

悟空「よつと。」サツサツ

エリコが見境なく斧を振るう、だが悟空はそれをいとも簡単に回避していく。

ナナカ「これならどうですか！」バババババ

悟空「ほつ。」パシツパシツパシツパシツ

ナナカの連続の魔法攻撃も手で弾き、回避していく。

ミツキ「これならどう！」

ミツキは薬品をばら撒き、辺り一帯が毒霧のようなもので包まれる。

悟空（毒か：なら。）「ハッ！」キラッ

悟空は体に白い気を纏うとどんどん毒を打ち消していく。

悟空「へへっ：そういう小細工は通用しねえぞ。」

エリコ「私は嬉しいです！強き貴方様が!!強き夫であることが!!」シュンシュン

悟空「そりやどう…もっ！」ガッ

エリコ「きゃ！」ドオオオン

エリコが振るってきた斧に蹴りを叩き込むとエリコは大きく吹っ飛び瓦礫に埋もれる。

ミツキ「エリコちゃん！」

悟空「余所見は関心しねえな。」スッ

ミツキ「!？」

ミツキは苦手な距離、近距離に持ち込まれることを苦手としていた。そのため悟空が急に懐に入ってきたことに対処出来なかった。

ミツキ「きゃあ!!」ドオオオン

悟空に投げ飛ばされると病院自体に叩きつけられる。

ナナカはというと悟空の投げた気弾に当たってしまいあやふやしながら爆発した。もちろん無事だ。

悟空「言うほども無えな………つと、まだやれるみてえだな。」

瓦礫から起き上がってくるエリコを見ると再び戦闘態勢に入る。

エリコ「クスクスクス…これが愛…貴方様の愛なのですね!!」ギョロ

悟空「……おめえ不死身なんじゃねえのか？」



悟空は多少引き気味で再びエリコを迎え討つのであった。

ペコリーヌ「ありました！きつとこの部屋です！」

ペコリーヌ達は悟空が足止めをしている内に、ユウキを奪還するべく固く閉ざされた扉の前にいた。

コッコロ「鍵が無ければ……！くっ……」ガチャガチャ

キヤル「だつたら鍵を探せば！」

キヤルは鍵を探そうとその場を離れようとするが、ペコリーヌを見る。

キヤル「ちよ、ちよつとあんた何やってんのよ！鍵を探すくらい手伝いなさい！」

ペコリーヌ「その必要はありません。」

コッコロ「ペコリー……又様……？」

キヤルとコッコロが不思議そうな顔でペコリーヌを見つめるが本人は一切気にしない。ペコリーヌは腰を落とし、膝を曲げ、左手を前に出し右手を引いている。

キヤル「い、いや……もしかして……」

コッコロ「ペ、ペコリーヌ様はもしや……」

大体察しがついただろう。

ペコリーヌ「ビュー………」

はあツツツ!!!

ドオオオオオオオオン!!!!

固く閉ざされていた扉が開いた：いや、壊れた。

ペコリーヌは空手でいう正拳突きを繰り出し、鋼鉄の扉を粉々に砕いてしまった。どこかこういうところは悟空に似てきているかもしれない。

コツコロ「な…な…なんと…」

キヤル「あ、あんた…あいつに似てきたわね…」

大きく煙が立ち込めると見えてきたものはびっくりしている少年の顔、ユウキだ。ユウキは何が起きているのか理解できていないようだ。

コツコロ「主様!!」

コツコロはすぐさまユウキに駆け寄り安堵を確認する。

キヤルも少なからず心配していたことは本当だ。

ペコリーヌも、四人を抱き寄せ強く強く抱擁する。

ペコリーヌ「とりあえず一件落着です！」

キヤル」とはいえ、外にはあいつがいるわ。まあ悟空がいるなら問題無いでしょうけど。」

コツコロ「ですが、気が抜けないのは事実：帰るまでが任務も同然です。」

ペコリーヌはウウキを背負うと出口へと向かった。

キヤルとコツコロもその跡を追う。

エリコ「アハハツ!!」ギユオン

悟空「おめえ中々やるなあ。ヤムチャとまではいかねえけどいい線いってんぞ！」スルルスルリ

まだまだ戦いは終わっていないなかった。一見、防戦一方にも見える戦いだが、第三者が見ても明らかだった。

『エリコは悟空に勝てない。』というのは決まっていた。

悟空はエリコの攻撃をミリ単位で避ける。

斧、拳、蹴、爪、を使って急所を狙ってくる。

エリコは殺したいなどとは思ってはいなかったが、そうせざるを得なかった。自分のものにするには少しでも弱らせないと手には入らない。…そのため、狙ったのが急所。

頭、首、心臓、この三点を執心に狙ってくる。

エリコ「ぎゃー！」ガタンッ

悟空「ほらほら、前だけ見てるんじや後ろの攻撃に気付けねえぞ！」

悟空の手刀がエリコの背中に当たると、エリコは体勢を崩しながら瓦礫に吹っ飛ばされる。

悟空（お、あいつらはあいつらでどうやら上手くいっただみてえだな…）

悟空はペコリーヌたちの気を見つけると深く安心した。

悟空「なあ、おめえは確かに強え。でもそれだけなんだ。おらには敵わねえ。おめえのモノにもなんねえしな。」

そう言い放つと瓦礫を退けエリコの焦点が悟空に一致する。

エリコ「何を言っているのですか？私、そういう冗談は嫌いではありませんが、好きでもないんです…早く私の元に来て？」

悟空「おめえなんか勘違いしてねえか？おらとケツコンした思い出も無えしよ。それにおら、おめえのことそんなに好きじゃねえし。」

エリコ「ケツコンしてないのならば、すれば良いことです。…………好きでは無い…………ならば愛してる、と？…………私は貴方が好きです、ですがそれ以上に愛しております♡」  
悟空「駄目だ通じねえや…」

そんな話をしていると病院の中からペコリーヌたちが顔を覗かせて悟空たちの元にやってきました。

ペコリーヌ「お待たせしました悟空さん！ユウキ君は無事です！」

キヤル「やつぱあんたつてばチートよね、傷ひとつついてないじゃない。」

コツコロ「遅くなり、大変申し訳ありません…」

ユウキ「悟空…お待たせ。」

四人の無事を確認すると悟空は再びエリコの方を向く。

体がプルプルと震えており、血涙を流しているのではないか、と思うほどに目が血走っていた。

エリコ「あら…なぜ貴女方が…そしてなぜその子を背負っているのです…？それに…  
……………」

なぜ私の旦那様と気安く話していらっしやるのですか？」

ペコリーヌ「ひいっ…」

キヤル「ひいっ!!」

コッコロ「お、恐ろしや…」  
ユウキ「ツツ!？」

四人とも顔を引きつらせエリコが只々怖くて仕方なかった。だが、悟空は違った。

悟空「おらの大事な仲間なんだ。これ以上好き勝手はさせねえぞ。」

エリコ「分かりません、分かりませんわ。貴方には私だけでいいでしょう？あの子と私と貴方で幸せな家庭を築こうではないですか…」

悟空「……悪い、おらはそういうのは興味無えんだ。」

悟空「おめえら！目をつぶれ!!」

ペコリー又たちに目を塞ぐよう大きな声を上げる悟空。

エリコは一瞬ポカンとし、なにかするのだろう、と察する。だが、遅い。

悟空が使ったのは…

太陽拳!!

眼の前が眩しく光に包まれる。ペコリー又たちはとっさに目を反らし免れる。だが、エリコは…間に合わなかった。







るだろう？症状が風邪に似ているから良く誤診されるんじゃないが、ちゃんと治療されとるよ。いやあ大したモンだ。何処で診てもらったの？」

コツコロ「じ、実はミツキ先生の所で……」

医師「……………あゝ、なるほど。あの先生、少々クセあるからのお……まあ、腕は確かだから安心して。」

キヤル「……ほ、本当に医者だったのね……あのナリでも。」

その後、病院を出て広場の方までやってくる。

ユウキは悟空におんぶをされて、とても疲れたような表情だった。

ペコリーヌ「い、色々ありましたけど……病気も心配無いようだし、良かったですね。」

悟空「ま、まあ……色んな奴が居るしな……根っからの悪じや無さそうだし。」

ユウキ「ノ、ノロワレソウニ……ナタヨ……」

悟空「まあ、あのじつちやんが言ってたけど、あいつ等の病院から出てこれたら元の倍以上は元気になってるって聞いてるからな。大丈夫さ。」

キヤル「それ……ホントかしら……」

コツコロ「信じ難いですが……主様の処置をして下さったのは本当ですから……」

ペコリーヌ「……………悟空さん、あの女性……」

悟空「ん、ああ、あいつか。まあ、おらの事が好きつちゆうんは嬉しいけんどおら別に興味無えからな。」

そう言うのとペコリーヌは歩みを止める：

ペコリーヌ「私も…私達も、悟空さんの事が好きですからね！」

キヤル「な…」

コツコロ「！……もちろんです！」

ユウキ「うん！」

悟空「!!……ああ！おらもおめえ達の事が大好きだ!!」

こうして、ユウキ奪還は無事成功した。

## 第6話く前編く 星空に語られる人生

ペコリーヌ「朝ですよ！美味しいご飯が出来ましたよ！！」

朝だ…。今日もまた騒がしくなるだろう。…まあしかし、この間の件の様にはならないと思う。

コッコロ「おはようございます。ペコリーヌ様。」

ユウキ「ふわぁ…」

悟空「おめえは起きるの早えなあ。」

ペコリーヌ「三人共！オイツス!!」

三人につられて階段からキヤルも降りてくる。

キヤル「うるさいわね。朝っぱらから元気良すぎじゃないの？」

ペコリーヌ「さあさあ！早く座って下さい！」

そう言う四人はペコリーヌの声と共にそれぞれの席につく。朝食、並べられたのは卵やトマト、ハムに玉ねぎを使ったサラダである。柑橘類の果実も加えられ、横にはドレッシングも。そして焼き立てのパンもある。

悟空「がつがつ…ん、んぐ…んめえ!!」

キヤル「朝からすごい食欲…」

コツコロ「朝食の準備、ありがとうございました。」

ペコリーヌ「良いんですよ！今日はやりたいことがあるので！」

キヤルはパンを一つとって口に頬張ると横目にペコリーヌを見る。

キヤル「何だか朝から張り切ってるわね。」

ペコリーヌ「えへへ。色々トラブルに巻き込まれましたけども、いよいよ今日は美食殿の活動を開始したいと思ってます！」

悟空「……………おら、なんか寒気がするぞお…」ブルブル…

ユウキ「ペツ…ト…ト……」ブルブル…

男性陣は何か良くない事でもあったのか（すつとぼけ）体に違和感を覚える。特にユウキは…

ペコリーヌ「じゃじゃーん！」

ペコリーヌは持っていたクエストの内容が貼つてある紙を一同に見せる。その内容は。

ペコリーヌ「掲示板を見に行ったら、こんな依頼が出てたんです！」

キヤル「…何よそれ。」

コツコロ『タルグム村』にて、スパイスの原料を収穫するための人員募集…報酬は

ニットトーストスパイス一式……」

ペコリーヌ「そうなんです！この村の名産品タルグムシードは、幻のスパイスと呼ばれるほどの一品なんです!!」

コツコロ「なるほど、一石二鳥：棚からぼたもち的なお仕事ですね。」

ペコリーヌ「イエス!!」

サムズアツプ片手に舌を出しながら可愛らしい仕草をするペコリーヌ。悟空は、労働内容よりも報酬の方に目が行っている。

キヤル「あたし肉体労働向いてないのよね。魔法使いだし。」

悟空「なんだよ。じゃあ今からでも鍛えれば良いじゃねえか。」

キヤル「そりゃあんたみたいに近接で戦えて遠距離でも……っていうなら良いけど、あんたみたいな筋肉バカじゃないのよこっちは……パスするわ。」

悟空「ちえく、なんだよ。って、お、おお、どうしたんだペコリーヌ!?!」

悟空が慌ただしく声を上げるとペコリーヌは瞳に涙を溜め、ウルウルと今にも泣きそうなる状態になっていた。

ペコリーヌ「……美食殿の初めてのクエストは……み、みんなで……やりたい……なっ……てえ

……」ウルウル

悟空「ま、まあそりゃそうだけどよお。……なあキヤル。」

ユウキ「……」

コツコロ「……」

無言の視線がキヤルに突き刺さる。なんとも言えない状況にキヤルはしびれを切らす。

キヤル「……うう、わ、分かったわよ!!行くわよ!行けばいいんでしょ!!」

こうして納得させることができた。

それが嘘泣きなのかどうかはペコリーヌのみぞ知る。

男「嫌だなあ……変だなあ……怖いなあ………ヒッ!?」

同時刻、名も知れぬ男は山の中に居た。背に木を入れた藁を担ぎうす気味悪い山を一人で歩んでいた。

何やら男の背後……いや、周囲には黒いモヤで出来た人影が居た。瞳は2つで青白く光り、男をジツ……と見ている。男はびっくりして、奇声を上げた。この影にか? いや、違う。

真正面に居るではないか、ドッペルゲンガーが。

男? 「嫌ダナア……変ダナア……怖いナア……」

男「ひっ……ひっ………ヒッ!」

そして男は姿を消した。

悟空「…なんだ、今のは。」

ペコリーヌ「…どうかされましたか?」

悟空は直感なのか何なのかはわからないが、悪寒が走ったことに気づいた。ペコリーヌ達は何も分からないのかキョトンとした表情である。

悟空「いや、何でもねえや。ちよつとな…」

そういうともう一度作業に取り掛かる。

悟空（絶対に気の所為じゃねえ…今のは変だ。気が一つ消えたにしても不自然すぎる。…こりや近々やべえ事が起こるかもな。）

男の勘はハズレてなどいなかった。

その頃キヤルは釣りで奮闘していた。自分がちゃんとした食材を確保しなければ何を食されるのか分からない…ため。良い引きではあったが、いざ引いてみると、中身は抜けた貝殻……





悟空「帰ったぞー！」

三人は声のする方に反応すると二人が鳥を抱えていたのを見る。ペコリーヌが1羽、悟空は4羽。

ペコリーヌ「美味しそうな鳥捕まえちゃいましたよー！」

悟空「かなりデケエから量には困らねえぞー！」

ユウキ「おかえりー！」

キヤル「でかした!! 今日のおんたらは最高にイカしてるわ!!」

先程の表情とは打って変わってご満悦。手のひら返し。

夕食の支度は時間を掛けて、キヤルは急かしながらもちゃんと待っている。味見担当として悟空が食べていたのだが

既に四分の一の食材が無くなっていた。

それにはキヤルも「バツカじゃないの!？」荒く叱りあげていたが、悟空は「すまねえ!」と悪気は無さそうだが、あまり誠意の込められていない謝罪をしていた。

そして出来上がり、空はすでに暗く星が煌めいていた。

野草に包まれた焼いた丸鶏からはとてもいい匂いがしていた。そしてそれぞれ一口ずつ頬張ると…なんとも言えない絶妙な味。

悟空「うんめえ〜!!」

ユウキ「美味しい〜!!」

ペコリーヌ「とつても美味しいですね! ヤバいですね!!」

キヤル「〜〜!! 美味しい!!」

コツコロ「とつても美味でございます!!」

キヤル「鶏肉つてここまでジューシーになるの!? こんな初めて!!」

コツコロ「一緒に蒸した野菜も、甘みが増して美味しいですね!」

ペコリーヌ「でしよでしよ? 旅先で習った調理法なんですよ!」

悟空「やっぱおめえ料理上手なんだなあ。」

キヤル「やっぱ美味しい料理にはまともな食材! 虫とかカエル使おうとしちゃだめ

よ!」

悟空「ん? カエルも普通にうめえぞ! 焼いたらもつとうめえんだけどな! ハハハ!」

キヤル「食べないわよあたしは!!」

悟空「そう言うなつて〜: お? これなんだ? ペコリーヌが採ってきたんか?」

悟空の手には赤い果物が乗っけられていた。梅干しのような形をしていて、美味しそ

うには見えないが:

ペコリーヌ「ああそれは、鳥と一緒に採ってきた果物ですね! キヤルちゃんもコツコ



と思つたら次は目に涙を溜め、泣いている。

キヤル「あだしだつて！ほんとはもつとじつがりじて!!あのおかたのためにい!!…うわああああん!!!」

悟空「ハハハハ!!なに泣いてんだよ!!そんなに美味かつたんか〜〜!!!」

ペコリーヌ「さあさあここで思いつき泣くと良いのです!!」ガバツ

キヤル「うわああああん!!いいいいひひいい!!」グスグス

ペコリーヌはそれを抱きしめ子守唄を歌うかのように、ずいずいづつころばし…と歌い出した。

最早宴会であつた。

そして力尽き…

ペコリーヌ「すびい〜…すびい〜…」

キヤル「うう〜……」

ユウキ「ずい…ずい……」

三人は眠つてしまった。コッコロは三人に毛布を掛けそつと…寝かせている。

コッコロ（素敵な方達。）

一人で黄昏れていると横にドツと男が座る。

悟空「眠れねえんか？」

コツコロ「いえ、ただ眺めていただけです。あんなにも幸せそうに寝ているなんて…」  
悟空「…そっか。」

悟空も察してか小さい声で話す。

コツコロ「ギルドを組めて、本当によかった。」

悟空「…だな。」

二人は空にいつぱい広がる星を見る。

コツコロ「…悟空様は何故、そんなにもお強いのでしょうか？」

悟空「ん？」

コツコロ「あ、いえ。ずっと気になっていました。ピンチな状況でも我々を救っていただく力は何処に隠されているのでしょうか…て。」

悟空はうーん、と少し頭を悩ませもう一度星空を見ながら話し出す。

悟空「おらは別に最初から強かったわけじゃねえさ。それどころかよ、おらは落ちこぼれだったんだ。」

コツコロ「悟空様が、ですか…？」

悟空「ああ、おらたちの世界ほしじゃあな、戦闘力つてのがあったんだ。その数値で評価されていたんだ。」

コツコロ「戦闘力、ですか？悟空様は…」

悟空「…大体は1000とか、エリートの出なら10000は簡単に越える。ある奴は生まれながら『10000』を出す奴も居たかな。」

コッコロ「生まれながらにして戦闘の才に長けていたのですね…悟空様は？」

悟空「聞いた話によるとおらは2だったからな。」

コッコロ「?!?!えっ！悟空様がですか?!」

少し大きな声を出し悟空にしっ、と注意される。

悟空「まあな。そこから色んな奴に出会って、戦って、死にかけて、仲間になって、仲間の何人かは死んでいって、でもまた生き返って、またピンチになって…そんな道ばかりだったからな。」

コッコロ「とても…壮絶な人生ですね。」

悟空「まあな。…でも、だからこそ今のおらが在る。最初は頭ん中空つぽでも色んな奴に詰め込まれて、いっぱい溢れかえってき……」

コッコロは悟空の顔を見ると、楽しげな表情に隠れた少し寂しい感情を抱いていたのがわかった。いつも楽しげに振る舞っていた、それは本心であるだろうが、その奥にもきつと何かがある。コッコロは少し分かったかもしれない。

孫悟空という男が。

悟空「さ、明日も早いし寝るか！」

コツコロ「そうでございますね。」

んしょ、と悟空は背を向けすぐにいびきをかきだした。

コツコロはずつと悟空の背を見ていた。

この大きな背中にはたくさんの信頼と努力と悲しさが詰まっているのだろうか、と自分に語りかけていた。

コツコロ「おやすみなさいませ。」

そしてコツコロの意識も数秒の内に消えた。

## 第6話く後編く ぼっち卒業!……怪しい陰

翌朝……

キヤル「んくくく!……あれ?あたし昨日……」

悟空「よ!起きたか。」

目を覚まし声に反応する。体も視線もそちらの方向に自然と反応するとそこには悟空やペコリーヌが朝のラジオ体操で体を動かしていた。

ペコリーヌ「おはようキヤルちゃん!気持ちの良い朝ですね!」

キヤル「そ、そう……?なんかあたし頭がボーっとするんだけど……」

悟空「まあ寝起きだし仕方ねえんじやねえのか?」

コッコロ「おはようございますキヤル様、どうぞ。顔を洗うとスッキリしますよ。」

横からコッコロが現れてキヤルにタオルを渡す。それも水で湿らせてヒヤつとしたものだ。

キヤル「そ、そうね。」

コッコロ「主様もちょうど池の辺りで顔を……ッ!」

コッコロがユウキの方を見ると信じられない……いや、慣れてきてしまっている光景が



目に入ってきた。ライオン、獅子の様なたてがみと顔を持ち、体は筋肉と体毛で覆われているモンスターに唾えられていた。

そしてそのモンスターは気づかれるとすぐさま逃走した。

悟空「あちやー…またこうなったんか。」

コツコロ「なに突っ立ってんのよ!?!追いかけるわよ!?!」

ペコリーヌ「ユウキ君!今救けますからねー!」

コツコロ「主様ー!!」

四人もその跡を追いかける…

悟空(瞬間移動があっけど…ま、いつか!あんまり頼りすぎるとこいつらも成長しねえしな。)

悟空は敢えて瞬間移動を使わなかった。

一方その頃…

モンスターは森の中を駆け回っているところを上空からの謎の射撃によりユウキを離し駆けずり回っていた。痛みもがきながら。その際ユウキはいきなり離されたもので勢いにつけて思いつきり木に激突した。そして意識を手放した…

??? 「あ、頭から突っ込んだじゃってましたよ…?」

??? 「だから言ったじゃないか!もうちよつと引きつけてからだつて!」

謎の声によつてユウキは徐々に意識が回復してくる。声、それも女性の若々しい声。辺りがだんだんと明るくなってくる。そして、ユウキが見たものは木のゴブ…に顔が描かれているもの。

??? 「お、お怪我はありませんか?」

ユウキ「お…」

??? 「よ、余計なことかとお、思いましたが、ま、魔物に襲われていたご様子だったの  
で…」

吃りながら話しかけてくるが悪い者では無さそうだ。ユウキは体を起こして辺りを見渡し再びゴブを見る。

そして、激しく振る…!

??? 「あく!優しく!!優しく扱ってくださいーい!!…………ハッ!」

ユウキ「ありがとう!」

??? 「ど、ど、ど、どういたしましたして!!あの、私アオイといいます!」

緑の帽子に白と金が混ざりあつたような髪、服も緑がベースとなつており背中には弓

が、そしてエルフの耳、その少女は『アオイ』と名乗った。どうやら声の正体も、謎の射撃も彼女の様だ。

ユウキ「僕はユウキ！」

アオイ「!……………」

ユウキ「話してた？」

アオイ「あ、あの私怪しい者では……ただ人形と話すというだけで……この子は友達が出来た時の練習用人形……『大丈夫マイフレンド君一号』です……」

ユウキ「フレンド？」

アオイ「私、動物や植物とはお話出来るんですけど……人間の友達が一人も居なくて……友達が欲しいって!ずっと、ずっと!!ずっと!!!思ってたんです!」

どうやら人と話すことに抵抗がある……いわゆるコミュニケーション能力が低く一人ぼっち、というやつだ。

そして話すうちに彼女の闇が出てくる……

アオイ「それから早数年、自分で拵えた大丈夫マイフレンド君一号と話していたんですが……流石に、会話のレパートリーも枯渇してしまい……」

きつと……私みたいな者には友達なんて十年早いんです……!!」

目のハイライトは消え完全に俯き、近づこうにも近づけない。そんな状態だ。するとそこに…

悟空「よう！ここに居たんか！」

ユウキ「あ、悟空！」

アオイ「!!」

悟空が現れた。

どうやら、手分けして探したらユウキをたまたま見かけたらしい。その際に悟空も彼女が誰なのか、などユウキに質問していた。

悟空「ほー！そつかあ！おめえが救ってくれたんか！サンキューな！」

アオイ「あ、いえいえ…私は別に…そんな…」

悟空「んじゃ、ユウキ行くか！」

アオイ「え……」

ユウキ「うん！」

アオイ「あの…」

アオイは友達がほしかった…

ずっと…ずっと…ずーと……

そして、今日ユウキという少年に出会った。彼となら友達になれそうかも……と心の片隅で思った。

しかし、彼にはすでに友達がいた。

呼び止めようとしたが、やはり……

自分にはそんなこと出来ない。

友達が欲しい……そんなエゴにつき合わせるのは彼らにとっても失礼だろう。

やっぱり……私には友達なんて……

悟空「なああ！」

アオイ「！」

すると呼びかけられる……山吹色の道着を着た男性から……

悟空「さっきの話し、こつそり聞かせてもらってただけだよ……おめえ友達居ねえんか？」

アオイ「グフツ!!……は、はい……」

改めて直球で言われるとどこか傷つく。

悟空「なあんだ、そうなんか。んじやあオラたちと友達になるか？」

アオイ「へ……」

悟空「いやあユウキも助けてくれたしよ、おめえ悪いヤツじやなさそうだし。」

アオイ「え、いやいや私はただ助けただけで…」

悟空「その助けただけでおらたちは救われたぞ。」

アオイ「！」

ユウキ「うん！助けてくれた！友達！」

アオイはその言葉を聞いて涙を流した…自分は今まで何をやっても友達が出来なかった。練習もした…一人で二役もやった。機会は今中々来なかった。

でも、でも今…その機会がやって来た。

アオイ「は、はひい…!!」

悟空「な、おめえなんで泣いてんだよ！」

ユウキ「大丈夫？」

わんわんと泣く声が森の中に響いていた。

ペコリーヌ「ユウキくーん！」

コツコロ「主様ー！」

キヤル「ユウキー！」

そして三人も…その場に合流した。

悟空「……………なあおめえアオイって言ったよな？」

アオイ「へ…あ、はい！」

悟空「なんでそんな後ろにいんだ？」

アオイ「へ!あ、あの!いくら友達になれたとはいえ、いきなり一緒に歩くのは図々しいの図う助さんかな、と!!」

あのあとペコリーヌたちも合流し、一緒にタルグム村へと行くことになった。どうやら同じく収穫に来た者同士のようだ。

キヤル「いや、案内人が後ろ歩かれても困るんですけど。」

ペコリーヌ「アオイちゃんタルグム村の収穫に来てる人で助かりましたね!」

アオイ「そ、そ、そんなあ!私なんてそれぐらいのことしか出来ないボツチですからあ  
!」

悟空「こりやだいぶ重症だな…」

キヤル「そ、そうね…」

みんなアオイを見る目がそれだった。

もちろんアオイは今まで生きてきてこんな経験は無かったためこんな反応になっ  
てしまう。

コツコロ「見えてまいりましたよ、あの村ででしょうか？」

??? 「ようこそ、タルグム村へ。」

コツコロ 「あの、この募集を見まして…」

??? 「貴方達のギルド名は？」

コツコロ 「わ、私達は…その…」

ペコリーヌ 「はいはい！ 私達、美食殿って言うんです！」

なかなか言い出せなかったコツコロをアシストしてペコリーヌがギルド名を告げる。とても暖かい迎え、そしてこの女性、シスターのような格好をしている女性…

??? 「私はフォレストイエの『ミサト』です。この娘の他にも『ハツネ』という娘がこの村に来てるんですが、今はどこかでお昼寝中みたい。」

この娘、後ろにいるアオイを指し他にもハツネという娘も。

ミサト 「今年は豊作で人手が足りなかったから助かるわく。他にも、エリザベスパークの娘達が来てくれる予定なの。」

コツコロ 「エリザベスパーク…」

悟空 「知ってるのか？」

コツコロ 「はい、以前お世話になった方がそのギルドに…」

お世話になった方…アイツだ…



ミサト「あらあ、顔見知り?」

コッコロ「はい、リマ様という素敵な女性と。」

そしてその頃…

森の中を歩くエリザベスパークの御一行が。

先頭をリマがかなりのハイペースで歩いていたが他のメンバーに注意されてしまう。

リマ「ごめんごめん、収穫が楽しみで!」

???「シオリンが息切れしてるじゃーん…」

息切れしている少女：弓を持ち、狼、犬のような耳を持つ獣人族の娘。

???「大丈夫です、今日中に着かないと…いけませんから…」

???「シオシオ、姉ちゃんに会えるからって無理は禁物だべ。病気が悪化したら大変

だあ、ここで休憩すつぺか!」

青い髪に牛をモチーフにしたような被り物を着た少女が言う。手にはフォークのよ  
うな槍のような武器を身に着けている。

???「さんせーい!」

そして赤いフードに茶色の髪の毛の少女が賛成する。その少女はどちらかという  
とリスに近い感じだ。

??? 「ふわあく。シオリン、もふもふベッド気持ちいいよ」

リマ 「んもう！私はベッドじゃないわよ！！でも『シオリ』ちゃんは、私でゆつくりしてね！疲れも取れるよ！」

先程息切れていた少女が『シオリ』のようだ。

シオリ 「ありがとうございます。」

??? 「リマリマはべっぴんさんだからモテモテだべ」

そしてその言葉が嬉しかったのか二人を弾き飛ばしてしまう。

リマ 「べっぴんさんだなんて、ヴィツ！！今日は、前髪のセットが決まってるから  
かな〜！…ん？」

リマが反応した方向には…

??? 「早…い…歩くの…早い…ムリ…ハ…キンモツ…」

四人全く姿同じの者達が現れた。

この光景、以前にも…

リマ 「鏡でも見てるみたい！」

??? 「早い…早い…早い早い早いハイハイハイハイ！！」 チャキン

リマ達に武器を向けて戦闘の態勢をとる。

リマ「怖い!もう、こっち来ないでー!!」 シュンシュン

モフモフストライク!!

リマが唐突にモフモフストライクを放つという、なんと判断力の速さ…しかし、これを

モフモフストライク…

なんと同じ姿形のリマがモフモフストライクで返してきた。しかも、色が何やら禍々しい。

そしてその二つの技は相殺され激しい爆発が起きる。

ドオオオオオオオン!!

シオリ「同じ技を…!?!」

くタルグム村く

悟空「……………」

悟空は気の乱れを感じた。前にも感じたことのある気。

それにそっくり…いやまんまその物かもしれない。

悟空(何が起きてんだ…前にもこんな気を感じたことがある。さほど大きかねえが…邪悪な感じだ。)

ペコリーヌ「どうかされましたか？」

悟空「ん？あ、いやあな。」

コッコロ「もしかして何か嫌な予感でも…」

キヤル「ちよつとやめてよね。アンタがそんなの言い出したらこつちだつてテンション下がるじゃない。」

悟空「…」

ペコリーヌ「…何か感じられますか？」

悟空「前にも同じようなことがあつたんだ。そんなときは気のせいかな、て思ったんだけどよ、今回ばかりはそうじゃねえようだな。」

コッコロ「でしたら事態が悪化する前に…」

悟空「ああ。…：…ん？なんだあれ。」

悟空が上空を見上げ指を指すとそこにいたのはふわふわと浮いている少女。どうやら寝ている様子だ。

キヤル「何あれ。」

ペコリーヌ「おおく！女のコが宙に浮かんでいますね！」

キヤル「楽しそうに言ってる場合じゃないでしょ！」

コッコロ「あ。」

やがて少女は村の大きな鐘にぶつかる。

キーンコーン

ヒュー…ドサツ…

そして落ちてきた。

ペコリーヌ「うわー!!」

キヤル「うわああ!!」

コツコロ「…!!?」

ユウキ「おー。」

悟空「ありや思いつきりぶつかってんぞ。」

しかし、

??? 「ハニヤフニヤ…」

悟空「こいつ起きてねえな。」

??? 「フガ!…あれ?なんでこんなところに…?」

鼻風船が割れ、目を覚ます。

ペコリーヌ「大丈夫ですか?貴女、あそこから落ちてきたんですよ?」

コッコロが指を指してその少女は驚いた顔になる。

??? 「ええー！また、私空を!？」

キヤル 「また？」

??? 「ああ、気にしないで！私はハツネ！ちよつと寝惚けてただけの普通の女の子だから！」

悟空 「おう、そっか！なら大丈夫だな。」

キヤル 「ハツネ：確か、フォレスティエのメンバーの？」

またもや場面は移り変わり、激しい戦闘が繰り広げられていた。

??? 「タイミング合わせて！シオシオ！」

シオリ 「はい！マヒルさん！」

牛の被り物に青髪、この少女は『マヒル』という。

そして：

マヒル 「フォークスラッシュ!!」ガキン!!

もう一人の邪悪な方のリマに罅迫り合いになる。

そこをシオリは弓を引き、外さない。

シオリ 「！」ヒュン



揺れ動いた……そして、全てを割いた……  
シオリ「……………ハッ……」

うわあああああ!!!

そしてそれはシオリに直撃してしまった。

辺り一帯が土煙に覆われ中から一人の女性が現れた。

???「楽しそうな催しが行われているではないか。あながち、私の勘も的外れではなかったようだ。」

そう言つて歩み寄ってくる女性から放たれてくるオーラは強者のもの。邪悪なリマたちを概念ごとねじ切つてしまうほどの力。とてつもなく強大なことがわかる。

リマたちはただ座つて見ているだけでしかなかった。

???「初めまして、かわいいビーストたち。私は、『クリステイナ』さあ立ち上がるがいい！まだ踊れるだろう？」チャキン

私をガツカリさせないでくれ……



悟空「……!今は……」

ハツネ「どうかしたの?」

悟空はすぐにも向かおうと額に二本指を立て瞬間移動の準備をしていた。

ペコリーヌ「やっぱり何かイケないことが起こってるんですか!?!」

コッコロ「村に被害が出ては困ります……私達も同行しましょう。」

キヤル「ハアツ!?!何言ってるの!?!せつかくここまで来てやつとクエスト受注したっていうのに!?!」

コッコロ「ですが、悟空様の力なら、迅速に対応出来るかと。」

キヤル「まあ、それもそうだけど……」

悟空「……」

悟空はすぐさまにでも瞬間移動をして原因を追求したかったが、コッコロの一言によつてそれをやめた。

それはなぜか……?

悟空(……:たしかにコッコロが言ったとおりにすりゃいいっちゃいいし、村にも被害は出ねえ……:けんど、それだといつ等がおらの力に頼りっぱなしになっちゃう。ここは少し見送るか……)

ハツネ「なんだか不安になってきたなあ…久しぶりに妹にも会えるんだけど、ちよつとね。」

ペコリーヌ「妹さんがいらつしやるんですか?」

ハツネ「そうなの、エリザベスパークにね。病気で療養中だったんだけど、少し具合が良くなったみたいなの…」

悟空「…ッ!…まずい!!」ピシユン

ペコリーヌ「わっ!ちよ、悟空さん!!」

キヤル「な、もう行ったの!?!」

コツコロ「私達も同行と言いたいところですが、居場所が…」

ハツネ「え!?!なににな!?!消えちゃったよ!?!」

甘ったれた考えを捨て、悟空は瞬間移動でその場から消えた…

シオリ「ぐ…さっきのは…一体…ガハッ!ガハッ!」

岩に横たわり、現状を把握しようとして試みるが病にうなされ、うまくいかない。

シオリ「お…姉…ちゃん…」

消え入りそうな声で姉を口にする。そこに一体の影が…

シオリ? 「ダイ…ジョウ…ブ…」

シオリ「……ッ!」

もう一人のシオリが居た。

シオリ? 「今日中……につか……ない……ト……ダイ……ジョ……ウ……ブ……」

一歩一歩と歩み寄ってくる……不気味に……

そして……

シオリ「お姉ちゃん……!」

ゼロ距離……ピツタリと顔を寄せてくる。

その瞳は赤い……いや、中身はどす黒く濁っているような……

とても禍々しい。

シオリは瞳に涙を浮かべ……姉に助けを求める……しかし、返ってくる声は……

ダイ………ジョウ………ブ………

自分自身の声だった……

そして二人は闇に包まれ……

消えた……



## 第7話～前編～ 異変

～回想～

「うわ～！ふかふかのもふもふだよお！」ダキッ

「えへへ、気に入ってもらえてよかった。」

ハツネとシオリは姉妹である。明るい性格の姉と、どちらかというとき静かな性格のシオリ：対比するようだがとても仲が良かった。ハツネは枕に顔を埋めるとシオリはそれを微笑ましく見つめる。

「ありがとねシオリ！最高のプレゼントだよ！」

「お姉ちゃんこそ、こんな素敵なプレゼントありがとう！」

シオリは両手にしている厚い本、辞書のようなものを持ちハツネに感謝の言葉を述べる。それに対してハツネも微笑む。

そして二人はベッドに横になりながら本を取り出し、二人で読む。パラパラと捲られていくページには生き物などが載っていた。

「きれいな動物や植物がいっぱい：いつかお姉ちゃんと一緒に見に行ってみたいな。」

「行けるよ！この牧場に来てからシオリんすっごく元気になったもん！行ける行ける」

！なんならお姉ちゃんがシオリン担いでバビユーンって飛んでいっちゃうんだから！」

「えへへ…ゴホッ！ゴホッ！」

「大丈夫!?今日は一日買物しちやったから…」

シオリをベッドに寝かせると少し苦しそうに横になる。

動悸、咳が時々激しくなる。放おつておいたらかなりの重病になることは重々承知だ。

「もう休もうね。」

「はあ…はあ…ごめんね、お姉ちゃん…心配ばかりかけて…」

そしてシオリは意識を手放す…

そう…こんな時間が続けば良かったのに…

ごめんね…

「頑張ろー！」

「おうー！」

採取クエストのため危険が伴う…というわけではないが重労働なものには変わりはない

い。採取クエストとはいえ油断は禁物だ。

因みに悟空はあのあとペコリーヌ達の元へ戻り、何もなかった、とだけ伝えた。

「水捌けの良い土でございますね。常日頃、手入れされておられるのでしょうか。」

「コッコロはそういう事に詳しいんだな。ちなみにオラだって畑耕してたからこんぐらのことは分かんぞ。」

それは前の世界での事。悟空は強さを追い求めるが故にそれ以外のことには興味はなかった。なので仕事もしていなかった。チチには叱られていた頃がとても懐かしく感じる。そんな悟空も職を就けなければならない、と奮起した結果、畑を耕すことにしていた。

野菜はとても評判が良く、大金持ちという風ではないが、生活が楽になった。悟空や悟飯：はもう自立していたため居なかったが悟天。サイヤ人の血を持つ者は良く食べる。

そのため食費が莫大というような数字で、チチを困らせていた。しかし、悟空のおかげである程度は稼げるようになったため以前のような不安はなかった。

「ええ！悟空さんもそんな経験が！」

「意外ね、あんた戦うこと以外に興味あったのね。」

「へへ！まあな。」

「それではとても力になります。悟空様がいれば百人力、いや千人力でしょうか？」  
「悟空すごい！」

そしてまた作業に取り掛かっているとここに…

「おはよう〜！」

「旅の疲れはとれましたか？」

「おう！元氣100倍だ！」

「今日は空飛んでこなかったの？」

「大切な収穫だからね！超能力使うと眠くなっちゃうから、今日は封印なの！」

「へえ〜そりなんか！…ておめえら何固まってんだ？」

「「ええええ?!?!」」

「あ…あ、ごめん！今の、忘れてえ！」

どうやら三人は超能力というものに驚いているようだ。悟空は驚く必要など無いだろう。前の世界ではそんなものを使う味方、そして敵もいたのだから。

悟空は気を応用して舞空術を使っているため納得はしていただけた。しかし、超能力となると彼女等のキャパシティを超えてしまうそうさ。

「ちよつと待って!!あれって何かの魔法とかじゃなくて、超能力だったの!?!」

「私、超能力者に初めて会いました。悟空様とも違われるのですね。」



「ま、オラのは気を使ってるだけだからな！んで、どうすんだ？もうバレちまったけどよ。」

「できれば、ここだけの話にしていただけじゃないでしょうか？」

「秘密つてやつですね、ヤバいですね！」

「軽いわね！あんたちよつとは動揺しなさいよ！」

「動揺と言われましても…悟空様が居られるわけですし…」

「んぐぐ…まあ、そりやそうだけど…」

なんとか丸く収まったようだが…どうやら村が騒がしい。それも…悪い意味で、だ。

「大変だー！！」

「ん…？」

「[[?]]」

全員が一斉に声のする方向へと顔を向けた。

声色からするにかなりの大事であるだろう。足早にしてその元へと移動した。

そこには…

リマ達を含めたギルドのメンバーが息を切らして横たわっていた。

「リマ様!?!」

「コッコロちゃん!?!」

「一体何が…」

「む、村に来る途中、おらたちと同じ姿をした奴らに襲われたと思つたら…黒ずくめの女剣士が現れて…」

「…」

「…」

牛の被り物をした青髪の少女が息を絶え絶えにしながら言う。様子からみてかなりの重症の傷。他のメンバーを見てもかなり…

「シオリ、シオリんは何処?!」

ハツネがそう問いたただすも、どうやら見失ってしまったようだ。今ここに倒れているのはリマ、リン、マヒルの三人だけ。そう、あとはあのシオリという少女が居ないのだ。「で、でもリマ頑張ったんだよ!ボロボロになるまで戦つて、あたしとマヒーをここまで運んでくれて…!」

するとコツコロは彼女達を魔法で治癒し始めた。その会話の中に、何故居るのか?と質問されたが、コツコロはクエストのため、と答えた。しかし悟空はこの言葉にはもう違和感が現れ始めた。

「どうやらクエストどころじゃ無えみてえだな…」

「悟空さん…」

ざわざわと周りがうるさくなつていく中で、悟空とハツネはある会話を聞き逃さなかつた。

「やっぱり噂は本当だったんだ…」

「近頃、森の中で自分と同じ姿をしたやつを見かけたつて話が後を絶たなくつてな…」

「そういや、宿屋んところの旦那も行方知れずらしい…」

「ちよつとごめんね…」

「悪い、ちよつとだけ視させてもらうぞ…」

すると悟空はリマの額に手を当て、彼女達の記憶を辿っていく。そこには、彼女達ともう一人の少女が居て、もう一人の彼女達と戦っている。しばらくすると黒ずくめで金髪の女剣士が現れ辺り一帯を更地にしてしまった状況が視えていた。

悟空が使つたのは記憶を読み取る、というシンプルな能力。戦闘では使えないが過去にこれで救われた戦いがあった。正に宿敵との戦闘だった。

「なるほどな…」

「もしかして、視えたの…?」

「ああ。それに、おめえも使えるみてえだな。確かにもう一人居たけど………逸れちまつたかもしかすると…」

「やめて!!」

「……まあ、オラ達でどうにかするしか無えみてえだな。」

ここは森の奥、そして黒ずくめの女剣士が自らの剣で斬った大木の上に座っている。どこか黄昏れているようにも見えるが、ブツブツと喋ったかと思うと剣を一振り、すると大木はみるみると倒れていく。そしてその際に、何かをぶった斬っている。

??? 「あれがシャドウか…あの御方は一体、何をしようとしているのかな。」

どうやら黒く、怪しく発光している怪物の正体はシャドウというようだ。そしてそれが人に化けている者でもある。

??? 「フフフ…まあいいさ、私の渴望を満たしてくれる存在はいないのだから………ん？」

どこかズレがある。彼女の記憶の中に忠告のようなものがあつたような気がする。そう、確かあれはキヤルという少女から告げられたものだ。確か彼女はこう言った。

あんたの満足いくような奴が”二人”いるわ…その内一人は規格外…あんたでも無理かもね。

確かこう言ったはずだ。

??? 「フン!!」

ザンツと手にしていた剣を振るえばシャドウ達がバラバラに切り裂かれていく。そしてその斬撃が森を揺らす。

森全体が揺れ、空気を割っていく。

??? 「さあ、盛大に行こうではないか」

女は黒く笑った。

ハツネは今すぐにもシオリを助けに行こうと豪語するものの周りからは止められる。意地でも行こうとするハツネに周りも困惑する。

「うくん、まつ、いつか…なあなあペコリーヌ」

ペコリーヌ「あ、はい…何でしょう」

悟空は取り敢えずペコリーヌに相談することにした。

悟空は一般的にクエストの事を理解していない。重要性もそこまで…だからこそ、クエストは中断していいものなのかが分からなかった。どうやら、リマ達もシオリの救出に参加するらしい。いや

、当たり前かもしれないがリマ達は傷を負っている。

「シオリちゃん、お姉ちゃんに会えるのを楽しみにしてたから!」

この一言が、ユウキ達をひと押しした。

「僕も行く！」

ユウキの一言に迷いなど一切無かった。なぜなら……

「BB団は困った人を見捨てない！」

単純であるから。

「っ！　そ、そうでした。私達はBB団……困った人が居れば何を言わずとも助ける……！

そういうものに我々はなりたーい！」

アオイも鼓舞されて、普段の根暗な態度とは一変、やる気に満ち溢れておりユウキに感化されていた。

「みんな……」

「おめえが妹を心配してんのはよく分かった。まだ会って間もねえけんどき、困ってる奴がいたら見捨てられねえんだ。オラ達も行く。」

「ええ、悟空さんの言うとおりです。」

「……………ありがとう。」

ペコリーヌもこれに肯定してハツネ達との同行への意思を表す。しかし……

「キヤルちゃん私達も……」

振り返るとそこには反方向へと進むキヤルの姿があった。こちらに背を向け、少し

ずつ小さくなっていく。

「……キヤルちゃん？」

(……また、なんか隠してるみてえだな。)

早くも悟空はその異変に気がつき始める。

同時刻……ランドソル城内にて、不気味な影が一人の、人間？に、取り込まれていた。その影は人の形をしていて「やだなあ……変だなあ……」とネガティブ発言を連呼していた。ただそれだけ。しかし、次第に形が壊れていき煙となる。その煙は玉座に鎮座した一人の人間？へと吸い込まれていく。

く 場面は再び森へ く

「森の気配が可怪しいだけじゃねえ。全体的に不気味だな。」

「やはり、悟空さんもそう感じられますか？」

「ああ、やけに静かすぎる。」

ハツネやアオイを含めた一行は早くも森の異変へと気づき始めていた。

「私、空から見てくるね！」

「んじゃあ、オラが飛んで見てくる！」

二人の意見が合致した。

「あ」

悟空とハツネは顔を見合わせながら気まずそうにする。

「…なんか、おめえとオラの能力って似てんだな、ははは…」

「う、うん…キャラ被り…かなあ？」

「リママ!?二人とも空飛べるの?」

「確かにどこか似ていますね…」

「僕もとびたーい!」

二人は上空へと移動し、辺りを搜索する。

(シオリン、何処に居るの…?)

「うーうーん…:…:…:怪しい気、怪しい気、怪しい…:…:つ危ねえ!」

直後、ハツネ目掛けてどす黒いオーラを纏った矢が向かってきた。

「きゃっ!」

咄嗟にシールドを展開し、防御することに成功する。

(今…のは…)

「!おめえ、大丈夫か!」

ハツネは糸が切れたかのように落下していく。検討がつくのだろうか、何かを確信し



たような表情を見せた。

(場所は分かった……こいつを降ろすしかねえな。)

悟空は落下していくハツネを抱え、地上へと降りるのであった。

「……………」

一人の少女が弓を構えていたがそれを解く。手応えを感じなかったのだろう、オマケに標的も見失った。しかし表情を変えることは一切無い。まるで機械のように、淡々としていた。

「おい、おい！ハツネ、大丈夫か!？」

「……………ん……………」

悟空に抱えられていたハツネはゆっくりと目を開ける、視界に映っていたのは勿論悟空であった。

「悟空さん……」

「狙われてたみてえだな。オラの反応が遅れちまったばかりに……」

「ううん……いいの……それより……」

先程ハツネを捉えていた矢が側に落ちていた。認めたくは無いが、それが彼女の物で

ある事を確信してしまった。

「……こいつか……」

「っ！」

茂みから出てきたのはハツネを狙っていた張本人、獣人のような見た目をしていて、どこかハツネを重ねてしまうような容姿。

「そ、そんな……」

ハツネの瞳孔が開かれ、事実には背きたくなるような上擦った声が出る。そして悟空は確信する。ハツネと似た気、異様な物が混ざった気を……

「まさかおめえだったとはな……」

そう、ハツネの妹である『シオリ』だった。彼女の瞳は朱色のように妖しく光り、身体全体が悟空の使った界王拳のように赤く染まる。彼女の瞳には姉としてハツネを捉えているものでは無かった。獲物としてハツネが映っていた。